渋松対談

青盤

渋谷陽一＋松村雄策

rockin'on

CamScannerでスキャン

もくじ

まえがき　6
松村雄策がかつてロック・ミュージシャンだったことを御存知ですか？　10
渋谷松村五十五歳、今日も白髪でテロリズムやってます　16
マイケミ、クイーン、JB……今月の渋松は強引につなげてみせます　22
渋谷松村五十五歳、再結成格付け会社始めました　28
昨日の敵は今日の友、ロック同窓会絶賛開催中です　33
消臭スプレーを持ってロック・コンサートに行こう！　39
格差社会を是正して、ツェッペリン再結成を実現させよう！　44
どうしてロック・リスナーは思春期から逃れられないのか　49

CamScannerでスキャン

気をつけよう、失った頭髪と原盤権は元には戻らない 54
社員を見る目はないですが、いいバンドなら見抜きます 59
気になるのは、ロック・スターの死亡率より生き延びたツェッペリンの方だ！ 64
ネット・ラジオもジャニーズも、ビートルズ一本で渡り歩いてきました 70
楽しみも不安も先延ばし、ツェッペリン・モラトリアムに想う 75
再結成ツアーやってくれたら、その責任はすべて負います!? 80
どうしてミュージシャンは自伝を出したがるのか 85
渋ペ対談顛末記、詳しくは二〇〇八年四月号をどうぞ 91
渋谷陽一、ディスク・ガイドでもツェッペリン書いてます 97
渋谷陽一があなたの街のレコード店に現れます？ 103
渋谷と松村、特に仲が悪いというわけでもありません 108
肩書きに「ブロガー」って付け加えてもいいでしょうか 113
ブログのネタになるかどうかが、日々の重要な価値基準です 119
渋谷陽一五十七歳、ロック・フェス最長不倒記録更新中です 124
今月はロック評論家同窓会も開催しております 29

CamScannerでスキャン

[illegible] 136
[illegible] 141
[illegible] 146
[illegible] 151
[illegible] 156
[illegible] 162
[illegible] 167
[illegible] 172
[illegible] 177
[illegible] 183
[illegible] 188
[illegible] 194
[illegible] 199
[illegible] 204
[illegible] 209
[illegible] 214

CamScannerでスキャン

還暦目前、人生の晩秋、いま思う「これが人生」…… 219
アンガス・ヤング六十四歳、今日もズボンを下ろします 225
人生は都合により休載してすみませんでした 231
リック漫談のワールドカップ、終わりなき延長戦に突入中 238
還暦十両の横綱ですか、リアンを追い求めてもいいですか 243
アリスにイラはかりアップするので、心配になりました 249
どうでもいい人で、終わったからは辛苦感謝でお願いしますね 255
人、一度も口説しなかった、バンド、伝説なるか!? 260
内緒「ニーロウカー」を結成しました 265
ホットメイト・ジャットか、今すぐに出会いしていますか? 270
ドイツ一の事件ではオリンピックにおいて、今時はわりとされました 275
はかいこればはいかがくこの時間の口紅は忘れないようにお願いします 281
ドームだ「スパンダ」……最強は本音にいつでもお会いは名前はすべてこんだー 286
あとがき

まえがき

三十五年前、この連載が始まった時、これほど長く続くとは、地球上の誰も想像しなかったはずだ。それがここまで続いたのは、ひとえに読者の皆さんの支持のたまものだと、感謝しています。

少し興醒めな事を書けば、対談当事者には続けていこうという内在的な動機はほとんどない企画である。読者の方に支持されなければ、何十年も前に終っていただろう。面白いという声に励まされ、踊らされここまで続いてしまった。

正直に書けば、何度か終ってもいいと思った事がある。もっと正直に言えば、もう終りたいなと思った事がある。そして六十歳になった時、もう終わろうと思った。というか続けられないなと思った。

この単行本を作り、最終回に書こうと思っていた事を書き、それで渋松の幕を降ろそうと思ったのだ。

結論から言うと、続ける事にした。ただ最終回に書こうと思った事を書いた上で続けようと決めた。それを書いてからなら続けられる気がしたのだ。

この対談は、実は対談ではなく、僕や松村が一人で書いていた創作対談なのだ。

ロッキング・オンに入社した社員が、例外なく入社後に一番驚くのがこの事実を知った時だ。たいてい目が点のようになる。

いつからこうなったか正確には思い出せないが、この単行本上下巻に収められているものは全て一人で書いた架空対談である。僕が書いたと分るのは七十三本だ。最近は架空である事を楽しんでいた。それを読んだ方が信じて面白がってもらえると、とても嬉しかった。余りいい表現ではないけれど、腕のいい詐欺師になった気分を楽しむ事ができた。

僕は、自分や松村だけでなく社員も登場させた。勿論、それも架空のキャラとしてだ。言うまでもないがウチの社員はそんなに面白くない。リアリティーを感じてもらえるように実名にしたが、設定したキャラは本人とは似ても似つかないものだ。

CamScannerでスキャン

何んでそんな事をしたのか。細かい理由はいろいろある。スケジュールの調整、テーマの設定、そんな事が難しくなって来たからだ。しかし大きな理由は、対談を面白くするにはそうする方がいいと考えたからだ。過去のものを読み返してもらうと分るが、渋松対談は今のものが一番面白いという自信がある。

こうした長寿連載の場合、たいてい昔の方が面白かったという意見が出る。しかし、この渋松に関してはほとんどない。ひょっとすると僕の耳に届いてないだけかも知れないがそうではないという自信がある。長年、こういう仕事をやっていると、その辺のチェックはできるようになっていく。間違っていないと思う。そして、だからこそこのスタイルを変える事ができなくなってしまった。

ただそうした倒錯した喜びもこう続けていると何んだか息苦しくなって来てしまった。自分の詐欺行為に疲れてしまったのだ。自白したくなって来てしまったのだ。自白してしまっては詐欺でなくなってしまう。どう考えてもネタバレは最終回だ。しかし終る決断もなかなかできない。それで結局、こういう形になった。

CamScannerでスキャン

前に書いたように、新入社員はこの渋松が架空対談である事を入社後に知ると、例外なくとても驚く。ただ、だからと言ってこの渋松が面白くなくなるかと言えば、そうでないようだ。むしろ、より倒錯した面白さを感じて読んでいるようだ。

そんな様子を見ていて、これはもっと高度な詐欺行為へとレベルアップできると思ったのである。つまり、騙されている側が、それを分って騙される事を楽しむ、一種のプレイのようなものになるのではと考えたのである。果して、そんな見事にうまく行くかどうかは分らないが、やってみる事にした。それがこの単行本である。

僕の書いた渋松対談にはSを付け、松村が書いたものにはMを付けた。この事によって二回楽しんでもらえるのではないか。まずは普通に読んで、次はそれを一人で書いている事の馬鹿らしさを想像して、二回笑えるのではないか。

これからロッキング・オン本誌での渋松対談もそうしていくつもりだ。もう、そんな事なら止めろという声が大きくなったら、すぐに終了したいと思います(笑)。

渋谷陽一

松村雄策がかつてロック・ミュージシャンだったことを御存知ですか？

松村——コンニチハ、ジャイルズ・マーティンです。

渋谷——誰なんだよ、それ。知らない名前、出すんじゃないよ。

松村——琴欧洲の本名だよ。

渋谷——へえー。

松村——ウソに決まってんだろ。

渋谷——……。

松村——ジャイルズ・マーティン知らないのかよ、お前は。

渋谷——キング・クリムゾンにいたことあるか？

松村——ないよ。ビートルズの『ラヴ』のプロデューサーだよ。

渋谷——ああ、ジョージ・マーティンの息子か。だけど、『ラヴ』のプロデューサーはジョージ・マーティンで、息子はアシスタントぐらいのものな

んじゃないのか。

松村——いや、ジョージ・マーティンはもうあんまり耳が聴こえなくて、実質的にジャイルズひとりでやったらしいぞ。

渋谷——耳をやられちゃうんだよな。音楽関係者には多いからな。

松村——ピート・タウンゼントもそうだっていうし、ブライアン・ウィルソンも若い頃から片っぽだけしか聴こえなかったんだってな。『ペット・サウンズ』がモノラルなのは、そのせいだっていう噂もあるぞ。

渋谷——どういうことだよ?

松村——だから、ステレオにしたって、ブライアン・ウィルソンにはモノラルにしか聴こえないんだよ。それだったら、わざわざステレオ・ミックスを作ることもないだろう。

渋谷——そんなわけないだろう、アホか。

松村——だから、ジョージ・マーティンはもう何年も前からプロデューサーをやってないんだよ。

渋谷——そういえば、これが最後のプロデュース作品っていうのがあったな。

松村——一九九八年の『イン・マイ・ライフ』だよ。あのとき、インタヴューしたんだけど、やっぱり身体が音楽みたいな人だったな。

渋谷——身体が音楽ってどういう人なんだよ。

松村——だから、歩くと四分音符が落ちてくるんだよ。

渋谷——ウソつけ。

松村——ウソに決まってんだろ。

渋谷——………。

松村——インタヴューが終わったあとにサインを頼んだら、俺の名前を日本語で書くって言って、すごい苦労して〝TO雄策〟って書いてくれたぞ。

渋谷——お前の名前は、ムダに画数が多いからな。

CamScannerでスキャン

松村──その後にカメラマンも組んで、「井上」っていう名前だって分かったら、「イッツ・イージー」って書いてたぞ。

渋谷──お前もカメラマンで、コンビでも組んでるのかよ。で、何が言いたいんだよ。

松村──それを思うと、渋谷も陽一も中途半端だよな。なんとかしろよ。

渋谷──大きなお世話だ。だから、ジャイルズ・マーティンはどうしたんだよ。

松村──いや、やっと注目されたなと思ってさ。だいたい、クーラ・シェイカーのデビュー・アルバムのプロデューサーって、ジャイルズなんだよ。それでレコード会社と契約できたんだけど、正式なレコーディングでは外されちゃったんだよ。可哀そうだったんだよ。世間では、東の安寿と厨子王、西のジャイルズ・マーティンって言われてたんだぞ、可哀そうなのは。そういうわけだから……。

渋谷──ウソに決まってんだろ。

松村──……。

渋谷──まだ、なんかあるのかよ。

松村──ジャイルズが子供の頃、ベイ・シティ・ローラーズが大人気で、父親に訊いたそうだ。「お父さんはいつもビートルズはグレイトだって言ってるけど、ベイ・シティ・ローラーズと同じぐらいグレイトなの？」って。

渋谷──ビシッと言ってやったんだろうな、ジョージ・マーティンは。

松村──いや、苦笑いして、「たぶんね」って言ったんだって。いい話だろ。

渋谷──ひとりで、ホノボノしてんじゃないよ。だけど、このあともビートルズのリリースって、続くのかな。

松村──それは特集のほうでも書いたけど、ずっ

と続くね。

渋谷――何が出てくるんだろうな。

松村――だから、そこらへんは非常に気を遣ってるな、リリースに。『イエロー・サブマリン～ソングトラック～』は映画のDVD化に合わせたし、『ビートルズ1』は世界的なベスト・アルバム・ブームに合わせたし。

渋谷――『レット・イット・ビー…ネイキッド』は？

松村――あれは、きっと『レット・イット・ビー』のDVDが出ることになってたんじゃないかな。それが、なんらかの事情で中止になったんだろ。

渋谷――やけに、自信たっぷりな言い方だな。まあ、根拠もないのに自信たっぷりなのは、いつものことだけどさ。

松村――ビートルズの『アンソロジー』を作ったボブ・スミートン監督が、あの頃『フェスティバル・エキスプレス』を作ったんだよ。

渋谷――ああ、ジャニスやデッドやバンドが出た映画な。

松村――そう。で、そのときのインタヴューで、「今、『レット・イット・ビー』をやってる」って言ってるんだよ。

渋谷――待てよ。『レット・イット・ビー…ネイキッド』も『フェスティバル・エキスプレス』も、二〇〇三年じゃないか。

松村――だから、きっと他の監督が『レット・イット・ビー』をやっていて、完成できなかったんじゃないのか。それで、ボブ・スミートンがやることになったんだろ。

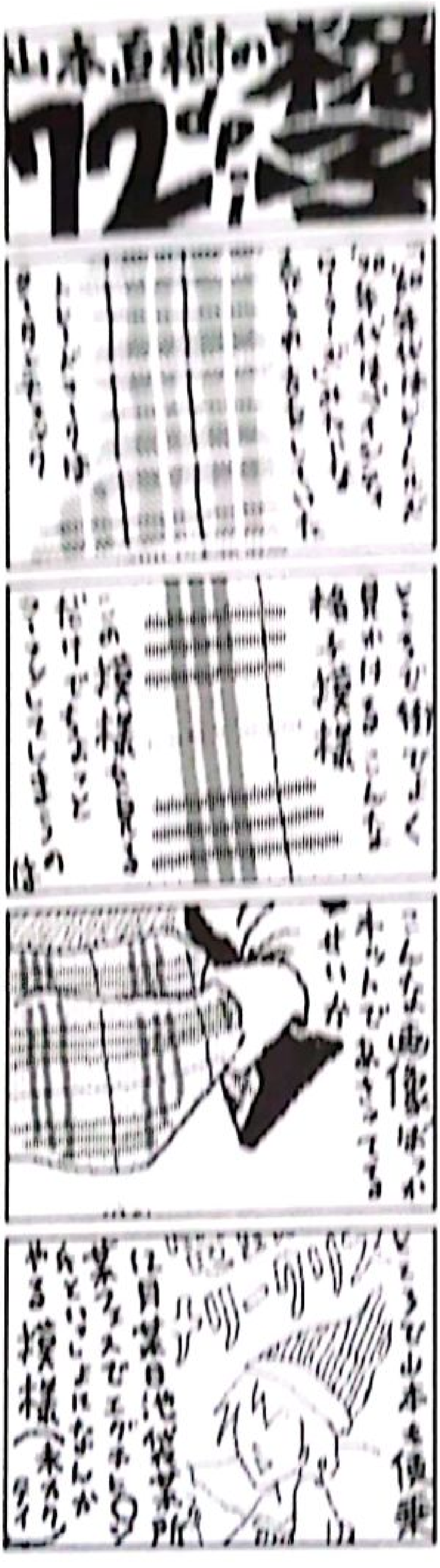
渋谷――じゃあ、『レット・イット・ビー』も新しいものになるのかよ。

松村――フィルムは山のようにあるんだろうから、まったく違うものになるんじゃないの。

渋谷――しかし、根拠がないな、お前の話は。す

CamScannerでスキャン

べて、推測じゃないか。
松村――こういうふうに考えないと、これからのビートルズの動きは見えないんだよ。だって、『ラヴ』にしたって、ジョージがOKしたっていうけど、ジョージは二〇〇一年に亡くなってるんだよ。その直前の話だとしても、もう五年も経ってるんだ。ひょっとしたら、十年前のことかもしれない。それがどうして今になったんだろ。なあ、お前はどう思う?
渋谷――あのなあ、俺はお前みたいにヒマじゃないから、そんなこと考えて眼を血走らせたりしてらんないの。それじゃなくても[注]〝COUNTDOWN JAPAN〟で時間がないっていうのに。
松村――ああ、お前もイヴェントやるんだってな。俺もやるんだよ。
渋谷――……もう何年もやってるわ。何やるんだよ、お前は。
松村――元ピールアウトの近藤智洋とコイルの岡本定義と大塚利恵と俺の四人で、下北沢のライヴ・ハウスでやるんだよ。
渋谷――……あのなあ、〝COUNTDOWN JAPAN〟は十二月二十九日から一月一日までの四日間で、毎日三十バンドぐらい出るんだよ。それも、東京と大阪でやるんだよ。
松村――数が多くて日数が長けりゃいいってもんじゃないだろ。俺達のはひとりずつソロでやったあとに、全員でセッションするんだよ。こないだそのセッションで何を演奏するか相談したんだけど、決まらないから新曲を作ることになったんだ。三人で曲を書いて、それに俺が詞をつけることになったんだ。すごいだろ。そのライヴのための、オリジナルだぞ。
渋谷――……お前、作詞するの、何年ぶりだよ?
松村――二十年ぶりぐらいかな。前に早川さんに



CamScannerでスキャン

渋谷松村五十五歳、今日も白髪でテロリズムやってます

渋谷——コンニチハ、ボブ・ディラン六十五歳です。今年のベスト・アルバムに選んでくれてありがとう。

松村——なんのベスト・アルバムだよ。

渋谷——『ローリング・ストーン』と『スピン』のベスト・アルバムが発表されて、『ローリング・ストーン』(以下RS)のほうで一位になっているんだ。

松村——CDも売れたみたいだな。

渋谷——そうなんだよ。三十年振りでビルボードの一位になったってすごいよな。

松村——高石ともやが今のオリコンで一位になるみたいなもんかな。

渋谷——かなり違うし、とりあえず高石ともやを知っている読者はいないと思うけど。

松村——でも、マラソンは速いぞ。

渋谷——だから、なんなんだよ。

松村——でも、いいアルバムだよな。

渋谷——いい作品だし、分かりやすいんだよ。ディランは一貫していい作品を作ってきてたけど、そんなに分かりやすくはなかったから、今度はその分かりやすさが良かったんだと思う。でもジャケットとか見ると、異様に老け込んでいるんだよな。

松村——だって、実際に歳じゃないか。

渋谷——いや、これは変だね。必要以上に老け込んでる。意図的に老け込んでるよ。

松村――なんだよ意図的に老け込んでるって。

渋谷――ディランって、実は歳より若く見えるんだよ。ステージで見ると、身体の線はシャープで痩せているから若々しいし、顔もあいうエキセントリックな人独特の、なんだか年齢不詳な感じだし。このジャケットは老人のコスプレだな。

松村――なんで老人が老人のコスプレするんだよ。

渋谷――これが作戦だね。必要以上に老け込んで、自分が老人だってイメージ戦略を展開してるんだよ。だから、ディランって今でもすごく青春的な表現者なんだよ。それは優れたロック・ミュージシャン全般にいえることなんだけど、ニール・ヤングにしろスプリングスティーンにしろ青春的な怒りをテーマにしたアルバムを出したじゃないか。

松村――反戦アルバムムな。

渋谷――そうそう。その中でもディランは一番青春的なんだよ。常に生きることに悩んでいるし、社会との違和を感じているし、それは死ぬまで続くと思うんだよ。おまけに代表曲の〝ライク・ア・ローリング・ストーン〟にしろ〝風に吹かれて〟にしろ、青春がギター弾いて、ハーモニカ吹いてるみたいな曲ばっかじゃないか。

松村――まあな。

渋谷――絶対にディランはそれが嫌で、早く老人になりたかったんだと思うね。

松村――本当かよ。

渋谷――このジャケットを見て、そう確信したね。今度のアルバムもすごく青春的な作品なんだけど、このイメージ戦略で老成した作品だと誤解されるわけよ。

松村――どんなメリットがあるんだよ。

渋谷――メロディーも聴きやすいから、みんな飲みやすい健康薬だと思って飲んじゃうわけよ。ところが実際はすごい毒性を持った劇薬なわけだな。今頃、バタバタと倒れてるね、聴いた奴は。そこが狙いなんだよ。

CamScannerでスキャン

松村――テロリストじゃないんだから。
渋谷――優れたロック・ミュージシャンは多かれ少なかれ音楽のテロリストだって。人を殺さず傷つけず、でも何かを変えてしまうんだよ。そこをディランは老人ってステージで巧妙にやったわけだよ。だいたい歳取ってるのに若作りしてる奴にろくな奴いないぜ。俺たちも老け込もうぜ。
松村――もう老け込んでるから大丈夫だよ。
渋谷――電車で席譲ってもらったり、いろいろメリットあるかもな。
松村――カーカで、そこまで老け込めるかよ。
渋谷――髪とか染めるなよ。
松村――染めようにも、その髪がなくなってきてるからな。
渋谷――……。
松村――そこで黙るなよ。つっ込むところだろう。
渋谷――つっ込めなかった。ごめん。
松村――謝るな！ 泣くぞ。でも、お前も白髪なんか、まっ白だな。
渋谷――老人コスプレだな。
松村――コスプレじゃないだろう。
渋谷――いや、老人っぽく見えるほうが得な時は伸ばすんだよ。一日で伸びるから便利だよな。でも、ラジオに来たハガキに、渋谷さんも初老になって、いろいろ大変でしょうが頑張って下さいって、書いてあったんだよ。10代や20代にとっては、本当に俺たちは初老なんだろうな。
松村――昔なら定年だもんな。でも、ロックの世代、定年パワーのほうが迫力ないか。
渋谷――あるある。RSも、1位がレッチリ、2位がソニック・ユースだもんな。そのランキングもどうかと思うけど、ベスト10の平均年齢、もう五十歳近いぜ。
松村――クラプトンも、一カ月間くらい日本にいて、東京だけで十万人以上動員してなかったか？
渋谷――あれはあれで別の老人問題だと思うけど、

すごかったな。驚いたのは、クラプトンがやたらギター弾いてるんだよ。

松村——そりゃ弾くだろう。

渋谷——いや、そうでもなかったんだよ。他のギタリストに弾かせて、自分はサイドに回ったりしてたんだよ。

松村——ペイジ・プラントのツアー始めた頃のジミー・ペイジみたいだな。

渋谷——あれは違うの。あの時のジミー・ペイジは指が動かなかったから、サポートを入れてたんだよ。ツアーの途中から動くようになったんで、いなくなったぜ。

松村——なんだそれ。

渋谷——クラプトンは動くのに弾かないんだよ。デイランの青春的イメージじゃないけど、早弾きのクラプトン的なイメージが嫌だったんじゃないか。すごく腕のいい若いギタリストを二人連れてるんだけど、クラプトンが弾きまくってたな。本来の自分をちゃんと出していく覚悟ができた感じで、やたら気合いの入ったライヴだったぜ。

松村——お前、あまりクラプトン好きじゃないのに好意的だな。

渋谷——今回はな。前にも言ったけどクラプトンと客のなれ合いみたいなのが嫌だったんだよ。なんか緊張感のないライヴやって、客は退屈して寝てんのに、曲が終わると大拍手みたいな、結構駄目な大人のロック空間を作ってたんだよ。

松村——なんだ、大人のロックって。

渋谷——最近増えてるじゃないかよ。中年のロック・オヤジ対象のただ懐古的な雑誌。『大人のロック』とかいうタイトルのがあるんだよ。

松村——ロッキング・オンもクラッシュとか表紙にして大人のロックじゃないか。

渋谷——確かに今洋楽ロックで商売しようとすると、ロック中年を無視できないからウチもやるんだけど、やっぱり今のロックとのかかわりの中で見る視点が

ないと、本当に単なる懐古趣味だよな。ボブ・ディランみたいに老人コスプレでテロリストやるくらいのガッツがないとな。

松村――クラプトンはテロリストなのか？

渋谷――それは違うけど、J．J．ケイルと今年作ったデュエット作が面白かったな。

松村――〝コカイン〟も〝アフター・ミッドナイト〟もJ．J．ケイルの曲だぞ。

渋谷――知ってるよ、そんなこと。でも、クラプトンはそうやってJ．J．ケイルの曲をカヴァーして自分のライヴでの定番にしたり、代表曲にしたりしてるんだけど、一緒に本格的にアルバム作ったのは今回が初めてなんだよ。

松村――ちょっと意外だよな。

渋谷――そうそう。ライヴで一緒にやったりはしてたんだけどな。で、このアルバム聴くとなんでクラプトンがJ．J．ケイルのことが好きなのか分かるね。

松村――なんでなんだよ。

渋谷――J．J．ケイルって、ものすごく楽観主義的な歌詞を書くんだよ。

松村――ブルースって、暗いパターンと明るいパターンがあるからな。

渋谷――そうそう。金なんかなくてもいいのさ、クレジット・カードで使っちまえ、革命が起きたら返さなくて済むぜ、とかムチャクチャなんだよ。まるでお前みたいだぜ。

松村――どこがだよ。

渋谷――とにかく厳しい人生だけど、考えたって仕方がない、行くだけ行くさって、そういう世界観なんだな。クラプトンは自分の娘が可愛いとかマイホームな歌を作ってんだよ。

松村――全然違うな。

渋谷――そうなんだよ。でも、これラジオでも言ったんだけど、実際の人生はクラプトンは、まさに酒と女とドラッグとロックンロールなわけじゃないか。なかば廃人みたいになっていた時期もあるし。J．J．

ケイルより、全然J.J.ケイル的な人生を歩んでいるわけだよ。

松村——確かに。

渋谷——だから、J.J.ケイルが歌うような人生は、まさにクラプトンの実人生で、J.J.ケイル本人よりも、その歌詞のリアルを感じるんじゃないか。

松村——それでJ.J.ケイルが好きなんだ。

渋谷——俺はそう思う。ただ、日本でのクラプトン人気って、もっと懐古的でレイドバックしたもんだよな。本来のロック的なテロリズムを持った大人のロックをもっと広めなくちゃ駄目だぜ。どうなの大人として?

松村——あっ、今、白髪が抜けたぞ。なんかすごく大人なロックを感じたな。

渋谷——……………。 S

マイケミ、クイーン、JB……
今月の渋松は強引につなげてみせます

渋谷――コンニチハ、フレディ・マーキュリーです。JBがやって来て、こっちはとても騒々しいよ。

松村――JBって、なんか死なないんじゃないかと思ってた。

渋谷――JBだって人間なんだから死ぬだろう。

松村――でも、急だったし、七十三歳って若いよな。

渋谷――確かに。病気とか、余りそういう話もなかったから、驚いたな。でも、アメリカの追悼ニュースとか見てると、JBって元祖ギャングスタって感じだよな。

松村――なんだよギャングスタって。ギャングスターと、どう違うんだよ。

渋谷――いわゆるギャング、犯罪者系のヒップホップ・ミュージシャンの事をギャングスタって言うんだよ。クスリのディーラーやっていた連中も多いからな。

松村――JBはディーラーはやってないだろう。

渋谷――でも、ドラッグのトラブルで警察に踏み込まれた時、拳銃で応戦したんだぜ。いろんなミュージシャンいるけど、現役時代に警官と撃ち合いやった奴はいないと思うな。

松村――そのギャングスタはどうなんだよ。

渋谷――50セントなんか、体中に撃たれた痕があ

CamScannerでスキャン

るけど、それはデビュー前の話で、今はさすがに警官と撃ち合いはしないだろう。

松村――さすがJB。

渋谷――確かに、さすがだけど、それってどうなんだ。

松村――JBならいいんじゃないか。

渋谷――そうだよな、JBってなんでもありって感じだもんな。刑務所でも、歌ったり叫んだりして、他の囚人からうるさいってクレームが出て、独房に入ったらしいし。

松村――エネルギーが半端じゃないよ。

渋谷――音楽的な業績も巨大で、それを話し始めたらキリがないんで、今回は止めとく。

松村――なんだ、今回の渋松はJBじゃないのかよ。

渋谷――いや、フレディ・マーキュリーというかクイーンの話をしたいんだ。

松村――なんかクイーンの話題とかあったか？

渋谷――いや、クイーンそのものというよりクイーンに影響された若手のバンドが、最近盛りあがってんだよ。マイ・ケミカル・ロマンスとか、パニック！アット・ザ・ディスコとか。

松村――いちいち名前が長いな。

渋谷――確かに。とにかく、そうしたバンドの人気が盛りあがっていて面白いんだ。

松村――全身タイツで歌うのか？

渋谷――それはないけど鼻血とか出すぞ。

松村――なんだ鼻血って。

渋谷――マイ・ケミカル・ロマンスのヴォーカルが、一時期鼻血のメイクに凝っていたんだよ。

松村――大丈夫かよ、そのバンド。

渋谷――大丈夫じゃないかもな。でも、基本思想はフレディのタイツに近いと思うぜ。

松村――鼻血がかよ。

渋谷――そうそう。どっちもカッコ悪いじゃないか。
松村――そういう問題かよ。
渋谷――いわゆるロックのマッチョ的なカッコ良さや、二枚目的な美意識とは全く違うところにいたじゃないかフレディ・マーキュリーは。
松村――まあな、ゲイである事や、ゲイ的な美意識を、フレディ・マーキュリーは全く遠慮というか、ためらい無しで爆発させていたからな。
渋谷――そうそう。デビュー当時は明らかにフリーキーな存在として扱われて、クイーンなんて単なる際もののバンドだったじゃないか。
松村――まあな。それでケミカル・ディスコはどうなんだよ。
渋谷――マイ・ケミカル・ロマンスな。このバンドはもともとはパンクというか、エモというか、そういう音の方向を持っているんだけど、同時にクイーンも大好きなわけよ。
松村――かなり距離があるけどな。
渋谷――でも、それってクイーンの現役時代を知ってる俺達の感覚で、今の若い連中にとっては、別に一緒になってもいいものなのかもな。
松村――本当かよ。
渋谷――半分、嘘かも。
松村――どっちなんだよ。
渋谷――若い連中にとっても、そりゃパンクとクイーンは、そう簡単には一緒にならないと思う。ただ、マイ・ケミカル・ロマンスは両方に自分達のリアルを感じたんだと思う。
松村――タイツと鼻血のリアルだ。
渋谷――まあな。マイ・ケミカル・ロマンスも、人気は高いけど子供向けのアイドル・バンドという認識が強いわけよ。でも、それはあえて、その路線に行ってるわけで、本来はシリアスでメッセ

ージ性の強いバンドでもあるわけ。

松村——じゃあ、なんで鼻血なんだよ。

渋谷——マッチョだったり、二枚目だったりする事にリアルを感じないからじゃない。自分達が好きなのは、ポップなメロディだし、ドラマチックなアレンジだし、大仰なエンターテイメント性だし、まさにクイーン的なものなんだよ。

松村——それがなんで鼻血なんだ。

渋谷——フレディ・マーキュリーは天然で、天才で、そしてあの時代だから全身タイツでナルシスティックにできたんだけど、今はそうはいかないんだ。

松村——よく分かんないな。

渋谷——確かに難しいんだけど、つまり変だと自覚しつつ、それを戦略的にやらなくちゃならないわけ。ここで全身タイツで登場しても、本当に単なる変な人になっちゃうだろう。

松村——鼻血も変だけどな。

渋谷——まあな、でもマイケミがクイーンに感情移入するのは凄くよく分かるよ。ポップでシリアスなものは、どこかフリーキーで、笑い者になってしまうという歴史法則の一番ラジカルな例だよ、フレディ・マーキュリーは。これも、いつも言ってる事だけど、フレディが死んだとき、マイケル・ジャクソンが「僕が彼を、どれだけ羨ましいと思っているか、誰も分からないと思う」というコメントを出したのは、なかなか感慨深いよな。

松村——どう羨ましいんだ。

渋谷——やっぱり、自分の異質性を、あれだけ大っぴらに表現できたからだろう。どんどんマイケルがフリーキーな事が明らかになっていってるけど、その前は徹底して彼は二枚目で、スターだったわけじゃないか。本来の自分を抑圧しながら表現活動を行なっていたわけで、それは天然なフレ

CamScannerでスキャン

ディが羨ましいだろう。

松村――マイケルはタイツを着たかったんだ。

渋谷――タイツを着たかったかどうかは知らないけど、フリーキーな自分をもっと正直に出せれば、こんな事にはならなかったかも。

松村――でも、正直に出されたら怖くないか。

渋谷――確かに、怖いかも。人気出なかったかも知れないな。それでマイケミなんだけど。

松村――マイケルと似てるな。

渋谷――似てねえよ。マイ・ケミカル・ロマンスは、今度の『ザ・ブラック・パレード』というアルバムで、本来のシリアスなメッセージ性を前面に出してきてるんだ。

松村――シングルのヴィデオ・クリップみたけど、なんだかホラーみたいだったな。あれがシリアスなんだ。

渋谷――そうなんだよ。あのホラー仕立てがまさにマイケミのクイーン的なところなんだけどな。あれは、社会的に異質なもの、それはマイケミ自身、あるいは我々ロックの聴き手って事なんだけど、それがブラック・パレードに参加して、自分達の価値観の中で正直に生きていこうってメッセージ・ソングなんだよ。それがゾンビっていうメタファーになっているんだけどな。

松村――異質なものがゾンビなんだ。

渋谷――そうそう。だからロックの異質性って、昔はもっと自然に表現できたわけ。でも今は難しくなってるんだ。だいたいシューゲイザーとか、駄目だろう。

松村――なんだよ、シューゲイザーって。

渋谷――クツの先ばっか見て演奏しているロック・バンドの事だよ。下向いて自閉的にロックしているナルシズムより、鼻血出して自分を笑い者にしてる方がよっぽど健全だろう。

CamScannerでスキャン

松村――よく分かんないな。パニックなんとかはどうしたんだ。

渋谷――これもアホらしいバンドで、レディングでは馬鹿にされて凄いブーイングを受けたみたいだな。

松村――これも鼻血か。

渋谷――こっちは二枚目でアイドルなんだけど、意図的にバカなイメージを打ち出しているな。こういう確信犯的なアプローチは面白いぜ。

松村――うーん、今回は分かったような分かんないような感じだけど、まあいいか。でもJBはもう一度観ておきたかった。

渋谷――そうだな。でもJBって、ひょっとすると最大の異質性を持った天才だったかも。

松村――フレディとJBのツー・ショット怖いな。

渋谷――怖い。■S

渋谷松村五十五歳、再結成格付け会社始めました

渋谷——コンニチワ、スティングです。ドゥードゥードゥー・デ・ダーダーダーは愛の言葉さ。

松村——何言ってんだよ。

渋谷——ポリスの歌詞じゃないか。

松村——知ってるよ、なんで日本語なんだよ。

渋谷——〝ドゥドゥドゥ・デ・ダダダ〟の日本語ヴァージョンってやつがあって、スティングが日本語で歌ってんだよ。きっと本人的にもファン的にもなかったことにしたい過去だと思うけど、俺は忘れないね。俺の番組で[注1]「ミュージシャンの汚点リクエスト」というのをやったら、リクエストが集中したぞ。

松村——お前はどういう番組をやってるんだよ。

渋谷——ロック偏差値の高い番組だよ。

松村——ただ性格が悪いだけじゃないか。

渋谷——ポリスの名曲も、歌詞が日本語になったというだけで、こんなにもダサくなるという事実は、日本語によるロックの困難度を象徴する事例として、その後の日本語ロックを考える、大きな問題として語り継がれているんだよ。

松村——語り継がれてないよ、そんなこと。

渋谷——でも、かなり厳しいぞ、愛の言葉は。うちの番組のロック偏差値は高くて、他にも汚点はたくさん来たぞ。

松村——わかったよ。お前の番組はDJもリスナーも性格が悪いわけね。

渋谷——失礼な、空耳アワーだって、ウチの方が先だったぞ。

松村——『タモリ倶楽部』の？

CamScannerでスキャン

渋谷――そうそう。あの企画が始まるずっと前に、同じようなリクエスト特集やってて、そこでもポリスの"ロクサーヌ"が、六さんに聴こえるって、ロック偏差値の高いリクエストが来てたぞ。ろーくさん！

松村――歌うな。

渋谷――面白いじゃないか。

松村――そういえばポリスって再結成されたんだよな。

渋谷――グラミーで大工の六さんを歌ったらしいな。

松村――いきなり"ロクサーヌ"っていうのが営業臭いな。

渋谷――コンニチワ、アクセル・ローズです。新作を十五年出さなかったら、すっかり中国の民主化は進んでしまいました。

松村――なんで中国の民主化なんだよ。

渋谷――十年以上前から、出す出すと言っているアルバムのタイトルが『チャイニーズ・デモクラシー』っていうんだよ。

松村――タイトルだけ決まっているんだ。

渋谷――そこが巧妙だと思わないか。普通、タイトルって最後に決まるじゃないか。

松村――確かに。

渋谷――だから、タイトルを言われると、なんだか、ほぼ出来ているような錯覚を持っちゃうわけよ。それでアクセルって十年以上商売している気がする。

松村――なんか四月にいきなり来日するんだってな。

渋谷――そのツアーのタイトルが「チャイニーズ・デモクラシー・ワールド・ツアー」っていうんだよ。

松村――普通、アルバム作ってから、それをタイトルにしたツアーをやるんじゃないのか。

渋谷――そうなんだけど、アクセルの場合、その幻想だけで商売してるわけ。

松村――サマソニに来たよな。思い出したように活動するよな。

渋谷――金がなくなると動くんだと思う。同じ年の

サマソニに出た日本人アーティストがトイレで一緒になって連れションしたって言ってたな。

松村——貴重な体験だな。

渋谷——意外と小さかったらしいぜ。

松村——チンコが？

渋谷——背だよ。

松村——新曲はやるのか？

渋谷——去年の十二月に、アクセルはファンに向けて、正式[注2]に三月六日にリリースするって発表したけどな。

松村——何を。

渋谷——アルバムだよ。『チャイニーズ・デモクラシー』だよ。

松村——じゃあ、一応はリリースした後のツアーってことになってるんだ。

渋谷——まだ三月六日にはなってないけど、この時点で何もないんだから、かなり怪しい公式ステイトメントだけどな。

松村——普通なら新曲主体になるよな。

渋谷——普通ならな。でも、タイトルだけで十五年間商売してること自体、まるっきり普通じゃないから。

松村——ひょっとして、すごい戦略家だったりしてな。

渋谷——コンニチワ、トム・モレロです。オーディオスレイヴではハーバード首席卒業の知性を活かしきれなかったのでレイジを再結成しました。

松村——今度はレイジかよ。

渋谷——なんかトム・モレロはブッシュを倒すのは今しかないからレイジをやるんだって言ってるらしいぞ。

松村——別にレイジ再結成しなくてもブッシュって倒れそうじゃん。

渋谷——確かに。アメリカでもそう言われているみたいだな。

松村——ザックは結局ソロ・アルバム出さなかった

よな。

渋谷――謎のシングル出しただけで、やっぱり一人じゃ厳しかったんだと思うよ。でもオーディオスレイヴも尻すぼみだったしな。だいたい演奏と歌のうまさ以外、何があるんだ、ってバンドだったし。俺はサウンドガーデンもレイジも好きだったんで、なんだかきつねに化かされた気分だったな。

松村――どういう意味だよ。

渋谷――うまい譬えが思い付かないんだけどポルシェとフェラーリが合併したんで、どんなすごいスポーツ・カーが出て来るかと期待したら、なんかやたら使い勝手のいいナベが発売されたみたいな感じだよ。

松村――なんでナベなんだよ。

渋谷――だから、きつねに化かされた気分なんだよ。

松村――余計にわかんなくなる譬えだな。

渋谷――コンニチワ、ビリー・コーガンです。ニュー・オーダーでギター弾くのに飽きたんで、スマパン再結成します。

松村――今度はスマパンかよ。

渋谷――でも、ビリー・コーガンとジミー・チェンバレンだけで、ジェームス・イハもお姉ちゃんもいないみたいだぜ。

松村――ダーシーな。

渋谷――すごい、なんで知ってるんだ。まあいいや、理由を知るのも怖い気がする。

松村――どういう意味だよ。

渋谷――とにかくスマパン再結成して、夏のヨーロッパのフェスに出るらしいぞ。

松村――レイジもコーチェラに出るんだろう。

渋谷――そうそう、ジザメリもクラウデッド・ハウスもコーチェラで再結成らしいぞ。

松村――確かに、フェスって、そういうものの舞台としていいよな。お前のフェスでやったら?

渋谷――コンニチワ、デヴィッド・リー・ロスです。道を歩いていても誰も気付いてくれなくなったんで、

ヴァン・ヘイレンに復帰します。

松村——だんだん、どうでもよくなってきたんだけど。

渋谷——コンニチワ、ポール・ウェラーです。僕を抜きにジャムが再結成されるらしいけど、よくわかりません。

松村——なんだそれ？ 誰が歌うんだよ。

渋谷——かつてのレコード会社の従業員らしいぜ。

松村——……。 **S**

注1：NHK-FMで毎週金曜二十三時から放送されている洋楽ラジオ『ワールド・ロック・ナウ』のこと。渋谷は性格が悪いですが、番組もリスナーも性格は悪くないので、是非聴いてください。

注2：延期となり、最終的には二〇〇八年十一月二十二日に無事リリースされた。

昨日の敵は今日の友、ロック同窓会絶賛開催中です

渋谷――コンニチハ、スティーヴ・ハウです。顔は老けたけど、ギター・テクニックはバリバリだぜ。

松村――今日はイエスかよ。

渋谷――違うんだ。今度はエイジアのギタリストとして来日したんだ。

松村――忙しいな。でも、エイジアなんて今は誰も知らないだろうから客入んないだろう？

渋谷――何言ってんだよ、東京厚生年金会館、超満員だよ。

松村――えっ、二千人以上エイジアを憶えている奴がいたんだ。

渋谷――二千人じゃないよ、厚年と渋公合わせて五回分ソールド・アウトだから、一万五千近いんじゃないのか。

松村――なんだそれ、武道館二回できるじゃないかよ。

渋谷――俺も信じられなかったけど、スーツ着た

サラリーマンのオッサンがギュウギュウに入ってた。転職セミナーの会場かと思ったぜ。

松村——まあ、若い客はいないだろうな。それで盛りあがるのかよ。

渋谷——盛りあがってたな。だって、いきなり三曲目がイエスの〝ラウンドアバウト〟だし、ELPの〝庶民のファンファーレ〟、バグルスの〝ラジオ・スターの悲劇〟もやって、ヒット曲連発だぜ。

松村——それ、エイジアの曲じゃないだろう。

渋谷——いいんだよ盛りあがれば。

松村——盛りあがればって、エイジアの曲は演んないのかよ。

渋谷——演るぞ。代表的なヒット曲〝ドント・クライ〟なんかアコースティック・ヴァージョンでやったぞ。

松村——どうしてアコースティック・ヴァージョンなんだよ。

渋谷——どうもスティーヴ・ハウがあの曲、あまり好きじゃないらしいんだ。

松村——本当かよ。

渋谷——まあ、噂だけどな。そのかわり、キング・クリムゾンの〝クリムゾン・キングの宮殿〟はバリバリの完コピで演ったぞ。

松村——完コピって、お前、それどうなんだよ。

渋谷——俺も驚いた。イエス、ELP、バグルスは、それぞれメンバーがもともと在籍していたバンドだし、スティーヴ・ハウにしろ、カール・パーマーにしろ、ジェフ・ダウンズにしろ、自分の曲としての自負があると思うんだ。でも〝クリムゾン・キングの宮殿〟は違うだろう。

松村——ジョン・ウェットンは元キング・クリムゾンじゃないか。

渋谷——そうだけど、この曲はファーストに入っていて、その時のベースとヴォーカルはグレッグ・

レイクだぜ。

松村——確かに。

渋谷——なんでもありにしろ、あり過ぎじゃないか。

松村——でもエイジアってヒット曲あるんじゃないのか。

渋谷——あるよ。だいたいファースト・アルバムなんか、意味もなく千五百万枚も売れたんだぜ。

松村——意味もなくって、そういえば、お前エイジアのこと、産業ロックとかいって、メチャクチャ批判してなかったか。

渋谷——……。

松村——あんなものロックじゃない、ってぐらいの勢いだったよな。

渋谷——確かに。

松村——産業ロックって、お前が作った言葉じゃなかったか?

渋谷——そうなんだよ、なかなかのネーミングだったよな。

松村——だったら、なんでノコノコとライヴに行ってるんだよ。

渋谷——ほら、仲の悪かった友達も、久しぶりに同窓会で会うと懐かしかったりするじゃないかよ。

松村——そういう問題かよ。

渋谷——ちょっと、俺も転職を考えて、セミナーに。

松村——意味が分かんないよ。

古川——松村さん知ってます? 社長はフォリナーも行ったんですよ。

渋谷——何、言いつけてんだよ。

古川——しかも、その日はラジオのスタジオがあるから、前半の三十分だけ観るってギリギリのスケジュールをわざわざ調整して行ってるんですよ。

松村——お前、フォリナーのこともボロカス言っ

CamScannerでスキャン

てたじゃないか。
渋谷――同窓会、同窓会。
松村――本当は好きなんじゃないかよ。
渋谷――当然、好きじゃないし、あのゴテゴテした音作りはいまだに嫌いなんだけど、どうしても懐メロだと足が向いちゃうんだよ。情けないけど。
松村――お前でさえ行くんだから、そりゃ当時熱中していた連中は行くわな。エイジアもソールド・アウトするよ。
渋谷――関係者席も同窓会状態で、オッサンの評論家とか編集者が来てるんだよ。なんか恥ずかしいよな。
松村――お前も仲間じゃないか。
渋谷――そうなんだけど、いつも行ってる若いバンドのライヴなんかでは、顔も見ない連中ばっかなんだよ。
松村――フォリナーは入ってたのか？
渋谷――あまり入ってなかったな。入口で、いきなり知り合いに「ジェイソンが来てるらしいな」って言われて驚いたけど。
松村――『十三日の金曜日』か？
渋谷――なんでいきなりフォリナーがホラーになるんだよ。ジェイソン・ボーナムに決まってるだろう。
松村――ツェッペリンの再結成のドラマーをやるんじゃなかったのか？
渋谷――ツェッペリンの再結成はなさそうだから、とりあえずフォリナーで働いてるんじゃないのか。
松村――でも、最初の三十分だけ観て面白かったのかよ。
渋谷――〝ダブル・ヴィジョン〟から始まって〝つめたいお前〟も〝ウェイティング・フォー・ア・ガール・ライク・ユー〟も全部聴けたぞ。
松村――読者は分かんないだろうけど、バーゲン・

セールみたいなライヴだな。

渋谷——オープニングでいきなり「伝説のバンド、フォリナーの登場です、数々のヒット・ソングを持つスーパーグループ——」みたいなナレーションが流れて、代表曲のさわりが何曲もかかるんだよ。

松村——営業みたいだな。

渋谷——そうそう。それでサイトで見たら、バリバリにツアーをやってるんだよ。三月だけで前半はアメリカ、中盤に日本に来て、その後ハワイ、カリフォルニアと、十回以上コンサートが入ってるんだ。五月はメキシコとか南米ツアーやるみたいだし、働きもんだよな。

松村——それだけ客がいるってことだな。

渋谷——全世界的にオッサンが来てるんだろうけど。

松村——再結成って、これからも続くのかな？

渋谷——続くだろう。で、思ったんだけど、エイジアがあれだけ入ったのは、やっぱりオリジナル・メンバーが全員揃ったのが大きいと思うんだよ。例えばポリスの再結成だって、曲の再現性だけ考えれば、スティングが自分のバカテク・バンドでポリス歌えばそれでいいんだけど、やっぱりそういう問題じゃないんだよな。

松村——アンディ・サマーズとスチュアート・コープランドの人気が凄いとは思えないけど。

渋谷——凄くないと思う。確かにテクニックは凄いけどな。やっぱり問題はオリジナル・メンバーだってことだよ。客の側からすると、オリジナル・メンバーが戻ってくるというのは、自分の青春の時間が再現されるみたいな気分になれるんだと思う。そこがポイントだよ。

松村——老けてるけどな。

渋谷——そこがまたいいんだよ。

CamScannerでスキャン

松村――なんでエイジアもフォリナーも東京厚生年金会館でやるんだ。あまり厚年って使わないよな。そういえばチープ・トリックもそうだったな。
渋谷――七〇年代、八〇年代ものは厚年でしかやっちゃいけないんだよ。
松村――そんなわけないだろう。
渋谷――でも、厚年といえばロッキング・オン発祥の地、ソウル・イートも厚年の向かいにあったな。新宿は日本のロックの聖地だな。
松村――誰もそんなこと知らないよ。
渋谷――よし、オリジナル・メンバーでロッキング・オン再結成だ。松村、岩谷宏と橘川に電話しろ。
松村――お前、なんか疲れてんじゃないか。会社で浮いてんだろう。最近、そのネタ多過ぎ。転職セミナーに行ったら？ S

消臭スプレーを持ってロック・コンサートに行こう！

松村——コンニチハ、ジェット・ブラックとアンディ・サマーズです。

渋谷——連名にするんじゃないよ。

松村——俺、こないだ、ラジオでパンク特集みたいなのをやったんだけど、いろいろと調べてみてビックリしたぞ。

渋谷——なんだよ。

松村——当時のパンク・ミュージシャンって実は言われているほど若くはなかったっていうのは分かってたんだけど、なんとジェット・ブラックは一九三八年生まれで、アンディ・サマーズは一九四二年生まれなんだよ。

渋谷——ということは、一九七七年にはジェット・ブラックは三十九歳で、アンディ・サマーズは三十五歳か。

松村——そう、アンディ・サマーズはポール・マッカートニーと同じ歳で、ジェット・ブラックはジョン・レノンより二歳上だったんだよ。

渋谷——それで、いまだにやってるんだから、すごいもんだな。

松村——そう、エイジアやフォリナーなんかガキあつかいだぞ。

渋谷——いや、エイジアやフォリナーも生年月日を調べてみたら、かなりいってる奴がいるはずだぞ。そういえば、お前、先月の対談でフォリナーやエイジアで変な顔をしてたけど、自分の原稿でワイルドワンズを書いてたじゃないか。

松村——おう、ワイルドワンズはいいぞ。

CamScannerでスキャン

渋谷――そんな奴になんか言われたくないぞ、フォリナーやエイジアのファンは。
松村――お前、フォリナーの初来日のコンサート、行ったか？
渋谷――たぶん行ったと思うけど、よく憶えてないな。
松村――俺は憶えてるぞ。たしか、始まる前に「本日のショーはフォリナーのパッケージ・ショーです」っていうアナウンスがあったんだよ。
渋谷――そうだったっけ。
松村――どういうことなんだろなって思って観てたら、ほぼファースト・アルバム一枚分の演奏をしたら終わっちゃったんだよ。一時間ぐらいだったんじゃないかな。もちろん前座はあって、なんとか二時間ぐらいの格好はついたんだけどさ。そういうバンドなんだよ、もともと。
渋谷――古いことはよく覚えてるんだな、お前は。
松村――おう、ブロンディの初来日コンサートも、渋谷公会堂で四分の一ぐらいしかお客さんが入らなかったのを憶えてるぞ。
渋谷――お前は悪いことしか憶えてないのかよ。だからといって、ワイルドワンズのほうがいいってことにはならないぞ。
松村――ワイルドワンズは武道館に八千人集めて、それが全部俺達かそれ以上のオジサンオバサンだぞ。
渋谷――だから、どうしたんだよ。
松村――自分の加齢臭を気にしなくてもいいんだぞ。
渋谷――なんだ、それ。
松村――次の日、武道館では消臭スプレーをずいぶん使ったらしいぞ。三千本はいっただろうな。
渋谷――使うか、そんなもの。
松村――だから、これからは消臭スプレーの会社が伸びるぞ。ビジネス・チャンス！
渋谷――お前がビジネス・チャンスなんて言うと、磁石をぶら下げて鉄クズ拾ってそこいら歩きまわってそうだけどな。

松村——がばいばあちゃんか、俺は。というか、これからのロック・コンサートは、そういうオジサンオバサンのことも考えていかなきゃいけないんじゃないか。

渋谷——まあな、団塊の世代は仕事やめても元気だから、いろいろなところに出てくるだろうからな。

松村——で、実は、俺、クリフ・リチャードのコンサートに行ってきたんだよ。

渋谷——昔からそうなんだけど、俺にはお前の思考回路がよく分かんない。

松村——クリフ・リチャードはジョン・レノンと同じ一九四〇年生まれで、五〇年代から活動しているんだけど、今でもコンスタントにニュー・アルバムをリリースしているし、ツアーもやってるんだよ。

渋谷——知ってるよ、それぐらい。この前、デュエット・アルバムを出したんだろ。

松村——そう、当然クリフのファンっていったらかなりの年齢になるし、熱狂的なファンが多いっていうんだよ。

渋谷——で、会場に消臭スプレーを売りに行ったんじゃないだろうな。

松村——売るか、そんなもの。パシフィコ横浜だぞ、あそこだったら二千本かな。

渋谷——考えるんじゃないって。

松村——しかし、クリフのファンはすごかったぞ。満員だったから、おそらく四千人以上は入ってただろうな。

渋谷——へえ、すごいじゃん。

松村——その八割がオバサンで一割五分がオジサンなんだよ。

渋谷——あとの五分は？

松村——付き添いの子供。

渋谷——なんだ、それは。

松村——興奮して倒れちゃったら、困るって思ったのかな。それとも、終わったら中華街へ連れてってやるって言われたのかな。

渋谷——いいかげんなこと、言うんじゃないよ。

松村——始まる前に客席見てたら、凄かったぞ。みんな、クリフの写真を貼って飾りをつけたウチワを持ってるんだぞ。

渋谷——それは熱狂的なファン・クラブなんだろ。

松村——それだけじゃなくて、〝We love Cliff〟とか〝Welcome back Cliff〟とか〝Cliff forever〟とか書いた横断幕がいっぱいあったんだぞ。

渋谷——いいファンじゃないか。

松村——俺は絶対に背中に〝Cliff〟って書いたハッピを着てる一団がいるはずだと思って探したんだけど、これはさすがにいなかったな。

渋谷——探すな、そんなもん。いいファンじゃないか、何が言いたいんだよ、お前は。

松村——だから、それがみんな俺達と同じかそれ以上のオバサン達なんだぞ。孫がいてもおかしくない人達なんだぞ。

渋谷——うん、それはちょっと引くな。

松村——しかも、開演前に「席は離れないでください」とか「写真は撮らないでください」とかいうアナウンスがあったんだけど、誰もそんなことききかないんだよ。クリフが出てきたとたんにフラッシュの嵐だし、一曲終わる度に何万円もするような花束を抱えた人が百人ぐらいステージに走って行くんだぞ。

渋谷——係員はどうしてるんだよ。

松村——若い係員なんかなんにも出来ないよ、そうなったら。自分の母親ぐらいの人達が、目を血走らせて百人向かってくるんだぞ。

渋谷——それは、見て見ぬふりをするしかないな。

松村——クリフも苦笑しながら、「ねえ、知ってる？今、僕はコンサートをしてるから、歌わなきゃならないんだよ」って言いながら、えんえんと花束を貰ってたけどな。

渋谷——さすが、エンターテイナーだな。

松村——俺もオバサン達がペンライトふってるのを見ながら、これはすごいパワーだって思ったね。オ

CamScannerでスキャン

ジサンオバサンが四千人集まったら、もう治外法権なんだよ。

渋谷――ファンのことは充分に分かったけど、クリフのステージ自体はどうだったんだよ。

松村――さすがに五十年やってる人はすごいわ。休憩はあったけど三十曲歌って踊ったぞ。

渋谷――そうだろうな。

松村――お前もロック・イン・ジャパンとかカウントダウン・ジャパンとか若い人達だけを相手にしてないで、これからは五十代以上の人達のためのコンサートを考えたほうがいいぞ。

渋谷――それ、マジメに言ってるのか。

松村――当たり前だろ。ただし、絶対にスタンディングにしたら、ダメだぞ。三十分でうずくまって、一時間で倒れ込むぞ。四千人が。

渋谷――……。 M

格差社会を是正して、ツェッペリン再結成を実現させよう！

渋谷——コンニチハ、クライヴ・カルダーです。
松村——誰だよそれ。
渋谷——よく知らないんだけど、何か凄い金持ちらしいぞ。
松村——だから、誰なんだよ。
渋谷——最近サンデー・タイムズ紙がイギリスの長者番付を発表したんだ。それが「リッチ・リスト二〇〇七」というんだけどさ。
松村——思い切りストレートなタイトルだな。
渋谷——その音楽部門のトップが、このクライヴ・カルダーってオッサンらしいんだ。
松村——何で、そんなに儲けたんだ。
渋谷——ゾンバってレーベルを作って、それをBMGに売って金を儲けたみたいだぜ。
松村——いくらで売ったんだ。
渋谷——十八億ドル、二千億円くらいかな。資産の合計は三千億円ぐらいあるみたいだぜ。
松村——……。
渋谷——そこで会話を止めるなよ。
松村——俺はそういう意味の分からない金額の話はしたくない。
渋谷——別にお前にあげるって話じゃないんだから。他人の話だからいいだろう。
松村——他人の話だから興味ないんだよ。くれるっ

ていうなら、いくら意味の分からない金額でももらうよ。

渋谷——確かに。

松村——そんな凄いレーベルなのか。

渋谷——凄いんじゃないかな。ブリトニー・スピアーズ、バックストリート・ボーイズ、イン・シンクといったのが目玉で、ヒップホップ系も強くて、R・ケリー、アウトキャストもそうだよ。

松村——俺の興味のないアーティストばかりだな。

渋谷——お前は興味なくても、世間は興味があって、大成功してるレーベルだよ。

松村——でも売っちゃったんだろう。

渋谷——早く現金化したかったんじゃないのかな。きっと割り切って音楽ビジネスやってたんだよ。

松村——他のリッチはどんな奴なんだ。

渋谷——ミュージシャンだけ挙げると、ポール・マッカートニーが千七百億円、マドンナが六百四十六億円、エルトン・ジョンが五百二十八億円、ミック・ジャガー千五百億円、キース・リチャーズが四百四十六億円って書いてあるぜ。

松村——イギリスだけなんだ。

渋谷——そうそう、イギリスの新聞だからな。マドンナはイギリスに住んでるから入っているけど。

松村——年寄りばっかりだな。

渋谷——年収じゃなくて、資産だからそうなるんだけど、年寄り多いよな。その後に続いているのもスティング、クラプトン、リンゴ、フィル・コリンズ、デヴィッド・ボウイ、ロッド・スチュワート、オジー・オズボーン、ロビー・ウィリアムス、チャーリー・ワッツ、デヴィッド・ギルモア、ロジャー・ウォーターズ、ブライアン・メイ、ジョージ・マイケル、ロニー・ウッド、ジミー・ペイジ、ロバート・プラント、ロジャー・テイラーって感じだな。

松村——何か、あまり働いてない奴も混じってないか、ジミー・ペイジとかジミー・ペイジとか。

渋谷——何で二回も言うんだよ。

CamScannerでスキャン

松村――目立つからだよ。

渋谷――まあ、そうなんだよな。結局、ビートルズ、ストーンズ、ツェッペリン、クイーン、ピンク・フロイドにいた奴の勝ちって話じゃないか、これ見ると。

松村――凄いよな、これほど勝ち組がクリアになってると怖いな。

渋谷――お前が言うように、日本の感覚だと昔いくら売れていた歌手でも、活動が地味になって二十年、三十年になれば、そんな大金持ちであり続けるってピンと来ないよな。

松村――ジミー・ペイジっていくら持ってんだよ。

渋谷――二百億くらいかな。

松村――……。

渋谷――フリーズするなよ。

松村――おかしくないか？

渋谷――だから、このリストに載っているメンバーのバンドって、ある意味、いまだに現役なんだよ。

松村――ツェッペリンのどこが現役なんだよ。

渋谷――今はどうだか知らないけど、少し前に調べたら、ツェッペリンのアルバムって、いまだに全世界で一年間に百万枚くらい売れてるんだよ。

松村――……。

渋谷――つまり、ツェッペリンはいまだに毎年プラチナ・アルバムを出し続けている現役バンドなんだよ。それはビートルズは言うまでもなく、クイーンもピンク・フロイドもストーンズもそうなわけ。

松村――ジミー・ペイジは働かないわけだよな。

渋谷――そうそう、金という意味では動機付けがないもん。それが駄目なんだよ。金に困ればロバート・プラントも、あんなアホなソロ活動やめざるを得ないんだけどな。

松村――アホ、そこまで言うかよ。

渋谷――まあ、頑張っているし、それなりのもん作っているけど、やっぱりどこかに金持ちの道楽な臭いがしちゃうんだよな。何とか貧乏にならないかな。

CamScannerでスキャン

松村――凄いことを言ってるな、お前。

渋谷――ロバート・プラントさえやる気になれば、ジミー・ペイジはツェッペリン再結成すると思うんだよな。そのためにはロバート・プラントが貧乏になって生活に困るしか手はないな。

松村――二百億も持っている奴が急に生活に困ることはないだろう。

渋谷――これがあるんだな、リーサル・ウェポンが。

松村――何、ニヤニヤしてるんだよ、気持ちの悪い奴だな。何なんだよ。

渋谷――離婚だよ。

松村――……。

渋谷――アメリカの『フォーブス』誌が「最も高くついたセレブ離婚」のトップ十を発表したんだ。

松村――何でもリストになってるんだな。

渋谷――それを見るとポール・マッカートニーは今回の離婚で七十二億円くらい払わざるを得ないみたいだぜ。トップ十のうち五人がミュージシャンなんだよな。

松村――ミュージシャンの離婚率は、特に成功した場合は高いだろうな。

渋谷――十位がミック・ジャガーなんだけど、推定で十八億から三十億くらいらしいんだ。

松村――ジェリー・ホールの時か？

渋谷――そうそう。ビアンカの時も痛い目にあってるのに懲りないよな。

松村――でもポールと比較すると少なくないか。

渋谷――何か、バリ島で挙げたヒンズー教の結婚式は手続きが不完全だったから無効だって主張したらしいぜ。それで減額されたみたいだけど。

松村――せこいな。いいじゃないかたくさんあるんだから。

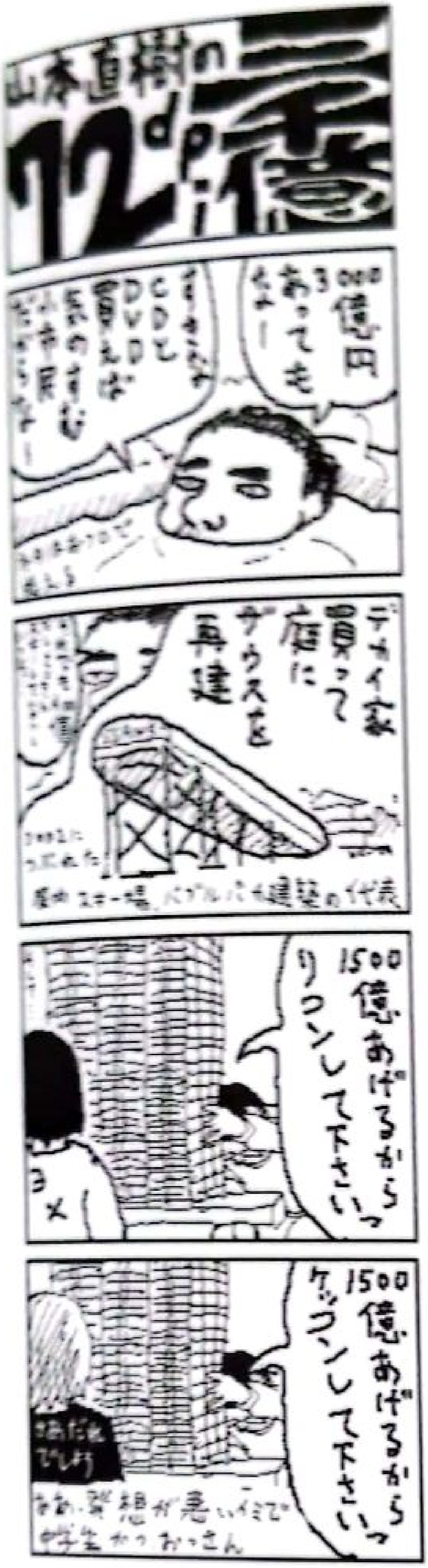
渋谷――俺たちみたいにないと離婚も怖くないな。

松村――俺はともかく、お前は怖いだろう。カミさん絶対に計算してるよ慰謝料。聞いといてやろうか。

渋谷――何でそんなこと聞くんだよ。

CamScannerでスキャン

松村――いや、お前も心配かな、と思ってさ。
渋谷――大きなお世話だ。
松村――でも、アメリカもイギリスも離婚でゴッソリ、半分ぐらい持っていかれるから怖いよな。
渋谷――だから、ロバート・プラントも二回ぐらい離婚すればツェッペリンを再結成するんじゃないかと思ってさ。誰か知らないか、ロバート・プラントを騙せそうな女。
松村――知ってるわけないだろう。だいたいどういう女なんだよ、ロバート・プラントを騙せるって。
渋谷――よく分かんないけど。
松村――そんなくだらないこと考えてないで、自分の離婚の心配したほうがいいぞ。お前が離婚しても何にも再結成しなくて、お前が貧乏になるだけだぜ。
渋谷――確かに。 S



どうしてロック・リスナーは思春期から逃れられないのか

渋谷――コンニチハ、ノーキー・エドワーズです。

松村――テケテケテケテケ。

渋谷――いきなり、そのリアクションかよ。

松村――普通そうだろう。

渋谷――確かにそうなんだけど、その普通がどれだけ『ロッキング・オン』の読者に通じるんだか。

松村――それを言うなら、ノーキー・エドワーズの名前そのものが通じないだろう。

渋谷――伝説的なロック・バンドのギタリストで、フーのピート・タウンゼントにまで影響を与え、しかも数少ない紅白出演のキャリアを持つ洋楽ロック・バンドのメンバー。これで誰でも分かるだろう。

松村――余計、分かんないだろう。でも、紅白出てるんだよな。

渋谷――そうなんだよ。俺も調べて驚いた。

松村――それに、ノーキー・エドワーズは半分バンド脱けてるようなものじゃないか。

渋谷――まあな。しかも毎年のように来日していて、今年も福島県会津若松市を中心に四十か所で公演して六万人を動員するぞ。

松村――別に会津若松を中心にはツアーしないけどな。

渋谷――三重県伊勢市を中心にもツアーするぞ。

松村――分かったよ。でも何回来てるんだ。

渋谷――五十四回、総公演数二千二百回以上。日本のバンドでもライヴが二千二百回超えるバンドってそういないよな。

松村――日本で食ってる感じだよな。

渋谷――明らかにそうだろう。ちょっとネットで調べてみたら、当然アメリカでも評価も人気もあるバンドだから、たくさんホームページあるんだよ。でも例外なくバンド紹介のところに、日本で異常に人

気があり、そこにこのバンドの活動の基盤があるって書いてあるんだよ。
松村――二千二百回なら当然だよな。
渋谷――しかも客のほとんどが団塊の世代なんだよな。
松村――俺たちより、少し上なんだよな。
渋谷――その辺はきっと若い連中には分かんないだろうけど。
松村――まあ、俺たちもベンチャーズ世代だけどな。
渋谷――何でベンチャーズって言っちゃうんだよ、まだクイズは続いてるのに。
松村――続いてねえよ、読者も忘れてるよ。
渋谷――まだ、いろんなヒント出したかったのに。ドン・ウィルソンのお母さんが二月に亡くなったとか。
松村――それのどこがヒントなんだよ。
渋谷――バンド結成のときお母さんがいろいろと尽くしたんだぞ。
松村――だから、それはヒントじゃないだろう。
渋谷――バンドの中心メンバーのお母さんが今年の二月に亡くなりました。九十一歳でした。果たしてこのバンドは何でしょう。
松村――それはクイズじゃなくて人探しじゃないか。
渋谷――でも、日本の五十歳以上のロック・ミュージシャンでベンチャーズの影響を受けてない人間はいないんじゃないか。特にギター弾く奴でベンチャーズをコピーしたことのない奴はいないと思う。
松村――確かに。
渋谷――〝パイプライン〟。
松村――テケテケテケ。
渋谷――〝十番街の殺人〟。
松村――テケテケテケ。
渋谷――〝京都慕情〟。
松村――……。
渋谷――何でやらないんだよ。
松村――渚ゆう子の曲だろう。

CamScannerでスキャン

渋谷——ベンチャーズの曲でもあるじゃないか。

松村——何でもやるバンドだよな。

渋谷——不思議な日本への土着のしかたをしているよな。一種の黒船だったんだと思う。エレキ・ギターという文化を日本にもたらした宣教師みたいなもんなんだよ。

松村——でもギター・バンドはたくさんいたぞ。

渋谷——シャドウズが、何でベンチャーズばっかり売れて俺たちのレコードが売れないんだ、って文句言ったらしいぜ。

松村——そういえばレコード会社一緒だったよな。イギリスではビッグだったし、同じインスト・バンドだもんな。

渋谷——でも、世界的な知名度はシャドウズの方が上でも、日本人にはベンチャーズなんだよ。

松村——ツボにはまったんだよ。

渋谷——そうそう。チープ・トリックとかクイーンとかいるよな。クイーンなんか日本人が発見して世界に広がったって言ってもいいぜ。

松村——ベンチャーズも相当な歳だよな。

渋谷——七十越えてるだろう。

松村——それを五十代の客が観てるんだよ。演る方も観る方も、下手な古典芸能より平均年齢が上だな。

渋谷——ある一定の世代が思春期に刷り込まれた音に執着し続けるっていうのは一貫してある傾向だよな。五十代にはベンチャーズかも知れないけど、四十代にはプログレだよ。クリムゾンなんかその典型じゃないか。

松村——イエスも客入ってたんだろう?

渋谷——キャメルだって客は来るぞ。

松村——何か悲しいな。

渋谷——俺は今年のフジのトリがケミカル・ブラザーズだと聞いたとき、同じ臭いを感じたな。ベンチャーズ化してるよ。

松村——えっ、まだ人気あるんじゃないのかよ、イギリスで。

渋谷――まあな、でも日本に於けるポジションは独特だよ。『ロッキング・オン』のインタヴューで、これからの予定は？って訊かれて、「メニー・メニー・フジ」って言ってるんだぜ。

松村――冗談なんだろう？

渋谷――そうかも知れないけど、半分本当だから冗談になるんでさ。

松村――三十代にとってはケミカルなんだ。

渋谷――どのバンドも日本人のツボに入っていて、ある一定の世代にとっての思春期を代表してるんだよ。

松村――ロックやポップ・ミュージックは何だって思春期を代表してるだろう。

渋谷――そうだけど、その中から残っていくのが何かってことだよ。ベンチャーズが残って何故ウォーカー・ブラザーズが残らないかってことだぜ。

松村――何か違う感じがするけど、ウォーカー・ブラザーズってだいたい今は存在しないじゃないか。

渋谷――イン・マイ・ルーム！

松村――歌うなよ。誰も知らないし、全然似てねえよ。

渋谷――知ってるか？　スコット・ウォーカーのドキュメンタリーが作られたんだぞ。

松村――何だそれ？

渋谷――スコット・ウォーカーって、まだ現役なんだよ。しかも、ウォーカー・ブラザーズ時代とは全く違う、現代音楽みたいなことやってるんだぜ。

松村――アイドル・ポップだったのに。

渋谷――そうそう。しかも、ドキュメンタリーで、現在の本人も出てくるらしいけど、ほとんど顔は映んないんだ。

松村――変形したのかな。

渋谷――いや、相変わらず二枚目らしいけど、本人が変人で世捨て人状態らしいぜ。

松村――なんで、今さらスコット・ウォーカーのドキュメンタリーなんだよ。

渋谷――やっぱり、イギリスでも伝説の人としていまだに話題になるらしいんだ。デヴィッド・ボウイなんか、凄い影響受けてるじゃないか。

松村――歌い方、そっくりだよな。

渋谷――だから、そのドキュメンタリーもデヴィッド・ボウイのインタヴューが目玉みたいで、いかに自分にとって大きな存在か語ってたな。

松村――思春期の音って、やっぱり決定的なんだよ。

渋谷――お前の場合は、思春期の音楽で止まったまんまじゃないか。

松村――お前は、延々思春期でいつになっても終わんないじゃないか。今回、出てきたアーティスト全部に思い入れがあるだろう。早く大人になれ。

渋谷――イン・マイ・ルーム！

松村――テケテケテケ。**SM**

CamScannerでスキャン

気をつけよう、失った頭髪と原盤権は元には戻らない

松村――コンニチハ、松村雄策です。

渋谷――なんじゃ、そりゃ。

松村――俺のアルバム三枚が、紙ジャケで発売されるんだよ。八月二十二日に、ユニバーサルから。

渋谷――それって、CDなのか?

松村――当たり前だろ。

渋谷――いや、お前のものだっていうから、ひょっとしたらカセット・テープかなんかかなって思ってさ。

松村――カセット・テープの紙ジャケって、どういうもんなんだよ。ふざけんなよ、まったく。

渋谷――だけど、お前、自分の紙ジャケが出るのを知らなかったっていうじゃないか。

松村――そう。六月の中頃に、初めて知ったんだ。それも、他のレコード会社で紙ジャケを作っている人から、「松村さんのアルバムも紙ジャケになるんですね」って言われてさ。「えっ、何、それ? 俺、知らないよ」って。

渋谷――で、お前、「本人に知らせなくても、レコード会社は出せるのか?」って、俺に訊いてきたよな。基本的に、原盤権を持っていれば、勝手に出せちゃうんだよな。

松村――出せちゃうのは分かってるけど、普通知らせるだろ。

渋谷――で、お前はレコード会社に問い合わせたわけだ。

松村――そう。「松村雄策という者ですが、私のCDが出るんですか?」って。

渋谷――マヌケな質問だな。

松村――それで、担当者に会ったら、そいつがけっこう俺のことに詳しいんだよ。「松村さんはCDを出したくないと思っているらしいんで、知らせなかったんです」って言うんだよ。

渋谷――分かるような、分かんないような。

松村――二枚目の『アンフィニッシュド・リメンバーズ』をCDにした後、十年ぐらい前に一枚目の『夢のひと』と二枚目の『プライヴェイト・アイ』もCDにしないかってレコード会社から話がきたんだよ。そのときに、オリジナルのままじゃなくて、二枚の中から選曲して、一枚のベストにしたいっていって、結局中止になったことがあったんだ。たぶん、そのことを知ってたんだろうな。

渋谷――出したくないのか、お前は。

松村――一枚目は作って一か月で嫌になって、ずっと聴いてなかったんだ。あれはダメだ、失敗作だって。ところが、そのCD化の話があったときに聴いてみたら、"あれっ、思ってたほど、悪くないじゃん"って思ってさ。これはいいなっていう曲もあったしさ。

渋谷――じゃあ、出せよ。

松村――だから、今回は二枚ともオリジナルのままで出すよ。

渋谷――なんで、一枚目が嫌なんだよ?

松村――あの頃の俺は、ドアーズかジャックスかっていうノリだったじゃないか。ところが、あのアルバムはポップなんだよ。ポップなものは嫌いじゃないけど、当時やってたドアーズやジャックスと違いすぎるだろ。後から、担当ディレクターから「加山

CamScannerでスキャン

雄三みたいなのをやろうと思ってた」って聞かされて、びっくりしたぞ、俺は。

渋谷——ミュージシャンとディレクターが、全然別のことを考えてたんだ。

松村——っていうか、そこらへんのところを知ってて、プロデューサーが仕組んだんじゃないかって、俺は思ってるんだけどな。

渋谷——ふうん。

松村——Y・Sっていう奴なんだけどさ。

渋谷——ふうん。

松村——三年くらい前かな、あるところで難波弘之君と会ったんだよ。難波君もあの一枚目に参加してくれたじゃないか。なんか、レコーディング前にミュージシャンが呼ばれて、プロデューサーに「ともかく、松村が叫べないように作ってくれ」って言われたんだってさ。

渋谷——ふうん。

松村——叫ばないジム・モリソンがいるか! 叫ばない早川義夫がいるか! その夜、俺は荒れて、朝まで飲んだぞ。酒代、払え!

渋谷——セコいこと、言うな。だけど、二枚目は自分でプロデュースしたじゃないか。

松村——あれは、明らかに一枚目の反動だな。思いっきり、暗くなっちゃったもんな。これもCD化の話のとき聴いて、あまりにも暗いんで目眩がしたわ。

渋谷——三枚目はもう一回CDになってるっていうことは、これは満足してるんだ?

松村——うん、ライヴだしな。当時やってたこと、そのまんまだからね。

渋谷——このアルバムのときも、なんかいろんなことがあったよな。

松村——だから、レコード会社がスタジオ・アルバムを作らせてくれなかったんだよ。今だったらインディーズっていう方法があるけど、当時は考えられなかった。で、煮詰まっちゃってさ。ちょうど小説を書かないかっていう誘いがあったから、もうやめ

ちゃおうって決めたんだな。

渋谷——そのラスト・ライヴなわけだ、この三枚目は。

松村——これも、腹立つよな。レコードが作れないからやめるのに、そのラスト・ライヴをレコードにしようっていうんだからさ。それだけじゃなくて、当時のマネージャーは金も貰わずに、原盤権をレコード会社に渡しちゃうしさ。金返せ！

渋谷——もう、やめろって。

松村——このライヴのときは、歌い方も曲のアレンジもずいぶん変えてやった思い出があるな。当日カゼひいちゃって、ライヴはしっかりやったんだけど、終わったらフラフラになって、翌日から三日ぐらい寝てたな。

渋谷——で、今回、聴いてみて、どうだった？

松村——聴けないんだよ。WOWOWのインターネット・ラジオで流そうと思って聴いてみたら、数曲で当時のことを一気に思い出しちゃって、思考不能になっちゃってさ。

渋谷——どんなことを思い出したんだよ。

松村——だから、すべてだよ。俺のレコードって、他の音楽雑誌で目茶苦茶に書かれたじゃないか。そういう原稿を書いた奴の名前とかも、全部思い出したぞ。

渋谷——お前、根に持つからな。二〇年前のことも、まだ根に持ってんだ。

松村——つまり、本や原稿はそこそこ評価してもらっているけど、レコードや音楽は全然そうじゃないじゃないか。だから、本の悪口を言われても平気だけど、レコードの悪口をいう奴は許せないんだ。

渋谷——だけど、あそこでやめて、お前にとっては、逆に良かったんじゃないのか？

松村——これも三年ぐらい前に、友達と酒を飲んでいて、「今迄の人生の中で一番後悔してるのは何？」って訊かれて、俺は「音楽をやめたこと」って答えたな。考えてみりゃあ、あんなにはっきりともうやめ

ムッて言わなくても良かったんだよな。
渋谷——じゃあ、またやればいいじゃないか。
松村——もう、遅いよ。1年前だったら、まだやったかもしれないけどさ。
渋谷——ど、どうして？
松村——だって、俺、ハゲちゃったじゃん。
渋谷——……ハゲはロックやっちゃいけないのか。ニール・ヤングやチャーリー・ワッツはどうするんだよ。
松村——そうじゃなくて、自分がカッコいいって思えないっていうことだよ。そういう自信がなかったら、ムリだろ。早川義夫さんがカムバックしたのは、やっぱり自信があったからなんだよ。もう、俺はないもん。
渋谷——そうだよな、早川さんはハゲてないもんな。
松村——…………。M

社員を見る目はないですが、いいバンドなら見抜きます

渋谷——コンニチハ、トム・クラークです。

松村——誰だそれ？

渋谷——ジ・エナミーってバンドのヴォーカルだよ、サマソニで観たんだけど最高だったぜ。朝イチの出番だったんだけど客もたくさんいて盛り上がったんだよ。背はチッチャイけどな。

松村——お前も、自分のフェスの翌週なんだから朝から炎天下のマリンにいるなよ。

渋谷——全然バリバリだぜ、日本で一番ライヴを観てるロック中年のエネルギーは無限だぜ。

松村——誰かが言ってたけど、お前サマソニの現場で目撃されて、自分のフェスのBBSに「渋谷さん、思いっきりやつれてたけど、もう死ぬんですか」って書き込まれたらしいじゃないかよ。

渋谷——……。

松村——そんなゾンビみたいな顔でウロつくなよ。人を不安にさせてどうすんだよ。フェスが楽しくなくなるだろう。そのうち、スマッシュやクリマンから出入り禁止になるぞ。やつれた顔の中年は禁止とか言われて。

渋谷——なるか、そんなことに。しょうがないだろう、フジ、ロック・イン・ジャパン、サマソニと三週連続なんだから、疲れない方がオカシイぜ。当たり前だけど、自分のフェスは死ぬ程大変だし。

松村——だったら行くなよ。別にフジもサマソニも、お前が来なくても困らないぜ。ロック・イン・ジャパンは困るかもしれないけど。

渋谷——観たいんだよ、ほっといてくれ。

松村——そういえばフジで会ったよな。何か前方から死の予感を感じさせろ疲れた初老のオヤジがおぼ

つかない足取りで歩いて来るなと思ったら、お前だったんだ。

渋谷――お前に言われたくないわ。前方から白髪の老人が歩いて来るから誰かと思ったらお前だったんだよ。

松村――何、言ってんだ。俺なんか客から声かけられたんだぞ、現役のミュージシャンのイメージで。変わってないという証明だぜ。

渋谷――現役のミュージシャン？　意味が分かんないけど、何て声かけられたんだ。

松村――「オッ、マッキー・ショック」って言われたんだよ。

渋谷――ハハハハハハ。

松村――凄いだろう。

渋谷――ハハハハハハ。

松村――笑い過ぎだよ、お前。

渋谷――それは凄い、さすがフジ・ロック。この本の読者どころか、今のロッキング・オンの社員でも分からない奴の方が多いと思うぜ。小川(渋松の担当編集者・二十四歳・独身・埼玉出身)知ってるか？

小川――何ですか？　そのマッキー何とかって。

松村――黙ってろ、バスUターンさせたくせに。

渋谷――何だバスUターンって。

松村――こいつは、会社からフジに向かうロッキング・オン貸切りバスを、自分の忘れ物の為に出発してからすぐにUターンさせたんだよ。

渋谷――クビだ。マッキー・ショックってのは、松村が二十七歳で歌手デビューした時、レコード会社が付けたコピーなんだよ。メディアにはマッキーってマジック・インキを配ったんだぜ、プロモーションで。

小川――マジックの歌を歌ってたんですか？

松村――殺すぞ、ホテルの部屋のキーを失くしたくせに。

渋谷――何だそれ。

松村――こいつ、バスをUターンさせただけでは物

CamScannerでスキャン

足らず、ホテルのキーまで失くして、また大騒ぎしたんだよ。

渋谷――お前、本当にクビにするぞ。

小川――やっぱり仕事のプレッシャーですかね。

渋谷――……。

松村――お前、小川クビにするよりそろそろ社長辞めた方がいいんじゃないか。社員になめられてるぞ。

渋谷――こいつの処分は後にする。でも、社員さえ知らないエピソードを知ってる客がいるのは、さすがフジ・ロックだな。

松村――何がさすがなんだか分かんないけど、客の年齢層は高いよな。

渋谷――当然、マッキー・ショックって言われたら、お前は〝あなたに沈みたい〟って答えたんだよな。

松村――答えるか、アホ。

小川――何が沈むんですか？

松村――お前だよ！

渋谷――〝あなたに沈みたい〟ってのは松村のデビュー・シングルなんだよ。これからロッキング・オンの入社試験は、こういう歴史的に重要な項目も入れた方がいいな。二号目の表紙は、俺の小学校の同級生が描いたとか。

松村――それのどこが重要なんだよ。そんなもんと俺のデビュー・シングルを一緒にするな。もうその話はいいよ、ジ・エナミーじゃなかったのかよ。

渋谷――そうそう、いいバンドなんだよ。二十歳そこそこの三人組で、コヴェントリー出身なんだ。

松村――スペシャルズと一緒だ。

渋谷――オッ、古いことはよく知ってるな。だからオープニングのSEがスペシャルズの〝トゥ・マッチ・トゥ・ヤング〟なんだ。俺なんか、それだけで興奮しちゃってさ。

小川――去年の二月、地元のコヴェントリーでのライヴでスペシャルズと共演して、そこで〝トゥ・マッチ・トゥ・ヤング〟と〝ルーディたちへのメッセージ〟を一緒にやったんです。だから、結構お約束な

感じですよね。

渋谷——埋めるぞ、お前。だいたいスペシャルズなんか聴いたことないだろう。

小川——ハイ、聴いた方がいいですかね？　僕、わりと忙しいんですけど。

渋谷——……。

松村——お前、もう向こうに行け。そのうち社長の血管が切れて倒れるぞ。

小川——それは困るので、行きます。

松村——お前、何であいつ採ったんだ？

渋谷——考えないようにしてるんだから訊くな。とにかくいいバンドなんだよ、ジ・エナミーは。

松村——分かったよ、そこから話が進まないじゃないか。

渋谷——一番気に入ってるのが、怒りのロックだってることなんだよ。だって、ジ・エナミーだぜ。グループ名が凄いぜ。ネットにも書いたけど、ヒップホップ・グループでもないのに、こんなグループまるこするなんて珍しいよな。

松村——歌詞もそんな感じなんだ。

渋谷——そうそう、ただ学校卒業して、一度はサラリーマンをやってんだよ。その辺がリアルでさ。いわゆるドロップアウトでも、不良とは違うんだな。生きることに必死というか、真面目なんだよ。

松村——サラリーマンやったことあるから真面目というのもどうなんだ。そうすると、お前も俺も真面目に生きてないことになるだろう？

渋谷——サラリーマンをやってたから、という訳じゃなくて、何か開き直ったとこがないんだよ。ヒップホップなんか、怒りが全てのエネルギーになってるけど、ロックってどこか冷笑的な臭いがいつの頃からか出て来たじゃないか。それがないんだよ。例えば、自分の生まれた街をテーマにした『ウィル・リヴ・アンド・ダイ・イン・ジーズ・タウンズ』なんか、明らかに詞にヒップホップの影響が出てるなと思う。音楽的には、むしろ古典的なロックだけど。

CamScannerでスキャン

演奏も良くて、"アウェイ・フロム・ヒア"が始まった時なんか、午前中のマリンで、思わず「オーッ」って叫んじゃったよ。

松村――やめろよ、絶対に隣にいた奴は、オヤジが脳卒中の発作起こしたと思ったぜ。

渋谷――思うか。一人とは思えないグルーヴがあるんだよ。

松村――やけに気に入ったんだな。

渋谷――フェスって、一種の巨大なショーケースじゃないか。こういう出会いがあるから楽しいよな。やっぱり、ライヴじゃないと分からないことあるよな。

小川――そろそろ時間なんですけど、終わりました？　何か社長が脳卒中とか聞こえたんですけど、医者呼びますか？

渋谷――お前は、失くしたホテルの部屋のキーでも探してろ。**S**

CamScannerでスキャン

気になるのは、ロック・スターの死亡率より生き延びたツェッペリンの方だ！

渋谷――そういえばイギリスの研究者が、ミュージシャンの寿命調査をしたんだよ。

松村――何だそれ。

渋谷――何だかミュージシャン千六十四人を対象に、一般人と比較して、本当に世間で言われてるようにロック・スターは短命かどうか調査したらしいんだ。

松村――それ、マジな研究なのかよ。

渋谷――マジマジ、ちゃんとした医学専門誌に発表された研究らしいぜ。

松村――変な研究者がいるんだな。それでどうだったんだよ。

渋谷――やっぱり、ミュージシャンは死亡リスクが高いらしいぜ。有名になってから、二年から二十五年の死亡リスクが同世代、同性、同人種のグループと比較して二倍から三倍高いらしいよ。良かったな、お前は元ミュージシャンでも成功してないから、そのハイ・リスク・グループには所属してないぜ。

松村――大きなお世話だ。でも、死んでる有名ミュージシャンは多いからな。

渋谷――そうそう、プレスリー、ジム・モリソン、

カート・コバーン、ジミヘン、ジャニス、調査対象のうち百人近くが死んでいて、男の九.六%、女の七.三%らしいな。死亡平均年齢は、北米が四十二歳、ヨーロッパが三十五歳なんだって。

松村——やっぱりドラッグなのか。

渋谷——死因の二十五%以上がドラッグかアルコールらしいな。一番ヤバイのが、有名になってからの数年間で、五年以内の死亡確率が通常の三倍以上になるみたいだぜ。

松村——売れて、舞いあがって、無茶やって死んじゃうんだな。

渋谷——特に、七〇年代は、そういう経験がないから、ひどいことになってたよな。

松村——今は、周りも本人も利口になってきてるから、七〇年代ほどじゃないかもな。

渋谷——でも、俺はこの調査見て思ったんだけど、逆のテーマもあるよな。

松村——何だ、逆って。

渋谷——成功しなかったミュージシャンの死亡確率だよ。

松村——何で俺の顔を凝視しながら言うんだよ。

渋谷——いや、そっちの方が学術的な意味があるんじゃないかと思ってさ。

松村——そうか、何か嫌なデータだよな。

渋谷——まあ、そうなんだけどさ。成功したミュージシャンが、酒とドラッグで早死にするなんて、今更言われなくてもだいたい想像できるじゃないか。

松村——まあな。

渋谷——それより、今は医学的にも、社会学的にも、本当に興味のあるテーマは、成功しなかったミュージシャンの死亡確率の方だと思うな。

松村——数としても圧倒的に多いだろうしな。

渋谷——そうそう、一人のジミヘン、一人のジャニスに対し、ジミヘン、ジャニスになれなかった人間は、万の単位でいると思うんだよ。その人間の人生というか、死亡確率の方が社会的には重要だぜ。

CamScannerでスキャン

松村――どこまでも暗い気持ちになる研究だな。

渋谷――確かに。それに死亡確率高いと思うんだよな、成功したミュージシャン以上に。

松村――最悪じゃないか。

渋谷――だって、ミュージシャンとして成功しなかった人間が、他のステージで成功する確率が高いとは思えないだろう。

松村――だから、いちいち俺の顔を凝視するんじゃないよ。

渋谷――そうなると、ドラッグと酒を覚えて金のある奴と、ドラッグと酒を覚えたけど金がなくなった奴と、どっちにストレスの多い人生が待っているかといえば、明らかに後者だよな。そうなるとドラッグや酒を直接的な原因にしない、ガンとか他の病気も増えてくると思うんだ。

松村――この話やめないか。

渋谷――いや、向き合わなければいけない現実だろう。

松村――そんなことないと思うんだけど。

渋谷――俺、前から思ってたんだけど、ここ何年か、アメリカやイギリスの映画で、落ち目のロック・スターとか、成功しなかったミュージシャンが出てくることが増えてきてるんだよ。

松村――確かに。

渋谷――あれって、ロックが成熟した証拠だと思うんだ。ある意味、ロックが日常化したっていうか。

松村――まあな。

渋谷――当然、ギャグ・ネタにされる場合が多くて、それによって対象化されたロックの芸能性とか、インチキ性とか、かなりリアルだよな。

松村――スティーヴン・レイの〝スティル・クレイジー〟なんか笑えたよな。

渋谷――いそうじゃないか、ああいうオッサン。落ち目のロック・アイドルというのは、もう定番化したテーマになってる気すらするよな。〝ラブソングができるまで〟なんかもそうだろう。

松村――ヒットしたよな。

渋谷――日本もそのうちそうなると思うな。

松村――あんまり、そういう映画観たくないけどな。

渋谷――そうか、俺は観たいぞ。

松村――勝手に観ろよ。

渋谷――つまり、大げさにいうなら、このロック・スターの死亡率調査って、死さえスターの特権化しようとした調査だと思うわけよ。

松村――どういうことだよ。

渋谷――だから、死という現実は、別にスターだけに訪れるものじゃなくて、むしろそうじゃない負け組にとってこそリアルだったりするかも知れないわけだろう。

松村――まあな。

渋谷――だったら、そっちの方が重要だと俺なんか思うわけ。

松村――結局、何が言いたいんだよ。

渋谷――この調査の視点が甘いということなんだけど、ただそれだけじゃなくて、嫌な感じがしたんだよな。まあ、俺たちもミュージシャンの死をテーマに、さんざん特集組んできたんで、言えた義理じゃないんだけどさ。

松村――本当だよ。

渋谷――ただ、学者なら、もっと違う視点があってもいい気がするな。

松村――勝手な理屈だろう。

渋谷――確かに。そういえば、この調査は、有名な時期が二十五年過ぎると、死亡率が普通の人間と変わらなくなるとも書いてあるんだ。

松村――ポールとかリンゴとか。

渋谷――そうそう、ストーンズの生き残りとか、ディランとか、ツェッペリンやフーの生き残りとか。まあ、リンゴもポールもビートルズの生き残りだけど。

松村――その生き残りというのはやめようぜ。

渋谷――でも、長いバンドだと、確かにメンバーの

誰かが死んでいるパターンが多いな。

松村――よりサヴァイヴァルしたほうはクタ・クタが最終的な勝ち組なんだ。そういえば、生き残りで再結成されるツェッペリンには行くのかよ。

渋谷――結構、微妙なもんだよな、あれも。

松村――あいつらなんだかなぁ。

渋谷――らしいな。一人の中しみがあったんだって。

松村――誰が望んでるんだ。

渋谷――若い奴らがだろう。俺が微妙だと思うのは、イメージなんだよ。

松村――若い奴らが行きたがっているのは、凄くいいことじゃないか。

渋谷――そうなんだけど、ツェッペリンが偉大なのは、今回の再結成が偉大なニュースじゃないところなんだな。

松村――そうだよな。偉人には、イメージも比較しないよな。

渋谷――惜しいことに、ツェッペリンは現役時代も凄かったけど、作品が全く風化しないんで、今でも凄いんだよ。作品が。

松村――やけに作品を強調するな。

渋谷――だって、そうなんだもん。その偉大な作品は、どんどん若いツェッペリン信者を生み出しているわけよ。それは全世界的にそうで、明らかに現役時代よりツェッペリン評価は高くなってると思うんだ。

松村――当時でも凄かったけどな。

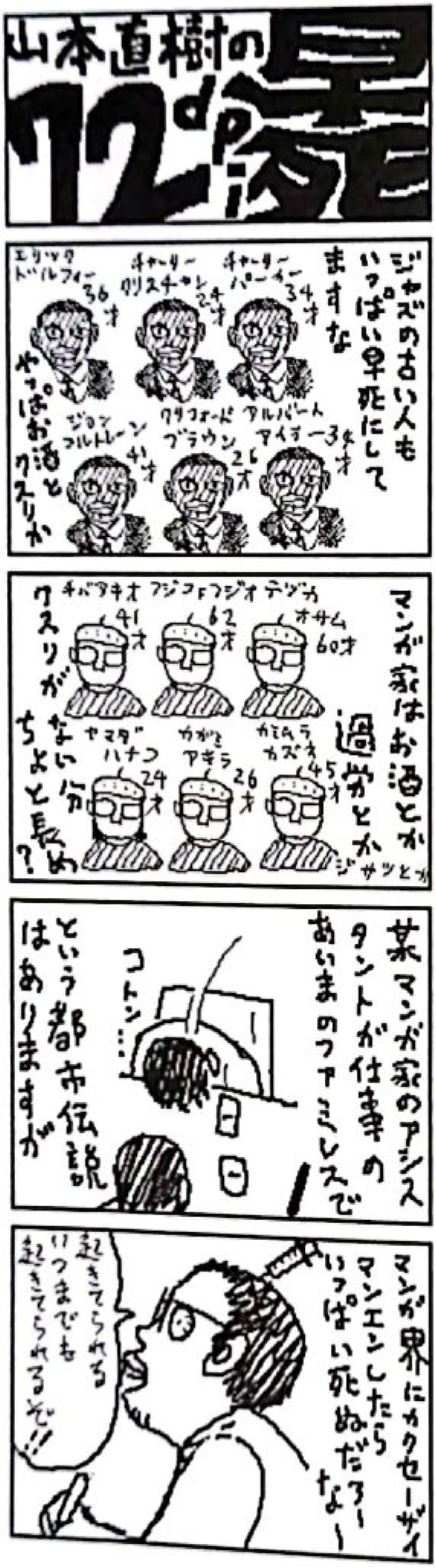
渋谷――まさに奇跡のバンドなんだけど、作品は偉大でも、当人たちも偉大かといえば、それはいろいろ論議があるわけだよ。

松村――でも、若い奴らは、あの偉大な作品がステージで再現されると思っているんだぞ。

渋谷――そうだよ問題は。偉人は偉人だから期待されてるらしいんだよ。偉人は偉人だが、でも、今のツェッペリンに対する期待は、現役最高のロック、

バンドなんだよ。考えるだけで怖ろしいよな。
松村――何がだよ。
渋谷――当日がだよ。
松村――当日の何がだよ。
渋谷――俺に言わせるな。
松村――よく分かんないけど、お前はどうするんだ。
渋谷――二十五年生きたから勝ち組とは、簡単に言えないよな。
松村――だから、どうするんだよ。
渋谷――ギターでも練習しようかな。
松村――お前が練習してどうすんだよ。もともと弾けねえし。
渋谷――……。 S

注：「微妙だ」と答えておきながら、やはり……。



ネット・ラジオもジャニーズも、ビートルズ一本で渡り歩いてきました

松村――俺のやってるWOWOWのインターネット・ラジオ、もうすぐ終わるらしいんだ。

渋谷――ああ、BBCロック・レジェンズっていう奴な。一度、俺もゲストで出たよな。

松村――あのとき、お前が「ギャラは要らない」って言うから、プロデューサーが困ってたぞ。「どうしましょうか？」って訊かれたから、「じゃあ、後から僕が直しますから、僕の口座に振り込んどいてください」って言ったら、結果は目に見えてるから、ダメって断られたな。

渋谷――当たり前だろ。あの後、ゲストは誰が出たんだ？

松村――誰も出てない。やっぱり、お前で懲りたんだろうな。

渋谷――何が、懲りるんだよ？

松村――だって、お前は煙草は吸わないっていうから、スモーカーのプロデューサーもディレクターも困っちゃったんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷――今、禁煙なのは、当たり前だろ。

松村――そんなことないよ。大丈夫なスタジオのときは、俺は収録中も吸ってるし、真夏の暑い日なんか、プロデューサーが「どうですか？」って言ってビール持ってきてくれるぞ。

渋谷――煙草吸ってビール飲んで、ＤＪやるんじゃないよ。そんなことは、ＤＪ歴三十五年の俺が許さないぞ。

松村――まあ、実際に飲むのは、収録が終わってからだけどさ。

渋谷――だけど、あの番組、よく持ってるよな。俺なんか、とっくに終わってるって思ってたぜ。

松村――たしかに、最初の約束は、半年だったんだけど、もう三年越してるからな。だけど、たぶん今年いっぱいで終わりだろうな。

渋谷――俺がゲストで出たときだって、お前、始めのあいさつが「こんにちは、ゼブラ・キッドです」って言ってたじゃないか。

松村――そうそう。

渋谷――そうそう、じゃないよ。

松村――ほら、俺はラジオを毎週やるなんてことはなかったから、どうしようかって考えてさ。そしたら、俺が毎週聞いてたラジオっていったら、ビートたけしのオールナイトニッポンだから、ああいうふうにやろうって思ってさ。

渋谷――ＢＢＣロック・レジェンズだろ。あのノリで、ツェッペリンやパープルをやるんじゃないよ。

松村――だけど、それが面白いっていうんで、評判は良かったんだぞ。

渋谷――本当かよ？

松村――ああ、ＷＯＷＯＷのインターネット・ラジオの中では、一番目の成績だったんだぞ。

渋谷――へえー。あそこ、何本やってるんだ？

松村――たしか、二本って言ってたな。

渋谷――……。

松村――だけど、やっぱりラジオっていうのは、人

CamScannerでスキャン

多だよな。
渋谷——何、言ってんだよ、週一回ぐらい、どうってことないじゃないか。俺なんか、二本かけ持ちしてたことだってあるぞ。
松村——お前と俺とじゃ、違うだろ。お前にはアシスタントがついて、なんでもやってくれるんだろ。俺は、全部ひとりでやってるんだぞ。
渋谷——全部って、何やってるんだよ？
松村——だから、プロデューサーと次にやるバンドを決めたら、音源を全部聴いて、選曲して、時間を計算して、曲順を決めて、あと話の内容も考えるんだよ。ほとんど、放送作家じゃないか。
渋谷——そんなことは当たり前だよ。でも、打ち合わせぐらいはするんだろう？
松村——打ち合わせは、一本収録の前に十分だけ。
渋谷——それで、出来るのかよ？
松村——それで、二年やってきたんだよ。収録直前まで話の内容が思いつかなかったこともあったけど、始めればなんとかなるもんだな。
渋谷——なんか、よく分かんないけど。
松村——だけど、昔、お前の番組にゲストで出たときも、打ち合わせなんかしなかったじゃないか。
渋谷——それは、俺がリードするから、大丈夫だったんだよ。
松村——そういう問題かよ。
渋谷——そういう問題だよ。そういえば、お前の番組は、放送時間もだいたい一時間くらいってアバウトだよな。
松村——いいんだよ、インターネットだから。
渋谷——そういう問題かよ。
松村——そういう問題だよ。だから、最終回は二時間ぐらいやろうって思ってるんだ。
渋谷——やるな、二時間も。
松村——そういえば、ラジオじゃなくて、ライヴのDJも俺は一時間半ぐらいやるぞ。普通は四十五分を二回やってくれって言われるんだけど、俺はサッ

カー選手じゃなくてミュージシアンだ、紙ジャケも三枚出てるぞって言って、一時間半やるんだよ。

渋谷——わけが分かんないな。お前がライヴでDJするっていうのも、考えられない。

松村——最初にクラブでやったときは、なんでこんなに室内が暗いんだよ、なんでこんなに大音量なんだよって思ったけど、すぐに慣れちゃったよ。

渋谷——そんなに、しょっちゅうやってるのか？

松村——そういわれれば、最近頼まれないなあ。

渋谷——そりゃあ、そうだろ。暗い中で白髪の老人が髪振り乱してたら、怖いもんな。ホラーじゃ。

松村——やかましいわい。とにかく、そういうふうにラジオをやってきたから、最近は他のラジオにゲストで出るのも、全然平気になっちゃったよ。こないだも、岡田准一の番組に出たけど、面白かったぞ。

渋谷——なんで、岡田准一の番組にお前が出るんだよ？

松村——なんか、俺が岡田准一にビートルズを教えるっていう企画だったんだよ。

渋谷——想像がつかないな。

松村——岡田准一が「僕、メンバー四人の名前言えます」って言うから、俺が「ジョン・レノンとポール・マッカートニーとジョージ・ハリソンとミック・ジャガーだよ」って答えたら、「リンゴ・スターじゃないですか」って言ってたな。

渋谷——くだらないこと言ってんじゃないよ、お前も。

松村——岡田准一ってV6だよな。俺、TOKIOが好きだから、ゲストで呼ばれないかな。

渋谷——岡田准一のありがたみも分かんないでゲストに行くな。しかし、お前とジャニーズっていうのも、シュールだよな。だけど、最終回二時間も何やるんだよ？

松村——やっぱり、ビートルズだろうな。もうとっくに全部かけちゃったけど、もう一回三十曲ぐらい選んでやろうと思ってるんだ。

渋谷——やっぱり、お前はビートルズしかないか。

松村——まあ、十二月といったら、ビートルズだからな。

渋谷——いつから、こうなったんだろうな。

松村——ジョン・レノンが亡くなってからだろ。ジョージ・ハリソンも十一月だし。

渋谷——それにしても、CD、DVD、映画、全部ビートルズはここらへんに集中してるよな。

松村——だから、俺の仕事が忙しいのも、この時期なんだよ。

渋谷——お前は仕事もビートルズのサイクルなのかよ。

松村——ジョンが十二月、ジョージが十一月だから、俺が死ぬのは十月だと思うな。

渋谷——……。■

楽しみも不安も先延ばし、ツェッペリン・モラトリアムに想う

渋谷——コンニチハ、田辺和夫です。

松村——誰だよ、それ。

渋谷——中学時代の友達で、バレーボール部のキャプテンだった田辺クンだよ。

松村——知らねえよ、そんな奴。

渋谷——大事な試合の前に指を骨折して、出場できなくて、うちの学校負けたんだよ。

松村——……。

渋谷——ジミー・ペイジ、指骨折したじゃないか。普通、ありえないと思わないか？

松村——そういえばライヴ延期になったんだよな。

渋谷——俺も予定を組み直して大変なんだよ。世界中からブーイングだったらしいぜ。

松村——確かに、社長クラスの奴が行くんだろうから、いきなりスケジュールの変更は難しそうだな。

渋谷——でもさ、指骨折しないぜ。腕とか足とか骨折した知り合いはいるし、話も聞くけど、指骨折した話なんか聞いたことないもん。

松村——確かに。

渋谷——田辺クンだけだよ、俺の知る限りでは。

松村——別に田辺クン以外にも指骨折した人間はいくらでもいるだろうけど、腕とか足と比較したら少ないだろうな。それこそバレーボールとかやってない限り、あまりないと思う。ジミー・ペイジは何て言ってるんだよ。

渋谷——庭を散歩して、石板にけつまずいて転んだんだって。

松村——嘘臭いな。

CamScannerでスキャン

渋谷——だろう。友達のギタリストが言ってたけど、ギタリストは意識的にも無意識的にも、指を守るからありえないって。

松村——でも、何で嘘つくんだよ。

渋谷——リハ不足だろう。やばいんだよ、やっぱり。俺の心配していたとおりだな。あまりに周りが盛りあがってるんでビビッてるんだと思う。だってチャリティー・オークションで、ペア・チケット千九百万だぜ。

松村——本当かよ。

渋谷——俺はね、その話をジミー・ペイジが聞いたとき、身の危険を感じたと思うんだ。殺されると思ったね。

松村——何で殺されるんだよ。

渋谷——お前、千九百万だよ。どんなことを期待して、そんな金を払うんだよ。一枚にしても約一千万。百分間ライヴを演ったとして、一分間十万だぜ。一分間十万のエンターテインメントって、何なんだよ。一

松村——別に、オークションなんだからいいじゃないか。買う側が勝手に付けた値段で、売ってる方が定価を千九百万にしたわけじゃないんだし。

渋谷——いや、それだけ期待されているんだよ。ジミー・ペイジは一分十万のライヴを演る自信が持てなかったんだよ。それで指を骨折しちゃったんだな。中途半端なライヴを演ったら、千九百万の客に殺されるとビビッたね。

松村——でも、二週間リハが延びたからって何かが決定的に違うというもんでもないだろう。

渋谷——それだけ追い込まれてるんだよ。

松村——お前、ツェッペリンのファンじゃないのかよ。どうして、そうやってマイナスの連想ばっかりするわけ。

渋谷——ファンだからだよ。心配でしょうがないんだよ。何でこんなに盛りあがってしまったのか、わけ分かんないよ。そっとしておいてもらいたいよな、全く。

松村――盛りあがっているんだからいいじゃないか。

渋谷――程度問題だろう。二万枚のチケットに九千万枚の申し込みがあったらしいぜ。全ての数字がふたケタ間違っているよな。すっかりジミー・ペイジがおびえちゃったじゃないか。

松村――別におびえてないよ。おびえているのは、お前じゃないか。

渋谷――おびえてる。凄くおびえてる。どうしよう、ヘナチョコなライヴだったら。

松村――お前が演奏するわけじゃないんだからいいじゃないか。

渋谷――そうなんだけど、ほとんどライヴ観たくないくらいなんだよ。オークションで売ろうかな、一千万なら。

松村――アホか！　でも、そんなに心配してるの、お前だけだろう。

渋谷――何言ってんだよ、再結成が決まったとき、BBCの見出しが「心配するな、練習はしているらしい」っていうのだったんだぜ。

松村――笑える。

渋谷――お前は笑っていられるけど、俺は笑っていられないんだよ。一九九四年のペイジ・プラント結成は、ある意味ツェッペリンの再結成だったわけよ。あのときは、これほどの騒ぎにはならなかったけど、俺は一応ツェッペリン評論家としてニューヨークまで観に行ったんだよ。そうしたら、いきなりジミー・ペイジじゃないギタリストがギター弾いてんだよ。

松村――そのときも指を骨折したのか。

渋谷――してねえよ。ジミー・ペイジも弾いているんだけど、メインはその見たこともない若いギタリストなんだよ。ア然としたね。

松村――今回もその手があったな。

渋谷――そんなことしたら本当に殺されるよ。

松村――でも、それなら安心して観てられただろう。

渋谷――そんなことで安心してどうするんだよ。安心したけど。

松村――良かったじゃないか。

渋谷――あっ、思い出した。安心してない、安心してない。ア然として、サイド・ギターを弾いているジミー・ペイジを、言葉なく観ていたんだけど、一回だけ思わず声を出した瞬間があったんだ。

松村――そら見ろ、お前も興奮したんじゃないか。

渋谷――例によって、フラフラとおぼつかないアクションでジミー・ペイジがステージを動き回っていたら、一瞬ヨロけたんだ。そのときは、思わず「アッ！転ぶ！」って叫んでしまったんだよ。

松村――ハハハハハ。

渋谷――笑いごとじゃないって。

松村――でも、ペイジ・プラントが日本に来たときはジミー・ペイジしかギターいなかったぞ。

渋谷――だから、それだけ時間がかかるということなんだよ。日本に来るまで、どれだけライヴやって、ツアー回ったと思うんだよ。しかも、あのときは十一歳も今より若かったんだぞ。

松村――確かに。

渋谷――しかも、今回は一回勝負だし。

松村――何か、新作も作るとか言ってるらしいじゃないか。

渋谷――そんなもん、一回ステージで転んだら全部なくなるよ。

松村――お前、そこまで後ろ向きになるなよ。沢尻エリカも楽しみにしてるらしいじゃないかよ。

渋谷――……。

松村――でも、ありがたいことだよ。お前がディープ・パープル命だったら、今頃は何の話題にもなってないぜ。ツェッペリンの看板でこうやって商売できるなんて、ラッキーだろう。

渋谷――別にいいよ商売できなくて。今回もいろんなメディアから、アホなコメントばかり求められてウンザリだよ。面倒だから全部断ったけど。やれ、あなたのツェッペリンのベスト・ナンバーは、とか、来日したときの思い出はとか、メンバーにメッセー

ジはとか。

松村——転ばないように、とか言えばいいじゃないか。

渋谷——俺はね、ツェッペリンが死ぬほど好きなの。だからね、本当にそっとしておいてもらいたいの。もう、何回もライヴを観て、それはしっかりと記憶されているから、余計なものは加えたくないんだよ。DVDを観れば分かるように、あれは奇跡のライヴだったわけ。ジョン・ボーナムなしにそれは再現できないの。この騒ぎが、もはやツェッペリンに対しての誤解を増やしているだけなような気がするんだ。ああ、だんだん暗くなってきた。

松村——かわいそうに、俺が代わりにチケットもらってやるよ。

渋谷——……。 S

再結成ツアーやってくれたら、その責任はすべて負います!?

松村——ツェッペリン、良かったらしいじゃないかよ。

渋谷——そうなんだよ、だから俺はあいつらなら必ずやってくれると言ってたんだよ。

松村——言ってねえだろう! さんざん、ろくでもない事になるに決まってるんだから再結成なんか止めろと言ってただろう。

渋谷——まあ、愛ゆえの心配というか、どうしても無責任になれなかったんだな。

松村——別にツェッペリンは、お前に責任とってく

れとは言ってないぜ。

渋谷――何しろ、何度も裏切られているからな。ペイジ・プラントのNYは悲し過ぎたし、ライヴ・エイドの時もひどかったからな。あれをもう一度やられたんでは堪らないぜ。

松村――行きたくないとか言ってたけど、結局行ったんだ。

渋谷――年末のフェスが近いし、十二月なんて出版も放送も一番忙しい時じゃないか。結構悩んだんだよ。

松村――行って良かったな。

渋谷――そうだな。思わず興奮して、翌日にライヴ評を二時間で四千字くらい書いちゃったよ。

松村――今、読んだけど、もっと長いじゃないか。

渋谷――書き切れないんで、その翌日も早起きして、また二千字くらい書いたんだ。

松村――お前が一番興奮してるんじゃないかよ。

渋谷――心配と不安が大きかったんで、その反動でやたら嬉しくなってしまったんだな。

松村――リハーサルは観なかったんだ。

渋谷――コンサート前日にリハやったんだけど、俺はその日の夜にロンドンに入ったんで観る事ができなかったんだ。でも、伊藤政則は観て、不安になるような情報を伝えるんだよ。

松村――どんな情報だよ。

渋谷――三曲ぐらいやったらしいんだけど、ロバート・プラントはほとんど歌わずに、リズム隊とギターのチェックが主体だったらしいんだ。それでドラムがジェイソン・ボーナムじゃないか、チェックが厳しいんだって。

松村――ジミー・ペイジが駄目出しするんだ。

渋谷――いや、逆らしいんだ。

松村――何だ、逆って?

渋谷――ジミー・ペイジがエンディングの小節数を間違えるんで、ジェイソンがジミー・ペイジに駄目出しをしてるんだって。

松村——本当にライヴ良かったのかよ。
渋谷——まあ、エンディングは曲の最後だからな。
松村——そういう問題じゃないだろう。
渋谷——その話を聞いた段階で、俺の不安は確信に変わったね。でも段田はいい感じだったって言ってるんだ。
松村——段田の方がよっぽど冷静じゃないかよ。
渋谷——まあ、あいつには責任がないからな。
松村——だから、お前にも責任はないんだよ。せっかくイギリスに行ったんだから、もっとライヴ前から盛りあがれよ。
渋谷——はっきり言って、寸前まで暗かったね。ライヴ評にも書いたけど、意外とステージが地味で、他のアーティストの演奏も地味なんだよ。クリス・スクワイアは相変わらずデカかったけど。
松村——どうでもいいよ。
渋谷——キース・エマーソン・バンドのリズム隊がイエスなんだよ。〝ファンファーレ・フォー・ザ・コモン・マン〟を演ったんだけど、グレッグ・レイクの何倍もベースがうまくて、何か悲しくなってさ。
松村——いいじゃないかよ、うまいなら。
渋谷——だから、例えばビートルズが再結成されて、ジョージの代わりにやたらうまいギタリストが弾いてたら嬉しいか？
松村——確かに悲しい。
渋谷——ビル・ワイマン・バンドも出たんだけど、何かビル・ワイマンがやたら愛想のいい、世慣れたオヤジになっているのも切なかったな。
松村——前座ビミョーだな。
渋谷——そうなんだよ。最後がフォリナーだったんだけど、フォリナーといってもオリジナル・メンバーはミック・ジョーンズだけのフォリナーだしな。それで〝アイ・ウォナ・ノウ〟を演るんだけど、少年少女合唱団みたいなのが出て来てサビのコーラスを歌うんだ。
松村——ドラマチックじゃないか。ヒット曲だから

盛りあがるだろう。

渋谷——客にも歌わせるんだけど、スタンドなんか半分くらいしか人がいないし、アリーナで待ってる客もツェッペリン目当てだし、盛りあがらないんだ。観てられなくて、伊藤と一緒にトイレに行っちゃったよ。

松村——女子中学生でもあるまいし、一緒にトイレに行ってんじゃないよ。

渋谷——二人とも、同じ気分だったんだよ。そんな展開だから、ますます気分が落ち込んじゃってさ。

松村——でも、それはツェッペリンを派手に見せるための演出だったんだろう。

渋谷——そういうわけじゃないんだろうけど結果的にはそうなったよな。ステージにあるものを全部片付けちゃったんで、もう出て来ないで、終わるのかと思ったぜ。

松村——思うな、そんな事。

渋谷——でも、これも伊藤の分析なんだけど、このライヴを仕掛けたのが、ハーヴィ・ゴールドスミスっていう超大物プロモーターなんだよ。そいつが一日限りのライヴにそんなエネルギーを使うわけないから、絶対にワールド・ツアーを考えてるってわけ。

松村——確かに。お前より伊藤の方がいちいち冷静で鋭いな。

渋谷——あいつは責任ないから。

松村——だから、お前もないいんだよ。

渋谷——いや、俺は感じてるね。

松村——勝手に感じてろよ。

渋谷——つまり、この日のライヴはそのプロモーター的にはワールド・ツアーの布石なんだな。だから、やたら演出にも力が入ってたんだよ。他のバンドと扱いが違い過ぎたよ。でも、今回一番喜んでいるのはそいつかもな。このライヴの成功は全世界的なビッグ・ニュースで、その宣伝効果は何百億円使ったのと同じだぜ。

松村——ニュースで流れた映像見ろと、確かに観に

CamScannerでスキャン

行きたくなるよな。
渋谷――そう思った奴が世界で何百万人もいると思うぜ。
松村――やるのかな、ワールド・ツアー。
渋谷――やるだろう。カルトが前座やるのをバラしちゃったみたいだけど、来年後半アメリカからやるんじゃないのかな。もともとアメリカでやたら人気があったバンドだからな。CNNも、ツアーが計画中だって報道していたし。
松村――盛りあがるだろうな。
渋谷――あのテンションで続いてくれたらな。何だかメチャメチャにストイックだったんだよ。あれがなくなってグズグズになるとヤバイよ。また責任とらなくちゃ。
松村――だから、いいって言ってるだろう。**S**

CamScannerでスキャン

どうしてミュージシャンは自伝を出したがるのか

渋谷——コンニチハ、ティナ・ターナーです。もう離婚して三十年経つので夫という感じはないですが、惜しい人をなくしたと思います。

松村——アイク・ターナー死んだんだ。というか、まだ生きてたんだ。

渋谷——そうなんだよ。俺も同じことを思ったね。

松村——でも、読者は誰も知らないだろう。いいのか、こんな地味なネタで。

渋谷——いいんだよ、前回のツェッペリン・ネタが受け過ぎて担当の小川がいい気になっているから、今回は地味なネタで思い知らせてやる。

松村——よく分かんないけど、受けなくて困るのは小川じゃなくて、俺達じゃないか？

渋谷——そうか、じゃあ頑張ろうか。

松村——なんなんだよ。別にお前が社長なんだからいいけど、時々わけの分からないことを言うよ

な。
渋谷――でもアイク・ターナーって、去年『ライジン・ウィズ・ザ・ブルース』というアルバムでグラミー獲ってるんだよ。
松村――バリバリの現役じゃないかよ。
渋谷――そうなんだよ。まあ、もともと才能はあるからな。いちおう、ついてこれてない読者のために説明すると、ティナ・ターナーと一緒にアイク&ティナ・ターナーを作って活動していた黒人ミュージシャンで、彼女と結婚もしていたわけ。
松村――一時期の人気は凄かったよな。
渋谷――凄かった。それにR&Bとロックを結合するスタイルを作る上で革新的な仕事をたくさんしたよな。
松村――でも、離婚した後は、恐怖のDV男というイメージが強かったな。
渋谷――離婚して、ティナが自伝で全部書いちゃったんだよな。アイクが日常的に暴力を振るう夫で、彼女は殴られて鼻の骨折で苦しんでいたとか、コカイン中毒患者だったとか、全部バラされちゃったんだな。
松村――頭に来てたんだろうな。
渋谷――まあな、その後にティナ・ターナーはソロとして大成功して、アイクはドラッグで投獄までされているから、イメージは決定的だったな。
松村――嘘だろう。なんで、お前がアイク・ターナーのドメスティック・バイオレンスの現場を知っているんだよ。あの夫婦の執事をしてたのか。
渋谷――してるわけないだろう。
松村――そうだよな、英語も喋れないし。
渋谷――そういう問題じゃないだろう。
松村――じゃあ、なんで見たんだよ。
渋谷――アイク&ティナ・ターナーの来日コンサ

俺なんか現場見てるし。

ートに行ったんだよ。

松村――ステージで殴ったのか。

渋谷――殴るわけないだろう。最後まで話を聞けよ。もう、その頃はアイク&ティナ・ターナーも一時期の勢いがなくて、会場も満員じゃなかったんだ。それででか憶えてないけど前から二、三列目の凄い席で俺は観てたんだよ。

松村――珍しいな、お前、前の方の席嫌いじゃないか。

渋谷――そうなんだよ。それでアイク&ティナ・ターナーが出てくる前、バック・バンドが何曲かやって客を盛りあげる構成だったたんだ。

松村――R&Bでは、よくあるパターンだよな。

渋谷――そうそう。でも、盛りあがらなかったんだ。そうしたら、ライヴ中にアイクがバンマスをステージの影に連れていって、殴ってんだよ。

松村――凄えな。

渋谷――怖過ぎだよ。そんなもん見せられたんでライヴに集中できなかったぜ。

松村――前の方の客にはよく見えたんだ。

渋谷――かなり注意してないと分かんなかったと思うけど、腹を殴っていたのがリアルだったな。ポップ・ミュージックのダークサイドを見せられた少年、渋谷陽一はそこから評論家の道を志したんだな。

松村――嘘だろう。

渋谷――嘘だけど、驚いたな。きっとティナ・ターナーだけじゃなくて、日常的に周りに暴力を振るってたんだろうな。

松村――いくら才能あっても、それじゃ誰もついて来ないよな。

渋谷――だろうな。でも二十一世紀に入ってからはリヴェンジの人生で、新しい作品も評価されてツアーもやってたらしいな。だから去年のグラミ

―受賞はその流れで、全然唐突なものじゃなかったみたい。俺も調べて知ったんだけど。

松村――それこそティナ・ターナーに対抗して自伝でも書けば売れたかも。

渋谷――まあ、死んじゃったからな。でも誰かが絶対に伝記を書くな、読みたいもん。人生の最後にスポットライトを浴びたんだからハッピーエンドだし。

松村――ネタは無数にあるだろうな。

渋谷――普通なら書けないことも死んでるから書けるしな。

松村――そういえばクラプトンも自伝出したんだよな。

渋谷――売れたみたいだぜ。去年出た自伝のトップ・ファイヴが、クラプトン、ロニー・ウッド、ジュールズ・ホランド、アレックス・ジェームス、ジョニー・ウォーカーだったみたい。

松村――さすがに年齢が高いミュージシャンが多いな。若いと書くことないからな。

渋谷――ブラーのアレックス・ジェームスは若いぞ。

松村――何書いてんだよ。

渋谷――九〇年代にコカインとシャンペンに二億二千万円使ったって書いてるらしい。

松村――定番のネタだよな。

渋谷――確かに。でも、ミュージシャンって自伝をよく出すよな。

松村――売れるからだろう。

渋谷――そうだけど、ミュージシャンにとって自己告白って、一種の治療的効果があるんだと思うな。

松村――スキャンダルを話すことが治療になるのかよ。

渋谷――そうそう。

松村——余計ストレスになるだろう。

渋谷——そうじゃないんだよ。スターっていうのは、ある意味プライヴァシーがないじゃないか。

松村——まあな。

渋谷——特にロック・ミュージシャンの場合、人生が表現になっている部分が大きいじゃないか。その人がどういう人生を歩んで、その時にどういう曲を書いたかがファンの感情移入のポイントになってるわけよ。

松村——クラプトンなんか、まさにそうだよな。

渋谷——まさに、そうだろう。だから自伝も売れるんだよ。ドラッグ、アルコールという定番のネタから、ジョージ・ハリスンとの三角関係、息子の事故死、いくらでもトピックはあるぜ。

松村——しかも、それを曲にしてるし。

渋谷——だから治療なんだよ。そうした不幸をしっかり話したり、曲にしたりすることで対象化して過去のものにしていくわけ。

松村——人に伝えるのが重要なんだ。

渋谷——ティナ・ターナーの場合もそうなんだと思う。自分がアイクと別れてソロになった時、絶対にアイクの暴力とドラッグについては話をしたかったんだと思う。それは復讐というより、自分のために必要な行為だったんだよ。そうしないと新しい自分を受け手の前に提示できないんだよ。それで自伝を出したんだと思うな。お前もどうだ。

松村——別に治療は必要ないから大丈夫。お前こそどうなんだよ。

渋谷——俺はインタヴューするのは好きだけど、されるのは嫌いだから絶対出さないね。

松村——でも、下手な伝記を出されるより、自伝を出しておけば、それがいちおう公式になるから、有名人は出しておくんだろうな。

渋谷——まあ、それでも伝記は出るけどな。今後

CamScannerでスキャン

の目玉はキース・リチャーズの自伝だな。
松村――それ、凄そうだな。あれだけネタの宝庫で、しかもスーパースターで、あげくにヤシの木から落ちたりまでしてくれたミュージシャンはそういないよな。お前も、どっかから落ちてみれば伝記売れるかもよ。
渋谷――やなこった。
小川――社長、アイク・ターナーって自伝出してるんですけど、一九九九年に。
渋谷――……。
小川――そこでティナへの暴力とか認めて、そこからリヴェンジが始まったらしいです。やっぱ、これも治療効果ですか、さすが社長。でも、アイク、自伝出してるんですけど。
松村――俺、帰るからな。**S**

渋ペ対談顛末記、詳しくは二〇〇八年四月号をどうぞ

渋谷——コンニチワ、ジミー・ペイジです。嫌な奴の顔は絶対に忘れません。

松村——お前、今回のインタヴューの時、ジミー・ペイジに「また、お前か」って言われたんだって。

渋谷——失礼な奴だよな。「毎回、毎回、日本に来る度に、お前じゃないか」とか言うんだぜ。

松村——でも、本当じゃないか。

渋谷——前回怒らせたんで、憶えてないといいな、と思ったら、しっかりと憶えてやんの。

松村——怒らせたから印象に残ったんだよ。でも、なんで怒ったんだ。

渋谷——「ロバート・プラントはなんであんなにツェッペリンのことが嫌いなんですかね」って訊いたら「知らねえよ、そんなことは本人に訊いてくれよ」とか怒ってたんだよ。

松村——そんなことを訊かれても困るからだよ。

渋谷——いいじゃないか、少しは答えてくれても。マネージャーなんか、まだ時間が三十分以上残ってんのに、もう終わりだとか言い出しやがって、

最低だよ。だから無視して、執拗にロバート・プラントのことを訊いてやったんだよ。

松村——最低なのは、お前だろう。

渋谷——そうしたら、悲しそうな顔して遠くを見つめ出したんで、やばいと思ってやめたんだ。

松村——お前、何しに行ってんだよ。取材なのかよ、単なるイジメなのかよ。

渋谷——ツェッペリンの真実に迫る取材に決まってるだろう。うまい具合にマネージャーは俺のことを忘れてたけど、やったと思ったら本人が憶えてるんでまいったな。

CamScannerでスキャン

松村——普通、好きなミュージシャンに顔を憶えられたら嬉しいだろう。
渋谷——普通はな。でも、俺の場合は悪い形で憶えられてるから、忘れて欲しかったわけ。
松村——今回はうまくいったのか？
渋谷——前回のリヴェンジで、またロバート・プラントの話からしてやろうかと思ったんだけど、根性なしの古川がどうしてもやめてくれとか言って泣くんだよ。
松村——全然、リヴェンジじゃないだろう。また怒らせるだけじゃないか。
渋谷——いや、ロバート・プラントの質問をしながら盛りあげるんだよ。
松村——どんな質問だよ。
渋谷——せっかく再結成で盛りあがってんのに、ロバート・プラントのやる気のなさでツアーができなくて頭に来ませんか。
松村——それ、挑発してるだけじゃないか。
渋谷——これならロバート・プラントに訊いてくれとか言わないだろう。
松村——そういう問題じゃないから。
渋谷——そこで、俺とジミー・ペイジでロバート・プラントの野郎はとんでもないって悪口で盛りあがるんだよ。
松村——それにどんな意味があるんだ。
渋谷——ツェッペリンの真実に迫れるじゃないか。
松村——お前のツェッペリンの真実って、ロバート・プラントの悪口なのかよ。
渋谷——そうそう。
松村——そうそうじゃないだろう。
渋谷——でも、古川が泣くからやめた。
松村——顔まで憶えられていたんだからやめてよかったんじゃないか。古川じゃなくてジミー・ペイジが泣いたらどうするんだよ。

渋谷――だから、今回はヨイショの質問から始めたんだよ。

松村――何だよ、ヨイショの質問って。

渋谷――あの再結成コンサートってアーメット・アーティガンの追悼イヴェントじゃないかよ。

松村――そうだな。

渋谷――アーメット・アーティガンの追悼DVDでジミー・ペイジが、「彼のおかげでツェッペリンの四枚目はタイトルもアーティスト・クレジットもなしで出せて感謝してる」って言ってんだよ。だから、俺はインサイダーだよ、お前に詳しいよって、アピールするためにそのことについて訊いてやったんだよ。

松村――なるほど、それで盛りあがったのかよ？

渋谷――そんなこと、言ってないって。

松村――……。

渋谷――あいつは、あの時反対してとんでもなかったって怒り出しちゃってさ。

松村――何か、最近のお前のインタヴューってすべてが渋松化してないか。

渋谷――インタヴューだけじゃなくて、仕事も人生も渋松化してる気がする。

松村――どういう人生なんだよ。

渋谷――だって、言ってないじゃないだろう。DVDとして売ってて世の中に流通してるんだから。

松村――言ってやったのか。

渋谷――言ってやったよ。そうしたら、お世辞だよ、とか言って、ヒャヒャヒャヒャッて笑ってごまかされた。

松村――そのインタヴュー大丈夫かよ。

渋谷――俺は日本一のインタヴュアーで、日本一ツェッペリンに詳しいんだから、大丈夫に決まってるだろう。

松村――でも前回は失敗したんだろう。

CamScannerでスキャン

渋谷――あれはあれでツェッペリンの真実が浮かびあがったリアルなインタヴューだったんだよ。

松村――何でもツェッペリンの真実とか言ってごまかしてないか？

渋谷――ごまかしてる。

松村――……。

渋谷――そういえばグラミーってエイミー・ワインハウスが独占したな。

松村――いきなり話が飛ぶな。

渋谷――あれってどうなの？

松村――どうなのって、前評判どおりだったんだろう。

渋谷――そうだけど、いかにも過ぎないか。少し前のノラ・ジョーンズと同じ感じだよな。

松村――そういえば、ノラ・ジョーンズもやたら取ったたな。

渋谷――業界受けだよ。

松村――エイミー・ワインハウス嫌いなのかよ。

渋谷――凄く好きだし、ノラ・ジョーンズも素晴らしいアーティストだと思うよ。

松村――だったらいいじゃないか。

渋谷――ちょっと前、人の紹介でいまどきの女優に会ったんだけど、俺が音楽関係者だと言ったら、エイミー・ワインハウスって最高ですね、とか言うんだよ。

松村――いいじゃないか。

渋谷――いいけど、何だかブランドとして消費されてる感じがしたんだ。

松村――偏見だろう。

渋谷――そうかも知れないけど、何か嫌な感じなんだな。確かにエイミー・ワインハウスは素晴らしいけど、去年一番重要なアルバムかと言えば、そうじゃないと思うんだ。

松村――それは、お前の意見だろう。

渋谷——グラミーって、結局年寄りの業界関係者が選んでいるわけじゃないか。そいつらは、一番旬なロックやヒップホップは分かんないと思うんだ。でも古いもの選ぶと馬鹿にされると思ってんだよ。そこにノラ・ジョーンズとかエイミー・ワインハウスみたいな、時代的に旬であるけど、自分達の価値観の中でも理解できるものが出て来ると飛びついちゃうんだよ。

松村——それのどこが悪いんだ。

渋谷——ツェッペリンが選ばれない。

松村——何だそれ。

渋谷——つまり、ツェッペリンは評論家受け、メディア受けの悪いバンドだったわけ。間違ってもグラミーなんか現役時代に獲るようなバンドじゃなかったんだよ。でも、本当に重要なバンドはそういうもんなんだよ。クイーンとかもそうだよな。現役時代は、とにかく馬鹿にされてたから。それが時代によって偉大さが証明されていくわけよ。

松村——いいじゃないか。

渋谷——でも、今の時代にもツェッペリンやクイーンに相当するバンドはいるわけよ。グラミー、そういうのちゃんと見ろ。

松村——見ないと思う。

渋谷——だいたい賞なんていいかげんなもんで、グラミーの八〇年代なんかTOTOの四枚目、ライオネル・リッチーの『オール・ナイト・ロング』がアルバム・オブ・ザ・イヤーだぜ。なかったことにしたいだろうな。

松村——ジョン・レノンやU2も取ってるんだけど。

渋谷——いいんだよ、そういうのは。

松村——……。

渋谷——賞そのものを採点したいよな。悔しければツェッペリンにやってみろってんだよ。

CamScannerでスキャン

松村——『フィジカル・グラフィティ』の時は、何が取ってるんだ。

渋谷——ポール・サイモンの『時の流れに』だよ。悪くないけど、『フィジカル・グラフィティ』だろう。

松村——よく分かんないけど、四枚目の時は何なんだ。キャロル・キングの『つづれおり』か、順当じゃないか。

渋谷——……。

松村——『プレゼンス』の時はスティーヴィー・ワンダーの『キー・オブ・ライフ』だけど、これも順当じゃない。

渋谷——……。

松村——俺、もう帰るから。

小川——社長、『コーダ』の時は『ダブル・ファンタジー』ですよ。

渋谷——ウルサイ！ **S**

渋谷陽一、ディスク・ガイドでもツェッペリン書いてます

渋谷――コンニチハ、ロバート・プラントです。ギャラを二百十億もらってもツアーはしたくありません。

松村――どうしてもツェッペリンはやりたくないみたいだな。

渋谷――そんなに金が余ってるわけでもないだろうから、二百十億くれるんなら普通やるだろう。

松村――逆にそこまでやりたくないという気持ちが凄いよな。よほど嫌じゃないと、そこまで拒否しないだろう。

渋谷――そうだよな。人を殺せと言ってるわけじゃないんだからな。みんなに喜びを与える行為を頼まれて、自分もスター気分を味わえる事を拒否する、そのマイナスの理由を知りたいな。

松村――ツェッペリンになるのが嫌なんだろう？

渋谷――そうみたいだな。もの凄いトラウマにな

ってるとしか思えないな。俺なりに分析すると、まず今回の再結成が盛りあがり過ぎたんで、ビビッたと思うんだ。

松村——いいじゃないか、盛りあがったんだから。

渋谷——でもオークションでチケットが一千万円だぜ。再結成のインフォメーション・サイトへのアクセスが二億アクセスだぜ。

松村——ツェッペリンって、そんなに人気あったっけ？

渋谷——きっとメンバーもそう感じたと思うんだ。こりゃ、現役時代より凄い事になっているぞ、と思ったはずだよ。そこでロバート・プラントの巨大なトラウマが蘇ったんだな。

松村——どういう事だよ。

渋谷——つまり、ツェッペリン解散からの二十七年は、ロバート・プラントにとって、元ツェッペリンという看板との闘いだったわけだよ。ジミー・ペイジにしろ、ジョン・ポール・ジョーンズにしろ、別に元ツェッペリンという看板は嫌じゃないし、むしろ名誉だったりするんだけど、ロバート・プラントは嫌なんだよ。彼にとってツェッペリンは自分のやりたい事じゃなかったんだろうな。たとえば、元ヴィジュアル系バンドのヴォーカルがソロになって、ヴィジュアル系のイメージをなくしたいと思っているみたいなもんだよ。

松村——ツェッペリンはヴィジュアル系じゃないぞ。

渋谷——だからたとえだろう。

松村——ジョン・ボーナムが化粧したら怖いぞ。

渋谷——だからたとえだと言ってるだろう。

松村——ファンも黒い服着てないぞ。

渋谷——お前、わざと言ってるだろう。

松村——でも、ロバート・プラントなんて元ツェッペリンという看板がなくなったら、ほとんど商

CamScannerでスキャン

売できないだろう。

渋谷——イギリスでは、そんな感じでファンのブーイングが起きているみたいだな。そこが嫌なんだよ、結局。ロバート・プラントにしてみたら、もうツェッペリン時代よりソロのキャリアが何倍も長いわけだよ。ようやくそれなりにソロも成功して、元ツェッペリンと言われなくなったのに、またツェッペリンをやったんじゃ、この何十年の苦労が水の泡なわけ。

松村——だったら再結成しなきゃよかったじゃないか。

渋谷——そうなんだけど、そこが誤算だったんだと思うな。こんな大騒ぎになると考えていなかったんだと思う。だって、レーベル・オーナーの追悼イヴェントのゲストだぜ。いくつものアーティストが出るうちのひとつなんだから、という気分だったんじゃないか。

松村——フォリナーと同じレベルだったんだ。

渋谷——そうそう、あのイヴェントでフォリナーが登場しても、ビル・ワイマンが復活しても、そんな大騒ぎになってないじゃないか。

松村——確かに。キース・エマーソンがELPの曲演ったというのは話題になってないよな。

渋谷——まあ、どこでも演ってるからな。

松村——でも、ツェッペリンだって、今回で三回目の再結成じゃないか。

渋谷——そうなんだよ。しかも、前の二回は失敗してるしな。

松村——何が違ってたんだ。

渋谷——ジミー・ペイジの気迫だよ。インタヴューして分かったけど、前二回の失敗はかなりのトラウマになっているな。

松村——フィル・コリンズのせいにしてなかったか。

渋谷――あれは笑ったな。でも、その環境を作ったのはジミー・ペイジなんだから、結局は自分のせいだよ。だから、今回はやたら練習したし、PAチェックのために何度も会場に行ってるわけよ。

松村――あれは凄いな。何か執念みたいなものを感じるよな。

渋谷――原稿でも書いたけど、ようやくジミー・ペイジはツェッペリンが何だか分かったわけよ。やっぱり努力しないとツェッペリンは降りてこないんだよ。

松村――ロバート・プラントは違うのか？

渋谷――だってリハに参加してないんだぜ。

松村――そうみたいだな。どうして参加してないんだ？

渋谷――いてもしょうがないからだよ。

松村――……。

渋谷――ジミー・ペイジが言ってたじゃないか、ロバート・プラントがいなくてリハは最高だったって。

松村――そんな事、言ってないだろう。

渋谷――でも、ほとんどのリハは三人でやって、それが最高だったとは言ってるぜ。

松村――確かに。

渋谷――あり得ないだろう普通。たとえばストーンズのリハがミック・ジャガー抜きでほとんど行なわれるとか、U2がボノ抜きでやるとか。

松村――しかも、そのロバート・プラント抜きのリハの一回目で、今回はうまくいくと思ったとか言ってるしな。

渋谷――そうそう、それってどうなんだよ。ロバート・プラントの立場がないじゃないか。そんな状態だから、ロバート・プラントは今回のツェッペリン再結成の温度感がリアルに分からなかったんだと思うぜ。

CamScannerでスキャン

松村――そうかな。

渋谷――だから、想定以上の盛りあがりに戸惑ってしまったんだと思う。ここでツェッペリンをやってしまうと、もう死ぬまで元ツェッペリンのロバート・プラントになってしまうという人生の危機を感じたんだと思うな。

松村――やらなくても元ツェッペリンのロバート・プラントだろう。

渋谷――まあ、本人はそう思ってないんだろうな。それともうひとつは、やっぱりやってみたら疎外感を感じたんだと思うな。

松村――本当かよ。

渋谷――だって、ライヴ中ヒマそうだったぜ。

松村――ヒマなわけないだろう。ライヴ中なのに。

渋谷――それがヒマなんだよ。だって半分以下だぜ、曲の中のヴォーカル・パート。二時間のライヴ中、一時間は何もする事ないんだからヒマだろう。そりゃ、リハもロバート・プラント抜きでやれるよ。つまり、三人のリハだけでバンドの音は、ほとんど作れちゃうんだよ。

松村――何か、ロバート・プラントが可哀想になってきたな。

渋谷――だから二百十億あげるって言ってるわけじゃないか。

松村――別にそれが理由じゃないだろう。だって全員もらえるんだろう？

渋谷――まあな。

小川――あの、今回はツェッペリンじゃなくてディスク・ガイドをネタにって、お願いしてたんですけど……。

松村――えっ、そうなのか？

渋谷――まあな。

松村――お前、ツェッペリンの事を話し始めると止まんないからな。山本さんも毎回ツェッペリン

CamScannerでスキャン

で漫画描きにくいだろう。
渋谷――そうかも。スイマセン。
松村――ディスク・ガイド、俺も原稿書いたぞ。大貫とか伊藤も書いてたけど、『ロッキング・オン』らしいのか、らしくないのか面白かったな。
小川――絶賛発売中なのでよろしくお願いします。大貫さんはロンドン・ナイトのディスク・ガイドも出してるんで、こちらも是非よろしくお願いします。
渋谷――結局、大貫もクラッシュで三〇年、俺もツェッペリンで三〇年って事なんだな。
松村――俺はビートルズで四〇年だぞ。
小川――さすが松村さん、凄いですねえ。
渋谷――誉めるんじゃない、バカ！

注：[illegible]

渋谷陽一があなたの街のレコード店に現れます？

渋谷――コンニチハ、ジェイソン・ボーナムです。やっぱり親父は偉大なので、基本コピーに徹してます。

松村――……。

渋谷――どうしたんだよ。

松村――もう止めないか、そのネタ。

渋谷――どうしてだよ。

松村――飽きたよ。

渋谷――俺は全然飽きてないぞ。

松村――そうかも知れないけど、俺は飽きたし、読者も飽きたと思うな。

渋谷――そんなことないって、小川、読者にも受けてるよな。

小川――ハイ、皆さん笑ってます。

渋谷――ほら見ろ、受けてんだよ。

松村――いや、小川、お前、今笑ってますって言ったよな。

小川――ハイ、皆さん笑ってます。

松村――受けてるとは言ってないよな。

小川――ハイ、皆さん笑ってます。

松村――ほら見ろ、受けてるんじゃなくて、あきれて笑ってるんだよ。

渋谷――違うよ、小川、受けて笑っているんだよな？

小川――ハイ、皆さん笑ってます。

渋谷――どっちなんだよ。

小川――ハイ、皆さん笑ってます。

渋谷――……。

松村――かわいそうだろう、小川の立場で受けないとは言えないんだから。

小川――ハイ、皆さん笑ってます。

CamScannerでスキャン

松村――分かったから、お前はもう行っていいよ。

渋谷――でも、ロバート・プラントの発言も微妙に変化して来てるし、ヴェルヴェット・リヴォルヴァーのメンバーがツェッペリンの前座やるってBBCで喋ったりしてるんだよ。

松村――前にもそんな話なかったか？

渋谷――カルトも言ってたな。

松村――ガセだろう。

小川――ガセです。

松村――何だ、またいたのかよ。

小川――それはダフ・マッケイガンというベーシストが『ホット・プレス』誌で喋ったのですが、後にギタリストのスラッシュによって全く根拠のない話として正式に否定されました。皆さん、笑ってます。

松村――ありがとう。本当にもう行っていいから。そのうち渋谷に殺されるから。

渋谷――殺す。

松村――だから、もうツェッペリン・ネタはいいよ、それよりディスク・ガイド売れてるらしいじゃないか。

渋谷――そうなんだよ。やっぱりこういう本の需要ってあるんだな。

松村――だから出したんだろう。

渋谷――まあ、そうなんだけど、若いロック・ファンにしてみると、何を聴いていいか分からないんだろうな。

松村――ロックもそれなりの歴史があるわけだから、作品も半端な数じゃなくなっているよな。

渋谷――そこで俺は考えたわけよ。

松村――何を考えたんだよ。

渋谷――いまだこの世に存在していない新しい職業を考えたんだ。そして、その第一号に俺はなろうと思うんだ。

松村――何だ、そのこの世に存在していない新しい職業って。

渋谷――ロック・ソムリエ。

松村――……。

渋谷――あなたにとっての最良のロックを選んであげようという仕事だよ。最高のハード・ロックを聴きたいならツェッペリン、最高のギター・バンドを聴きたいならツェッペリン、最高の七〇年代ロックを聴きたいならツェッペリン、という風にアドバイスするわけ。

松村――全然アドバイスになってないじゃないか。

渋谷――そういうアドバイスがあったら無駄なCDを買わないで済むじゃないか。ジャーニーを買おうとしている客が居たら止めるように忠告したり、シカゴ買いに来た客が居たら一枚目か二枚目にしろとか、有益なアドバイスをしてやるわけよ。

松村――単に自分の好みを押し付けてるだけじゃないかよ。

渋谷――そんなことはない、金の無駄遣いをさせないようにしてるんだよ。好みとか以前に絶対正しい買い方があるんだから。お前だって、ビートルズをどれか一枚買おうとしている人が居て、『レット・イット・ビー』を選ぼうとしていたら止めるだろう。

松村――止める。

渋谷――ほら見ろ。そういう誰もが認める真実があるんだから、それをアドバイスするのは大切なんだよ。

松村――誰もが認める真実かどうかは知らないけど、参考意見には確かになるかもな。

渋谷――それで、ビートルズを一枚買うとしたら、『No.5!』にしろって教えるわけよ。

松村――何で『No.5!』なんだよ。

渋谷――俺が好きだから。

松村――意味ないだろう、そんなアドバイス。

渋谷――いいんだよ、レストランのソムリエだって、絶対に適当なんだから。高いワイン飲ませようとして、調子いいこと言ってるだけに決まってるぜ。テレビでよく、一万円と千円のワインの飲み比べやっていて、皆当てられないじゃないか。そんなもんよ

りはロック・ソムリエの方が有益だよ。

松村——ロック・ソムリエはどこで仕事するわけ？

渋谷——レコード店にいて客にアドバイスをするわけだよ。俺ならジャーニーの棚の前で客が買わないように待ってるね。

松村——営業妨害だろう。そんな奴、レコード店が金出して雇うわけないだろう。

渋谷——その代わり、いいレコードを推薦するわけよ。どうせならパート・ヤンシュのソロを買えとかさ。

松村——だから押し付けだといってるだろう。

渋谷——いいアルバムだぞ。

松村——そうかも知れないけど、マニアック過ぎて、誰も喜ばないよ。

渋谷——そんなことはない。昨日、ピーター・バラカンと『SIGHT』の連載の打ち合わせをしていて、次号のテーマはパート・ヤンシュのソロにしようって盛りあがったぞ。

松村——そんなもんで盛りあがるのは、お前とピーターと、後は三人ぐらいしか日本にはいないね。

渋谷——そんなことはない、あれを聴いたら、十人のうち八人はペンタングルのコレクターになるね。

松村——なるわけないだろう。じゃあ次号の『SIGHT』にはパート・ヤンシュのソロについての原稿が載るんだ。

渋谷——いや、やめてオーティス・レディングにした。

松村——何でだよ。

渋谷——マニアック過ぎるから。

松村——……。

渋谷——だから、雑誌の場合は相手が不特定多数だから難しいけど、ロック・ソムリエはパーソン・トゥ・パーソンじゃないか。

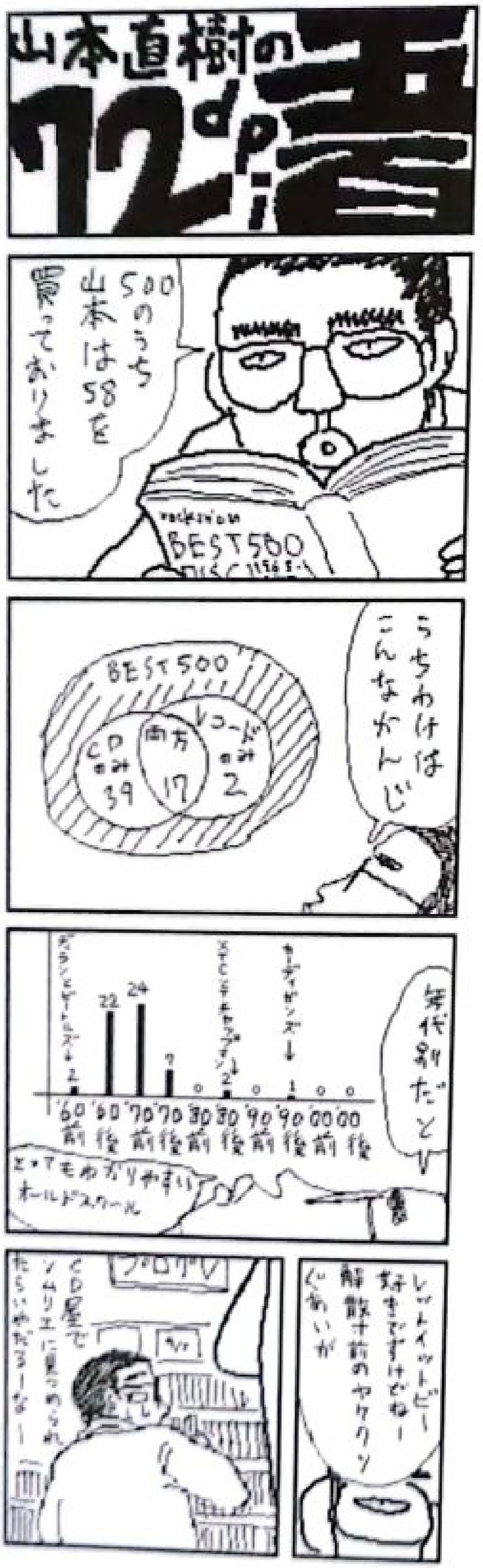
松村——まあな。

渋谷——だからいいわけよ。

松村——何がいいんだよ。

渋谷——よく分かんないけど、説得しやすいという

か、だましやすいというか。
松村――ハナからだますつもりなのかよ。
渋谷――そうじゃなくて、心のこもった説得ができるわけじゃないか。俺は人気ソムリエになる自信があるね。ツェッペリン好きは皆俺のところに来るぞ。
松村――意味ないだろう。ツェッペリン好きなら、もうツェッペリンを選んでるんだからソムリエのアドバイスは必要ないじゃないか。
渋谷――そんなことないよ。
松村――じゃあ、何を選んですすめるんだよ。
渋谷――ツェッペリンに似た音のCD。
松村――……。
小川――ハイ、皆さん笑ってます。
松村――今月のオチは予想できたな。
小川――ハイ、皆さん笑ってます。 S



渋谷と松村、特に仲が悪いというわけでもありません

松村——この号が出るときにはもう当然結果は分かってるんだけど、五月場所は誰が優勝するんだろうな。このまま、琴欧洲が勝ち続けると、面白いんだけど。

渋谷——……おい、違うだろ。

松村——？

渋谷——渋松対談は「コンニチハ」で始まるんじゃないか。そういう話だったら、「コンニチハ、琴欧洲です」って言えよ。

松村——ああ、あれ、もうやめようぜ。飽きたよ。お前はずっとラジオで「コンバンハ、渋谷陽一です」って言ってたけど、飽きないのかよ。俺はすぐに飽きて、「コンニチハ、マスクド・スーパースターです」とか言ってたぞ。

渋谷——あれは飽きる飽きないの問題じゃなくて、自己紹介じゃないか。なにがマスクド・スーパースターだよ。他人の名前を言うんじゃないよ。

松村——なに言ってるんだよ。お前は先月は「ジェイソン・ボーナムです」って言ってたし、先々月は「ロバート・プラントです」って言ってたじゃないか。

渋谷——……それは論旨が違うだろ。うるさい奴だな、まったく。

松村——違わなくないだろ。それだったら、「ロバート・ボーナムです」とか、「ジミー・ポール・ジョーンズです」とか言えよ。

渋谷——誰なんだよ、そいつは。

松村――なんか、トリビュート・バンドでいそうだよな、レッド・パープルとかディープ・ツェッペリンとか。

渋谷――いないよ。

松村――"スモーク・オン・ザ・ヘヴン"とか"ステアウェイ・トゥ・ザ・ウォーター"とか。

渋谷――だから、ないんだよ、そんな曲は。気持ち悪いよ。気持ち悪いって言えば、チープ・トリックの武道館三十周年コンサート。お前と席が並んでいて、気持ち悪かったぞ。

松村――あの日、開演の三十分前ぐらいに武道館に着いたら、ソニーの担当者に「席は渋谷さんの隣なんですけど、大丈夫ですか?」って訊かれたぞ。

渋谷――それが、どうしたんだよ。

松村――世間では、俺とお前は仲が悪いことになってるんだよ。何年か前にも、ライヴ・ハウスでトーク・ライヴをやって、アース・ウィンド&ファイアーがかかってるときに、トイレに行ったら、後から店の人に「やっぱり、あれは渋谷さんがEW&Fが好きだから、ステージから下りたんですか?」って言われたぞ。

渋谷――なんだ、それは。

松村――だから、本当は「ションベンしに行っただけだよ」って言おうと思ったんだけど、オアイソで「あいつの性格がちょっとね」って言っておいた。

渋谷――どこが、オアイソだよ。

松村――だから、俺とお前は仲が悪いんだから、気やすく話しかけないでくれよな。

渋谷――話しかけない対談なんて、どこにあるんだよ。

松村――だけど、あの日の席は、ちょっとおかしかったよな。伊藤政則がいて、その隣がお前で、その隣が俺で、その隣が本当は大貫憲章だったんだけど、来られなくてあの日のもう一人の主役の野中社長[注1]だもんな。

渋谷――腹が立ったのは、俺達のずっと前の方に粉

CamScannerでスキャン

川や内田がいたことだよ。

松村――ああいうところで「席、変われ」とか怒鳴らないでくれよな、みっともないから。しかし、チープ・トリック自体は、良かったよな。

渋谷――観客の年齢層は高かったけど、七千人は入っていたっていうしな。しかし、最初のヴィデオは良かったな。

松村――ヴィデオが二十分、本編が一時間二十分、アンコールが十分で、計二時間って感じだったな。だけど、いいじゃないか、俺達世代があれだけやってるんだから。

渋谷――まあ、ロック・バンドとしては完全に現役だよな。まだ十年は、平気でツアーやるだろうな。だけど、お前、甘い声で「クライン、クライン、クライン」って歌わなかったじゃないか。歌うつもりだったんだ。

松村――どうしようかって思ったんだけど、歌ったら絶対にお前があちこちで言い触らすだろうって、松村の奴、五十にもなって「クライン、クライン、クライン、クライン」とか歌ってやんの」って、仲悪いし。

渋谷――言うか、そんなこと。

松村――で、お前が来る前に伊藤と話してたんだけど、前は武道館ではミュージシャンが凄く小ちゃく見えたのに、今は東京ドームや横浜アリーナがあるから、それほど小さく感じなくなったよな。

渋谷――オヤジの昔話してるんじゃないよ。

松村――で、最初の話に戻るんだけど、両国国技館に相撲を見に行くと、もっと力士は小ちゃくないんだよ。

渋谷――どうして。

松村――まず、土俵が会場の真ん中にあるから、それほど遠くない。それに、力士はデカい。

渋谷――……。

松村――琴欧洲は二メートル二センチ、百五十二キロだぞ。やっぱり、リック・ニールセンとはずいぶん違うよな。

CamScannerでスキャン

渋谷——お前の話はどうなってるんだかよく分かんない。だけど、チープ・トリックは三十分前に行ったのに、なんでそのちょっと前にやった初期ロッキング・オンのスタッフの会には二十分も遅れて来たんだよ。

松村——しつこい奴だな。だから代官山なんて俺はもうずっと行ってなかったんだよ。

渋谷——で、東横線と井の頭線間違えて乗っちゃったって言ってたけど、本当かよ。

松村——代官山の駅に降りても、同潤会アパートがなかったから、また間違えたかなって思って、焦ったわ。

渋谷——あのアパートがなくなってから、もう十年は経ってるよ。

松村——そういえば、あのアパートの中には、何故か銭湯があって、俺も入ったことがあるんだけど、どうしてあんなところで風呂に入ったんだろう。

渋谷——知らないよ、そんなこと。

松村——しかし、あの日に集まったメンバーも、大類はもうパリ暮らしだし、斉藤[注2]さんは伊豆だし、橘川は酒を飲まなくなったし、なんだかなあ。

渋谷——酒を飲んでたのはお前と斉藤さんだけだし、煙草を吸ってたのはお前だけじゃないか。

松村——内田百閒が書いてたんだ。〝酒も煙草もやらなくて、もし病気になって摂生しろと言われたらどうしたらいいのか分からない。病気になって摂生するときのために、だから酒も煙草もやる〟って。

渋谷——だから、橘川は身体のために酒をやめたって言ってただろ。だけど、本当に、次にああいう集まりをやったときに、全員来られるっていう保証はないからな。

松村——そう、回を重ねる度に、一人抜け二人抜け……。

渋谷——うるさいよ。じゃあ、これからはもっとたくさん十人ぐらい選んで、その中から五人ずつ選んでやろうか。そうすれば、数は変わらない。それがいい。

松村——意味が分からないよ。それと、次はああいうコース料理っていうのは、やめような。

渋谷——なんでだよ。俺の行きつけの店だぞ。うまかっただろ。

松村——ああいうふうに店の方で出されると、どういうふうにすればいいのか分かんないんだよ。やっぱり、俺は「あと、ネギマ三本とレバー三本ね」っていう方がいいな。

渋谷——……。**M**

注1：株式会社ソニー・ミュージック・ダイレクト社長、野中規雄氏。三十年前当時のチープ・トリック担当ディレクター。二〇〇八年に定年退職されている。

注2：内田亮。現『Cut』編集長。当時のRO副編集長。

注3：写真家の斉藤陽一氏。ロッキング・オン初期からミュージシャンの写真を撮り続ける。

肩書きに「ブロガー」って付け加えてもいいでしょうか

渋谷――コンニチハ、しょこたんです。いつも携帯だけは手離せません。

松村――ブログ始めたらしいな。

渋谷――そうなんだよ。RO69をリニューアルするとき、ラジオとかいろんなコンテンツを作ったんだけど、ブログも始めたんだ。

松村――お前がブログとか似合わないな。

渋谷――俺もそう思う。ブログにも書いたけど、四十年間ハードロック歌ってたのに、いきなりラップやれって言われた気分だな。

松村――タイトルも何で「社長はつらいよ」なんだよ。ダサ過ぎないか。
渋谷――自然とダサくなったんだよ。
松村――何だそれ。
渋谷――いや、いろいろタイトル考えたんだけど、もっともらしいのにすると、絶対にブログに合わなくなるんだな。だって、ブログって一種の日記じゃないか。
松村――まあな。
渋谷――書くことがなくなると、たいていが食い物ネタに行くんだよ。
松村――くだらなくて面白いけどな。
渋谷――そんなもんに、もっともらしいタイトルが付いていても、しょうがないじゃないか。
松村――確かに。
渋谷――だから、内容的に一番くだらないものでも扱えるタイトルにしたら、あれになったんだよ。
松村――それにしても、他になかったのかよ。
渋谷――凄く多いんだよ、あのタイトルのブログ。
松村――余計、駄目だろう。
渋谷――社長ブログの定番タイトルみたいだな。自分でも間抜けだと思う。
松村――開き直るなよ。でも、マメに更新してるみたいだな。
渋谷――あれ、強迫観念になるんだよ。日常をブログに書いているのか、ブログのために日常があるのか、分かんなくなってくるぞ。
松村――そんな大げさなものか。
渋谷――いや、本当だって。ネタを探したってそんなにないから、ネタを作ろうという発想になってくるんだよ。転んだってことを書きたいから、ここで転んでみようか、とか思いだすんだよ。
松村――何だそれ。
渋谷――成功しているブログって、たいてい芸能

人のものじゃないか。彼等の場合、日常がネタそのもので、しかも自分が商品だから、何を食べたかも商品性のあるネタになるんだよ。

松村——まあな。

渋谷——でも、こっちの日常なんてつまんないもんじゃないか。今日も小川を説教しました、反省の様子はありません。なんてことを毎日書いてても誰も読まないぜ。食べ物ネタだって、一回ならともかく、毎日俺が何を食べてるかなんて誰も興味ないわけよ。

松村——むしろ読みたくないよな。

渋谷——……。

松村——取材ネタとかあるじゃないか。

渋谷——そうそう、だから取材のときは必死で携帯で写真撮るんだよ。この前も、『ｂｒｉｄｇｅ』の取材でストレイテナーのホリエくんと9mm Parabellum Bulletの卓郎くんが会社に来たので、早速撮りに行ったら、担当の小松に「山崎さんが、もう撮って行きましたよ」って言われて、ガッカリだよな。

松村——山崎もやってるんだよな。

渋谷——俺が編集長の雑誌なんだから、俺のネタだろう。

松村——そういう問題じゃないだろう。

渋谷——だから、発想が倒錯して来るんだよ。日常をブログに書くんじゃなくて、ブログに書くために日常をネタ化して行くようになって来るわけ。

松村——その割には、お前のブログは大したことないけどな。

渋谷——何言ってんだ、あれだって苦労してるんだよ。でも、ブログにはまる奴の気分が分かってきた。中毒性があるね。何か、人とつながっている気になって来るんだよ。

松村——思い切りさびしいこと言ってるな。

渋谷――俺の場合、雑誌もテレビもラジオもやっていて、情報の発信という点では職業化してるわけじゃないか。でもブログのコミュニケーションって違うんだよ。うちはトラックバック付けてないけど、訪問者数はすぐに分かるわけだよ。

松村――インターネットはその辺が便利だよな。

渋谷――だから、自分のブログをどれだけの人が読んでいるかすぐに分かるわけ。そうすると、何だかそういう人とつながっている気分になるんだよ。雑誌の部数とか、テレビの視聴率とかと全然違うリアルがあるわけ。

松村――まあ、日記の読者だからな。

渋谷――読む方は、単なる興味本位でも、こっちは友達が増えた気分になるんだよ。

松村――そこまで言うか。

渋谷――まあ、それは大げさでも、変なリアルがあるわけ。

松村――だから、世の中ブログだらけになってしまったんだろうな。

渋谷――訪問者数が減ると自分の友達が減ったような不安を覚えるわけ。

松村――もともと、お前、友達なんか少ないんだからいいじゃないか。

渋谷――……。

松村――ごめん、続けろよ。

渋谷――逆に、訪問者数が増えると、友達が増えたような気になるから、何だか必死に書くんだよ。

松村――結構、マメにアップしてるよな。

渋谷――かなり、苦しくなって来てるけどな。苦しくなると食い物ネタに行きたくなるんだけど、なるべく少なくしてるんだ。

松村――いいじゃないか、ブログの定番なんだから。

渋谷――そこはプロの意地だな。いちおう物書き

CamScannerでスキャン

やって四十年なんだから、それなりの技で勝負したいじゃないか。

松村——あの、毎朝日経ネタでやってるのが技なのか？

渋谷——そうだよ。

松村——あんまり技感じないけど、毎日書けるのがいいんだろうな。

渋谷——そうそう。

松村——それなら、今日の小川っていうのを始めればいいんだよ。

渋谷——だから、そんなもん誰も読みたくないだろう。

松村——いや、そうでもないだろう。あえてそれをやってみるんだよ。コンビニで買い物をする小川、エレベーターに乗る小川、退社する小川、弁当を食べる小川、ライヴ会場での小川、家でくつろぐ小川、いろいろやれるぞ。

渋谷——何で俺が家でくつろいでいる小川の写メ撮って、自分のブログにアップしなけりゃならないんだよ。

松村——面白いじゃないか。

渋谷——面白いわけないだろう。

松村——いや、ブログの面白さってそういうもんだろう。

渋谷——どういうもんだよ。

松村——家でくつろぐ小川だよ。

小川——あの、僕の話題で盛り上がってるみたいですけど、家にまで社長に来てもらいたくないんですけど。

渋谷——行かねえよ！　だいたいお前の話題なんかで盛り上がってないし。

小川——だったらいいんですけど。

松村——いいぞ、そのシリーズ、絶対に人気出ると思うな。

渋谷――もういい、だいたいお前なんか、ブログどころかインターネットそのものに興味ないだろう。

松村――そんなことないんだって、最近は結構ネットは見るようになったんだよ。

渋谷――そうか、お前でさえそうなったんだ。俺なんか旧人類だから、どうしても雑誌とか書籍みたいなもんに愛着を持ってしまうんだよな。

松村――でも、最近の新人バンドはネットから出てきたりするんだろう。

渋谷――そうなんだよ。それに、ネットって一種の原始共産主義というか、アナーキズムというか、そういうエネルギーとか可能性があるよな。でも、頭で理解しても体がついていかないから。

松村――だから、今日の小川から始めようぜ。

渋谷――絶対にいやだ。**S**

CamScannerでスキャン

ブログのネタになるかどうかが、日々の重要な価値基準です

渋谷――コンニチハ、今日の小川です。皆さんに読んでもらって嬉しいです。

松村――お前、本当に始めたんだな。

渋谷――一回だけにしようかと思ったんだけど、変に受けてるんで続けてるんだ。

松村――何を根拠に受けていると思うんだよ。

渋谷――社内でも面白がっているし、番組のリクエスト・カードに「今日の小川楽しみにしています」って書いてあったのはショックだったな。

松村――それは確かにショックだな。

渋谷――別に「今日の小川」を始めたからというわけでもないけど、ブログが凄い人気なんだよ。

松村――あの「社長はつらいよ」が？

渋谷――いや、俺のだけじゃなくて、四人全員のがよく読まれているんだ。六月九日にリニューアルして、そこからアクセス数が急増してるんだ。

松村――ブログ始めたからか？

渋谷――全体に読みやすくなったのが大きいんだろうけど、ブログの影響はあるみたいだな。何だかビミョー。

松村――いいじゃないか増えてるんだから。

渋谷――そうなんだけど、アクセス数見ると俺が必死に労力と時間をかけて作っている洋楽TVの何倍ものアクセスがブログにあるんだよ。

松村――何か問題なのか？

渋谷――だってCGまで作って、何時間もかけて編集して、PV流している洋楽TVより「今日の小川」の方が人気があるんだぜ。

CamScannerでスキャン

松村――現実は厳しいよな。

渋谷――その結論違うと思う。「今日の小川」がコールドプレイより人気があるわけないだろう。

松村――でも現実はそうなんだろう？

渋谷――……。

松村――でも、「今日の小川」の出てこない、山崎や宮嵜[注1]や粉川のブログも人気なんだろう？

渋谷――そうそう、そうなんだよ、だからブログっていう形式が人気なんだな。

松村――ちょっと見てみたけど、どのブログもたわいのないこと書いてるよな。特にお前のが一番ヒドイな。

渋谷――どうしてだよ。

松村――何か、有名人の写メに頼って、コメントも短いし。写真でひとことみたいなブログじゃないか。

渋谷――そこが技なんだよ。吉井の普段着姿をアップしたときなんか、凄いアクセス数だったぞ。

松村――だから、それ技じゃなくて吉井の人気に頼ってるだけじゃないか。

渋谷――何言ってんだ、あの写真なんかスタジオのスタッフにエレベーター開けっぱなしにしてもらって撮ったんで大変だったんだぞ。

松村――それ、全然大変じゃないだろう。

渋谷――でも、不思議だよな。邦楽TVでしっかりヴィデオ回してインタヴューした映像より、写メで撮ったブログの方が人気があるんだよ。

松村――どうも、そういうものらしいな。ブログって日常の感覚の延長にあるもので、そこが面白いんだよ。お前も、友達が増えたみたいな気がするとか、間抜けなことを言ってたじゃないか。

渋谷――そうそう、ブログって一種の日記じゃないか。でも日記じゃ面白くなくて、メディアと日記の中間くらいに位置しているんだな。例えば取材日記みたいなブログなわけよ。俺の場合。だから、雑誌が出ればカメラマンが撮った、ちゃんとした写真と、しっかりしたインタヴューが読めるんだよ。でも、

俺の撮った写メの方が面白かったりするんだな。

松村――そりゃ、ちゃんとした写真とインタヴューは、それはそれで見たいんだけど、それとは別なんだよ。

渋谷――不思議なニーズだよな。

松村――前にも言ったけど、この俺でさえインターネット見るようになったからな。

渋谷――それって猿が木に登ったみたいなもんで、凄いよな。

松村――バカ、猿は木に登るんだよ。それよりたけしとかサザンとか、よく写メなんか撮らしてくれるよな。

渋谷――ブログって日常化しているんで、わりと普通に許可してくれるよ。

松村――お前はよく分かってないけど、周りは結構気を使っているみたいだぜ。兵庫なんかサザンのメンバー全員にポーズ取ってもらって、それに携帯向けているお前を見て、血の気が失せたって言ってたぞ。

渋谷――確かに冷静に考えてみたら、そうかもしれないな。

松村――冷静にならなくてもそうだろう。

渋谷――でも、一週間でサザンとたけしと宮崎駿と内田樹が登場するブログなんて、俺のブログだけだぞ。偶然に、クドカンまで出てもらえたし。

松村――そうかもしれないけど、それでアクセス数増えても、お前の人気じゃないだろう。

渋谷――そうなんだよ。どうしよう。

松村――知らないよ。「今日の小川」を頑張ればいいじゃないか。

渋谷――俺が会社にいるとき、小川が外に出てたりするんだよ。

松村――お前、最近ブログの話ばかりしてないか。

渋谷――そうなんだよ。先月も言ったけど、ブログのために日常があるみたいな気になってくるんだ。人気があることが分かると余計にプレッシャーになって、何かしないとマズイ気分になってくるな。

CamScannerでスキャン

松村——本末転倒じゃねえか。

渋谷——先月も言ったけど、転んだって書きたいために転んでみるみたいな感じだな。取材時期じゃないと有名人に会わないし、どうしよう。

松村——知らないって。有名人に頼らないで、お前もプロなんだから、企画と文章力で勝負しろよ。

渋谷——無理だ。しょこたんでもあるまいし俺の日常なんか誰も興味ないからネタがなくなる。

松村——情けないな。何とか考えろよ。

渋谷——そうだ、いいことを考えた。ブログなんて、書いてあることが本当かどうかなんて分かんないじゃないか。

松村——まあな。

渋谷——芸能だって、画像の悪いサイトだし。あんなもん、どうにでもなるじゃないか。

松村——だから、どうしたんだよ。嫌な予感するんだけど。

渋谷——勝手に書いちゃうんだよ。今日はジョニー・デップにインタヴューしました、僕と誕生日が一緒だと言って喜んでいました、とか書いちゃうんだよ。写真は「Cut」の写真を写メで撮っておけばいいんだ。

松村——いいわけないだろう。すぐ嘘だとバレるだろう。それに訴えられるぞ。

渋谷——だから外タレだけにするんだよ。ジョニー・デップが俺のブログなんかチェックするわけないぜ。ミック・ジャガーと会食とか書いたら、凄い人気ブログになるぜ。ミック・ジャガーがモノを食べてる写真を探すのが大変だけどな。

松村——そういう問題じゃないだろう。

渋谷——こっちも素人じゃないから、読む方も本当だと思うよ。

松村——絶対に思わないね。お前がバカにされるのはいいけど、会社がつぶれるからやめてくれ。

渋谷——そうかな。いいアイデアだと思うんだけどな。

松村――そんな嘘やめて、本当のことを書けばいいんだよ。「今日の小川」が受けたのなら、今度は「今日の林」(注2)でも始めればいいじゃないか。

渋谷――……。

松村――あっ、お前、その目はひょっとしていいかもと思ったな。冗談だぞ、冗談。それこそ、そんなもん始めたら、お前のブログ終わるぞ。

渋谷――……。 **S**

注1:宮嵜広司。元ロッキング・オン編集長にして、現ロッキング・オン取締役。RO69のブログ「洋楽試聴機荒らし」では、ありとあらゆる洋楽情報を(おそらく)日本最速でアップ中。

注2:林敦子。現企画室所属。スマッシング・パンプキンズとザ・スミスをこよなく愛し、社内において、消え行くサブカル女子最終世代を代表する存在。

渋谷陽一五十七歳、ロック・フェス最長不倒記録更新中です

渋谷――インフル・ジョン・ライドンです、風邪をひいていると言いながらアンコール1回やりました。すみません。

松村――今年はサマソニ、わざわざ大阪まで行ったんだって？

渋谷――暑かったぞ。

松村――東京で観ればいいじゃないか。アーティストは同じなんだろう？

渋谷――そうだけど、今年はあまりにも観るアーティストが多過ぎて、東京じゃステージ間に距離があり過ぎて、観ることができなかったんだよ。

松村――五十七歳なのに、そんなに観たいアーティストがあるのかよ。

渋谷――歳なんか関係ないだろう。

松村――関係あるよ。年齢と観たいアーティスト数は反比例するんだよ。いちおう世界平均で、四十代は二十代の半分と言われているな。

渋谷――言われてねえよ。

松村――だから五十代は二十代の三分の一、特に俺たちは五十七で、五十代も後半だから四分の一だな。つまり、お前はフェス一日につき三アーティストしか観てはいけないんだよ。

渋谷――決めるなよ、そんなこと。

松村――健康の面から言っても、その辺が妥当なラインだろう。どうしても観たいなら一日二アーティストにしてやってもいいぞ。

渋谷――なんで、お前にそんなことを決められなくちゃならないんだよ。ほっといてくれ。俺は一日に

十でも二十でも観たいんだよ。

松村――それは駄目だ。

渋谷――だから、なんでそんなに偉そうに断定するんだよ。

松村――お前のブログを見たんだけど、お前は変だよ。一日にあんな数のブログをあげて、五十七歳のまっとうなオッサンのやることじゃない。だいたい俺の知らないアーティストばっかり観ているし。

渋谷――大きなお世話だよ。だいたいサマソニに、お前の知ってるアーティストなんかいないだろう。

松村――まあそうなんだけど、でも俺の知ってるコールドプレイとかディーヴォとかピストルズ、ポール・ウェラーみたいなアーティストは全然ブログになかったぞ。

渋谷――まあな、それぞれ観たかったんだけど、タイムテーブル的に他のアーティストを観ると無理だったんだよ。特にポール・ウェラーとピストルズは最終の新幹線に乗る為に断念せざるを得なかったんだ。

松村――だったら大阪なんか行くな。

渋谷――でも、結果として東京にいるより何倍も観れたからいいんだよ。

松村――一日に二アーティストしか観たら駄目なのにか？

渋谷――ウルサイ。

松村――だいたい疲れるだろう、そんなにウロウロしてると。

渋谷――疲れるよ。特に昼は死ぬほど暑いからクラクラするぞ。特に大阪は逃げる場所がないから、移動してると目がチカチカしてくるんだよ、暑さとまぶしさで。

松村――そこまでして観たいか？

渋谷――観たい。

松村――お前には年齢反比例の法則は適用できないのかもな。『ロッキング・オン』編集部の奴も言って

たけど、どのステージに行っても社長がいるんで怖いって。お前、フェスの時には細胞分裂して、三人ぐらいになってるんじゃないのか。俺ともよく会うしな。俺と会ってるのは、渋谷何号なんだ。二号ぐらいな感じだよな。

渋谷――なんなんだよ、二号ぐらいの感じって。なんで俺が細胞分裂するんだよ。

松村――なんか、お前ってオタマジャクシっぽいじゃん。

渋谷――どこがだよ。俺はそのうちカエルになるのかよ。だいたいオタマジャクシは細胞分裂しないし。

松村――そんなに必死になって観て楽しかったのかよ？

渋谷――楽しかったよ。今年のサマソニは豊作だったな。だって単独ライヴをチェックしてたら、これだけのアーティストをチェックするの大変だぜ。俺みたいな音楽評論家にとっては夢のようなフェスだよ。メトロスとかヴァンパイア・ウィークエンドとか、軽くチェックするつもりで観たものが凄く良かったりしたし。

松村――でも、別に世間はお前に、もう音楽評論家としての仕事は求めてないだろう。宮嵜が、お前がブログでアーティスト表記間違えたの直すの大変だって言ってたぞ。そろそろ現役じゃないのを自覚した方がいいよ。

渋谷――確かに、そうしたところではオヤジ化というか、ボケが始まっているな。でもいいんだよ、そんなところまでバリバリだったら変だぜ。だいたい十分に、このままでも変なんだから。

松村――開き直ったな。

渋谷――というか、そういう新しいバンドや観たいアーティストに対する興味がなくなったら終わりだと思うんだ。まあ、終わってもいいんだけどさ、お前が言うように世間は俺の音楽評論家としての仕事をそんなに期待していないと思うし。でも、興味があるうちは自分の欲求に対して素直でいたいよな。

松村――同世代の同業者で、そうやってフェスをぐるぐる回っている奴なんかいないだろう。

渋谷――体力的に無理だよ。俺も自分でフェスやってなかったら無理だったと思う。たまたま自分でフェスをやることになって、九年前に作る側になったわけよ。当たり前だけど客でいる何倍も体力を消耗するんだよ。

松村――確かに、オリンピックも観る方と出る方では、体力の消耗は全然違うもんな。

渋谷――とりあえず、突っ込まないで話を進めるけど、それで思ったわけ。こんなことを毎年やってたんでは死ぬと確信したね。それでジムに通うようになったんだ。

松村――良かったな、会社の地下がジムで。

渋谷――本当にそうだよ。一年目のフジで客として、あの台風の中でサヴァイバルしたから体力を過信してたけど、甘かったな。

松村――お前、土に埋まりながら観てたもんな。

渋谷――あの時は、普通にフィールドで三十分ぐらい座ってると雨で流された土で、足とか埋まっていくんだよ。凄かったよな。

松村――関係者はみんなプレス・ルームに避難したのに、お前だけ最後まで埋まってたもんな。

渋谷――別に俺は埋まってたわけじゃなくてライヴを観てたんだよ。そうしたら、だんだん埋まっていっちゃったの。

松村――普通、オッサンなんだから避難するだろう。

渋谷――観たかったんだよ。レッチリ観るだろう、やっぱり。

松村――その執念が怖いよな。ミーハー客がアイドルに執着するのとは違うわけで、何がお前をそのような異常な行動に走らせるわけ？

渋谷――異常な行動じゃねえよ、普通だよ。

松村――だから、少し自覚しろよ。フジの一年目でも、埋まっていたのはお前だけだし、サマソニをウロウロして目がチカチカしている五十七歳はお前だ

けだろう。

渋谷――まあな。

松村――俺を見ろ、家からめったに出ないぞ。

渋谷――だからなんなんだよ。

松村――だから生活が大変なんだよ、原稿料あげろ。

渋谷――関係ないだろう。

松村――とにかく、歳なんだから異常な行動はやめろ。自分のフェスは仕事だからしょうがないとして、客[注]で行ってるフェスでの異常行動はつつしむように。年齢反比例の法則をしっかり自覚しなさい。まず、細胞分裂は一回にするように。なんか、カエル食いたくなってこないか。

渋谷――食いたくねえよ。 **S**

注：今年六十歳。プロデューサーとして行っている自分のフェスでの行動も充分異常です。

今月はロック評論家同窓会も開催しております

渋谷――ジョン、ジョン・エントウィッスルのことなんだが、薬をキメて死んだんでホ
サイ。

粕村――いきなり渋めだなあ。

渋谷――フーのドキュメンタリーを観たんだよ。

粕村――ああ、「アメイジング・ジャーニー」な。

渋谷――すごく面白くてさ、改めてジョン・エントウィッスルってヤバイ奴だったなと思ったんだよ。

粕村――どっちかというとクールで大人なイメージがあったが、ラスベガスのホテルでコールガール買って、薬をキメて死んでるのを発見されたときは、インパクトあったよな。まあ、フーが解散した後、ボロボロだったのはみんな知ってたけど、何しろキース・ムーンっていう、完全に狂気的なキャラがいたから、その狂気が目立たなかったよな。

渋谷――とにかく、すごく面白いドキュメンタリーで、全てのロック・ファンに観て欲しいよ。

粕村――珍しいな。そんなに薦めるの。

渋谷――まずフーというのがいいんだよ。今のフーの立ち位置って微妙じゃないか。コピーとして栄光のフーというのも、悲劇のフーというのも、どっちも付けられるところにいるんだよな。

粕村――確かに。現役のロック・バンドとして、いいライヴをやっていて観客動員もあるから否

なんだろうけど、メンバーの半分が死んでいて、新作が最高傑作の可能性が高くないってのは、まあ厳しいよな。

渋谷——そうそう、でもこれから何十年に渡って、ビートルズやストーンズと同じように偉大なバンドとして語り継がれていくことは間違いないじゃないか。

松村——確かに。今更、フーに対する評価が下がることはないよな。

渋谷——だから、悲劇があっても安心感があるんだよ。歴史の暗い部分も、見ていて痛くないんだ。

松村——でも悲劇の多いバンドだよな。

渋谷——そうなんだよ。でも、このバンドの悲劇はロック・バンドにおける普遍的な悲劇でもあるから、凄くリアルで、ロック・ファンならフーを知らなくても、絶対に興味深いと思うぜ。

松村——メンバーの半分が死んじゃう悲劇は普遍的とは思えないけど。

渋谷——そうだけど、それは結末で、何故二人が死に向かっていくのかという物語は普遍的だよ。とにかく、話がリアルなんだよ。インタヴュー内容もシビアでさ。ヴォーカルのロジャー・ダルトリーがメンバーとケンカしてバンドを追い出されるエピソードがあるんだよ。

松村——あったな。結局、戻ってくるんだけどな。

渋谷——そのときのことをピート・タウンゼントが話していて、それがシビアなわけ。自分はそれまでロジャーの悩みが分からなかったけど、それが分かったというわけよ。

松村——何なわけ。

渋谷——自分もジョンもキースも天才なんだけど、あいつだけ単なるシンガーなんだよ、って言うんだよ。

松村——それシビア過ぎないか。

CamScannerでスキャン

渋谷――まあな。でも本当のことじゃないか。

松村――だからシビアだろう。

渋谷――でも、ロジャーも、そのとき自分はバンドの声になるんだと決意したと言っているんだ。

松村――偉い。

渋谷――それぞれ単独のインタヴューなんだけど、そこでこのバンドが何故続いているのか、その本質が分かるわけよ。これはロック・ファンなら、いろんなバンドに則して理解できる普遍的な物語だと思うんだ。

松村――確かに。

渋谷――だから、俺はまずこの映画をロバート・プラントに見せたいね。

松村――話をそこに持っていくのかよ。

渋谷――まず、この映画はあいつが観るべきだね。そこで、俺はバンドの声になるんだ、という正しい認識に到達しなければロックに未来はないな。

松村――ロックの未来かよ。

渋谷――あいつはロックの未来の敵だから改心させないと駄目なんだよ。

松村――そういえばツェッペリンってフーが付けた名前だよな。

渋谷――いちおう、そう言われてるよな。他にも学ぶべき教訓がたくさんあるんだよ。

松村――どんな教訓だよ。

渋谷――フーの解散は、簡単に言ってしまうとピート・タウンゼントがフーをやるのが嫌になったのが原因じゃないか。

松村――簡単に言ってしまうとな。

渋谷――でも色々な事情で再結成をするわけよ。

松村――何度もな。

渋谷――そうそう。その再結成ライヴをやってピート・タウンゼントは何を思ったか。

松村――何を思ったんだよ。

渋谷――昔のヒット曲はありがたいと思ったんだよ。それを演奏することによって客は熱狂して、ライヴは盛りあがるわけじゃないか。一時はそれを演りたくないから解散までしたのに、今は感謝するようになった。しかも、もうああした曲を超えるものは作れないかもしれないから、って正直に言っているんだよ。

松村――凄いな。そこまで言えるのはかなりだよな。

渋谷――経験と知性が言わせた言葉だと思うな。偉い、ピート・タウンゼント。ロバート・プラントは本当にこの言葉をかみしめるべきだね。

松村――またそれかよ。

渋谷――コンニチハ、マーティン・スコセッシです。ウッドストックのドキュメンタリーの助監督をやってました。

松村――話が変わったわけね。

渋谷――きっと新人の頃の仕事だったんだろうな。俺達より十歳くらい上だから。だからストーンズとも、ほぼ同世代なんだよ。凄いぞ『シャイン・ア・ライト』。

松村――そうなんだ。

渋谷――マーティン・スコセッシがストーンズのライヴ映画を撮ったんだけど、これが凄いんだ。

松村――今回は誉めるね。

渋谷――まあ、現役最高の映画監督で、異常なロック・ファンでありストーンズ・フリークのスコセッシが、現役最高のロック・バンドを撮ったんだから、それは相当のものになってしかるべきなんだけど、期待以上だったな。

松村――どう凄いんだよ。

渋谷――ブログにも書いたけど、スコセッシの目的はひとつだけで、映像でストーンズと同じグルーヴを鳴らすことなわけ。

CamScannerでスキャン

松村――一番難しいだろう。

渋谷――でもスコセッシなんだから、少しくらいいい映画じゃ駄目なわけだよ。

松村――まあな。

渋谷――これまで観たこともないライヴ・ドキュメンタリーになってないと、きっと自分的にも納得できないと思うんだ。

松村――でもライヴだから、撮り方も制限あるし難しいだろう。

渋谷――そうなんだけど、その制限の中でスコセッシはやってみせるんだよ。スタジアムの遠い席で観てるより、この映画の方がストーンズのライヴをリアルに体験できるぜ。

松村――そこまで言うか。

渋谷――特に〝悪魔を憐れむ歌〟の映像なんか、今まで観たこともないライヴ映像だったぞ。スコセッシ偉い。

松村――でもストーンズって本当に怪物みたいなバンドだよな。

渋谷――そうそう、演奏なんかアヴァンギャルドだぜ。一種の前衛ロックだと思ったな、この映画を観て。

松村――でも平均年齢六十四歳だからな。

渋谷――ほとんどライヴ・シーンだけなんだけれど、ところどころに昔のインタヴューなんかがはさまれているんだ。そこでの発言がまたいいんだよ。「バンドをやめたいと思ったことはありませんか？」って、ありがちな質問をされるわけ。

松村――お前もよくするじゃないか。

渋谷――まあな。それに、きっとまだ二十代だと思うんだけど、ミックが答えているんだ。

松村――何て答えてるんだ？

渋谷――ミックとキースが、一種のみせしめみたいにドラッグで逮捕されたじゃないか。

松村――凄く若い頃な。
渋谷――留置場に入って、さすがにミックもめげたらしいんだよ。それで、隣の留置場にいるキースに「これで俺たちもあきらめるよりしかたがないかもな」って言ったんだって。そうしたらキースに怒られたらしいんだよ。こんなことであきらめてどうするんだって。それでまたやる気になったらしいぜ。
松村――いい話だな。
渋谷――聞いたかロバート・プラント。この映画もあいつに絶対に観せないとな。
松村――今の話は、あんまりロバート・プラントと関係ないんじゃないか。
渋谷――確かに。
松村――……。**S**

渋谷——コンニチハ、トム・ヨークです。エコは重要だけど、照明の光量は半端じゃないです。

松村——何だよ、それ。

渋谷——トム・ヨークって、物凄いエコロジストで、日本にも飛行機みたいな環境破壊的な交通手段じゃなくて、シベリア鉄道で来ようとしたという噂があるんだよ。

松村——らしいな。インタヴューも、わざわざ全世界から飛行機でジャーナリストがやって来るのが嫌で、テレビ電話でやったらしいじゃないか。

渋谷——そうそう。でも今回のツアーは、ステージの天井から無数の光る柱がぶら下がっていて、それが半端じゃない光量でピカピカ光るんだよ。全然エコじゃないんだよ。

松村——そうなんだ。

渋谷——だって、会場に目がチカチカするので注意するようにって注意書きが貼ってあるんだぜ。

松村——本当かよ。

渋谷——本当だって。光の洪水みたいになるんだよ。

松村――盛りあがりそうだな。

渋谷――凄くドラマチックでよかったよ。

松村――よかったなら問題ないだろう。もともとロック・コンサートなんか電力消費がなくちゃ成立しないんだから。

渋谷――まあな。それで、たまたまうちのフェスで照明やっているスタッフが、レディへのコンサートに来ていたんで訊いたんだよ。そのチカチカ照明について。

松村――何て言ってた？

渋谷――凄い省エネで、全然消費電力が少ないんだって。来日公演全体で二酸化炭素排出量を一万四千七百二十一キロ削減したんだけど、これって六百五十ℓのガソリンを燃やして出る量と同じくらいで、朝青龍の体重だと百人ぶんになるんだよな。

松村――……。

渋谷――結局エコなんだよ。レディへって突っ込みどころのないバンドだよな。

松村――だったら、最初からそう言えよ。今までの話の展開は何なんだよ。

渋谷――いや、お前にも俺の疑問を共有してもらおうと思って、ちょっと長い話にしてみたんだけど。

松村――いいよ、別にお前と疑問は共有しなくていいから、普通にレディへのコンサートは光量は凄いけど省エネなんだ、と言ってくれればいいから。

渋谷――それじゃ、五秒で終わっちゃうじゃないか、もっと盛りあがろうぜ。

松村――いいよ、盛りあがらなくて。お前はチカチカ以外に感想ないのかよ。

渋谷――日経のライヴ評に書いたんだけど、ストーンズみたいだな、と思ったな。

松村——結構、乱暴な言い方じゃないか。

渋谷——きっとレディへのファンからも、ストーンズのファンからも反発されると思うんで書いたんだけどな。

松村——どういう性格なんだよ。

渋谷——こういう性格だよ。四十年のつき合いだから知ってるだろう。

松村——嫌になるくらい知っているけど、どうしてストーンズなんだよ。

渋谷——つまりレディオヘッドは、これまでにない形でのロック・グルーヴを作り出した非常に肉体的なロック・バンドだということだよ。

松村——何だか分かったような分かんないような言い方だな。

渋谷——要するに、二十一世紀型のモダンなロック・グルーヴを、全く独自の形で作ったということだよ。それはストーンズが二十世紀を代表するロック・グルーヴを作ったのと同じくらい、凄いことだと思うな。あのキースのリフとカッティング、あれがもたらすストーンズ・グルーヴというのは、何十年に亙ってロックを支配してきたわけよ。

松村——確かに。

渋谷——ツェッペリンだってそうだし、フーのグルーヴも発見だと思うんだ。

松村——ロックには、そういうものがいくつかあるよな。

渋谷——グルーヴに著作権はないから、色々な形で真似されたりするし、いろんなグルーヴの順列組み合せの技術で、九十年代以降のロックは成立しているようなところがあるわけよ。

松村——新しいパターンを作るのは、もういっぱいあるから難しいよな。

渋谷——そうそう。それにいくら著作権がないと

CamScannerでスキャン

いってもオリジネーターを超えるのは難しいし、あまりストーンズまんまとか、ツェッペリンまんまとか恥ずかしいしな。

松村——結構いるけどな。

渋谷——まあな。グルーヴといっても曖昧だからな。リズム・パターン、ギターのリフ、楽器アンサンブル、そんなものが複合して作られるのがグルーヴで、ただ聴けば一発で分かるという不思議なもんだよな。

松村——ロック・ファン以外にはなかなか分かりにくい言葉だよ。

渋谷——確かに。

松村——それで、お前の説によるとレディオヘッドは、その難しいと思われた新しいグルーヴを発明したという話なんだ。

渋谷——そうそう、これは凄いね。しかもモダンというか、しっかりと時代性を反映しているというか、そこが凄い。テクノもヒップホップも知らないよ、というのではなくて、その存在と時代をとり込んだなかから生まれたグルーヴなんだよ。しかもアコギ一本とヴォーカルだけでも、それは実現可能なわけよ。

松村——まあ、だからこそグルーヴなんだろうな。

渋谷——そうそう、それだよそれ。肉体的なんだよ。お前、いいこと言うな。

松村——お前に誉められても嬉しくないな。

渋谷——どうしてだよ。

松村——何か、そういうキャラなんだよ。お前は。

渋谷——何か凄く納得できないけど、まあいいや。だから、ストーンズみたいという風に書いたんだよ。

松村——説明されれば分かるけど、乱暴は乱暴だな。

渋谷——コンニチハ、ロバート・プラントです。

グルーヴといえばツェッペリンですが、あれは楽器隊が作り出しているもので、ヴォーカルは置いてきぼりなのでムカつきます。

松村——何だよ、また出てくるのかよ。

渋谷——そういう言い方はないだろう。

松村——何か、そのネタで一年ぐらい回してないか、この渋松。

渋谷——受けてるんだからいいだろう。

松村——そうかも知れないけど、全然再結成されないし。

渋谷——そうなんだよ。噂が出て、今度こそ本当かもと言われ出すと、ロバート・プラントが否定宣言をするというののくり返しだよな。

松村——その噂って、ジミー・ペイジが流しているのかな。

渋谷——よく分からないけど、潜在的な期待感が大きいから、すぐに噂が広がっちゃうんだろうな。

松村——もう再結成はないから、レズ・ツェッペリンでいいじゃないか、そういえばブログで、お前行ったって書いてたな。

渋谷——ヴォーカルがロバート・プラントの代わりをやれないかチェックしに行ったんだよ。

松村——何、くだらないこと言ってんだよ。客とか入ってるのかよ。

渋谷——それが、俺みたいなオヤジが結構居て盛りあがっているんだよ。でも、これもブログで書いたけど、セットリストが歌ものばっかりなんだよ。

松村——らしいな。

渋谷——あれだとロバート・プラントもステージで暇にならないから再結成に乗ってくるかも知れないぞ。

松村——そういう問題なのかよ。

渋谷——それだけじゃないけど、大きい問題だと

思うぜ。でも、こんなことをくり返していると、ツェッペリンの話題でばっかり名前があがって、しかも悪役にされて、何もいいことないのにな。

松村――悪役好きなんじゃないか。最近ルックスもSF映画に出てくる、悪の帝国のボスみたいになってきたよな。

渋谷――何だ悪の帝国って。

松村――ジミー・ペイジは仙人みたいになっていくのにな。そういえば、お前はロバート・プラント型の老けかただから悪の帝国だよな。俺はジミー・ペイジ型だから仙人だな。仙人の方がいいな。

渋谷――……。**S**

注：一年どころか、この連載自体が三十年以上ツェッペリンで回っている。

トーキン・アバウト・マイ・ジェネレイション……

渋谷——コンニチハ、ピート・タウンゼントです。今回は単独コンサートなのでギターは壊しませんでした。

松村——お前、会場で写メ撮りまくるの止めろよ。みんな笑ってたぞ。

渋谷——いいじゃないか、ブログネタが欲しかったんだよ。

松村——まだブログやってんだ。

渋谷——やってるよ。どんどんアクセス増えてきてるんで嬉しいけど、プレッシャーにもなるよな。

松村——「今日の小川」だけじゃ駄目なんだ。

渋谷——そんなもんで何ヶ月も回せないだろう。

小川——最近は「今日の小田原[注1]」なんですよ。

松村——誰だよ、小田原って。

小川——新入社員で『Cut』のデスクやってるんですよ。少し前、トイレで「今度は僕が犠牲なんです」って泣かれましたよ。

渋谷——嘘つけ!

小川——嘘です。結構、嬉しそうでしたよ。

松村——何か、お前のブログって小さな世界で展開してるな。

渋谷——そんなことないよ。世界のたけしも宮崎駿

も登場してるぞ。

松村——でもフーの時は伊藤政則撮ってたじゃないか。

渋谷——セイソクはビッグだろう、小川に比べれば。

松村——それ、比較の基準単位がちいさすぎないか。

渋谷——確かに。

松村——何か、最近は社員全員がブログ書いてるらしいじゃないか。

小川——そうなんですよ。みんなトイレで「いい加減、勘弁して欲しいよな」って言ってるんですよ。

渋谷——本当かよ。

小川——嘘です。でも小島[注2]は言ってました。

渋谷——小島は書いてないだろう。

松村——お前、小川にからかわれてないか?

渋谷——そんな気がする。

松村——でも、フーは客が盛りあがっていたな、オヤジばっかりだったけど。

渋谷——あれ、何なんだろうな。日本には洋楽ロック居酒屋世代みたいなもんがあってストーンズとかフーがライヴやったりすると凄い数のオヤジが湧いてくるよな。

松村——湧いてくるって、虫じゃないんだから。だいたい俺達だってそうだろう。

渋谷——そうなんだよな。俺達はその世代のいちばん上だよな。

松村——つまりビートルズから始まってるんだろうな。

渋谷——そうそう、でもそこから二十年で、その後はまた違う気がするんだ。

松村——どう違うんだ。

渋谷——パンク以降の洋楽ファンは居酒屋で熱く語らないと思うんだ。

松村——そんなもんかな。

渋谷——俺の分析なんだけどな、つまり洋楽ロック黄金時代というのがあって、それを思春期に体験した世代は独特の洋楽ロックに対する愛情があるんだ

CamScannerでスキャン

な。

松村——どう黄金時代なんだ。

渋谷——いろいろ要素があるんだけど、まずロックそのものが本当に黄金時代だったわけよ。

松村——六〇年代から、七〇年代ってことか。

渋谷——そうそう。それこそビートルズ、ストーンズ、フーから始まって、ジミヘン、ジャニス、ツェッペリン、何でも現役だったわけじゃないか。そうしたアーティストの作品を新譜として体験したってのは、もの凄いことだよな。

松村——確かに。

渋谷——そして、日本でいうなら、ロックは洋楽が圧倒的だったわけじゃないか。

松村——日本のロックって、ほとんど売れてなかったもんな。

渋谷——だから、今より洋楽が一般的でもっと洋楽が大衆音楽として、ちゃんと流通してたんだよ。つまり、世代として共有できる歌のロック・ファンが居たわけ。

松村——今は、もっとマニアックなもんだもんな。

渋谷——そうそう。居酒屋で語り合おうとしても、そんな相手が居ないわけ。

松村——別に居酒屋で語り合わなくてもいいけどな。

渋谷——何言ってるんだよ、そこが重要なんだよ。熱く語れるロック、そこがポイントだろう。

松村——お前、酒飲まないし、居酒屋にも行かないじゃないか。

渋谷——そうだけど、ウドーフェスん時に渡された、ロック居酒屋じみへんの名刺のインパクトが強くてさ。何か熱く語ってそうなんだよな、その居酒屋の客。

松村——間違いなく語ってるだろう。

渋谷——でも、今の洋楽ロック・ファンは居酒屋で熱く語らないと思うわけ。レッチリのファンが、居酒屋でジョン・フルシアンテのギターについて熱く語っている感じしないもん。俺は語るけど。

CamScannerでスキャン

松村——お前は語ることが仕事だろう。
渋谷——だから、あのオヤジ達はフーのライヴの後、思いっきり語っただろうな。
松村——それは間違いないね。
渋谷——ギター壊さなかったって怒ったりするのかな。
松村——別にそんなことで怒んないだろう、だって凄くいいライヴだったじゃないか。
渋谷——何か、ストーンズのが見事過ぎて、全く突っ込み所のないライヴと違って、ある意味突っ込み所はいろいろあるんだけど、そこがまたいいんだよな。
松村——ピート・タウンゼントがやたらかっこ良かったな。
渋谷——やばいよな、あの歳で、あれだけ頭のおかしいオーラを発しているのは凄いと思ったな。
松村——別に頭のおかしいオーラなんか出してなかったぜ。
渋谷——そうか、俺は感じたね、奴の狂気を。
松村——勝手に感じてろよ。でも二人とも、若々しかったよな。
渋谷——ギターは壊さなかったけど、ピートはグルグル腕回したし、ロジャーもバリバリにマイク投げてたよな。
松村——楽しかったな。
渋谷——居酒屋行こうか。
松村——一人で行けよ。
渋谷——俺、酒は飲めないから、一人で居酒屋行ってもしょうがないんだけど。
松村——知らねえよ。
渋谷——でも、首都圏だけで七万人を超えるキャパの箱でやったわけで、そんなにフーのファンって居たっけ？
松村——だから、お前の言う全国のロック居酒屋オヤジが集結したんだろうな。
渋谷——どう考えてもそうだよな。数年に一回くら

いしか会わない業界関係者にもたくさん会ったし。
そういえば、最近は昔、洋楽をやっていた人達から
の退職のあいさつみたいなものをよくもらうな。
松村——俺達世代も、そろそろ定年の時期だしな。
渋谷——やっぱりロック居酒屋だろう。そういう洋
楽OBが集まって熱くロックを語る場所が必要だよ。
松村——お前が作ると、ロック居酒屋ツェッペリン
になるのか。

渋谷——それだと当たり前過ぎるから、ロック居酒
屋、天国への階段だな。
松村——絶対に行きたくないな、その店。**S**

注1：小田原幸司。この半年後にロッキング・オン編集部に
配属された。元祖草食男子にして電車・競馬マニア。
注2：小島麻未。現企画室所属。バリバリの帰国子女。

CamScannerでスキャン

発表！松村雄策のロック映画ライフタイム・ベスト

松村——先月号に「ロックDVDベスト二十五」っていう特集があったけど、あれなんとなく気持ち悪かったな。虫歯が痛いんですけどって歯医者行ったら、シソーノーローだって治療されて、次のときまだ痛いんですけどって言ったら、知覚過敏だって薬つけられて、三回目もまだ痛いんですけどって言ったら、チェックして「あっ、これは虫歯ですね」って言われたみたいな。

渋谷——どういうたとえなんだか、よく分かんないんだけども。

松村——十一月号の『Cut』にも「ロック・ムーヴィー四十五」っていうのと『ロック・ムーヴィー百』っていうのが載ってたけど、あれも同じだな。蕎麦屋の看板を見て店に入って、まずビールを一本飲んで、蕎麦を注文したら、「うちはもう蕎麦はやってないんです」って言われたみたいな。

渋谷——だから、分かんないんだよ、お前のたとえは。

松村——両方共、俺が体験したことなんだけど。

渋谷——それとロック映画と、どういう関係がある

んだよ。

松村――つまり、ああいうベスト百みたいなのって、どうも納得出来ないんだよね。

渋谷――お前が納得しようがしまいが、今日も地球は回ってるんだよ。

松村――俺は地球を止めて、一日中昼の地域と一日中夜の地域を作りたいって言ってるんじゃないんだよ。

渋谷――だから、何が言いたいんだよ。

松村――ロック映画ってひとまとめにすることに、まず無理があるだろ。『シャイン・ア・ライト』や『アメイジング・ジャーニー』みたいな、バンドのドキュメンタリーがあるだろ。それと、ミュージシアンが出演している劇映画、『パープル・レイン』や『8マイル』とは違うじゃないか。

渋谷――違っちゃ、悪いのかよ。

松村――何、怒ってんだよ。昼間の弁当のオカズが、少なかったのかよ。それと、ミュージシァンは出ていないロック映画、『あの頃ペニー・レインと』とか『すべてをあなたに』とか。それに、直接ロックは出てこないけど、極めてロック的な映画もあるだろ。それを全部いっしょにしようっていうのは、おかしいんじゃないのか。

渋谷――そういうものの中から優れたものを選んでベストを作るんだから、いいじゃないか。

松村――そういうことを言ってるから、今日も北極の氷が溶けて白クマが困ってるんだよ。

渋谷――俺が不眠不休なのは、全社をあげてCO_2を作ってるからじゃないんだよ。

松村――だいたい、おかしくないか。『Cut』のベスト三は、『セイ・エニシング』と『ミーン・ストリート』と『マグノリア』だっていうんだぞ。俺はどれも観たことないぞ。

渋谷――お前が観たことなかったら、ベスト三になったらいけないのかよ。それは、グルメ・ベスト三にフグが入って、俺は食ったことがないから認めな

いって言ってるのと、同じじゃないか。

松村——フグぐらい、食ったことあるわ。じゃあ、お前はアラスカで天ぷらうどん食ったことあるのか。あんなマズいもの、なかったぞ。

渋谷——そんなこと、どうでもいいわ。で、何をどうしたいんだよ、お前は。

松村——そういうわけだから、俺のロック映画ベスト十を選んだんだよ。

渋谷——年末で俺も忙しいんだから、おかしなこと始めないでくれよな。

松村——お前が忙しいっていうから、わざわざ考えて作ってきたんじゃないか。じゃあ、やめるから、別のテーマ考えろよな。

渋谷——まあ、忙中閑ありっていってな、今ならちょっと時間があるから、やってみろよ。

松村——基本的にドキュメンタリーは除いて、劇映画だけにしたぞ。そうしないと、もう収拾がつかないから。

渋谷——なんでもいいから、始めろよ。

松村——まず、第一位は『ビートルズがやって来る』。

渋谷——今は『ハード・デイズ・ナイト』っていうんだよ。

松村——そんなの、認めないよ。一九六四年に俺が中一で観たときは、『ビートルズがやって来る』だったんだから。原題にするんなら、『ア・ハード・デイズ・ナイト』にしろよな。「ア」はどこにへ行ったんだよ、「ア」は。初公開時の衝撃を知らないから、こんなバカなことをするんだよ。

渋谷——それは、同意してもいい。

松村——ともかく、『ビートルズがやって来る』はロック映画の基本中の基本だから、これが入ってないベスト十は認めないぞ。

渋谷——お前が認めようと認めまいと、給付金はすぐには出ないんだよ。

松村——早くくれよ、一万二千円。

渋谷——で、次は。

CamScannerでスキャン

松村――『スタンド・バイ・ミー』。直接ロックなのは、タイトルとテーマ・ソングだけだけど、少年達の冒険っていうのは、まぎれもなくロックだよな。これは原作を読んでから映画を観たんだけど、まったく見劣りしなかったよな。こういうのって、珍しいじゃないか。

渋谷――まあ、原作読んでから映画観ると、たしかにがっかりするものが多いからな。

松村――これって『ロッキング・オン』でも『Ｃｕｔ』でも選ばれてなかったぞ。編集長、変えろ！

渋谷――じゃあ、粉川を『Ｃｕｔ』の編集長にして、古河を『ロッキング・オン』の編集長にしよう。

松村――お前んとこの人事異動は、ずいぶん簡単なんだな。

渋谷――三位は。

松村――『さらば青春の光』。

渋谷――まあ、お前らしいけどな。

松村――『四重人格』のレコードって、はじめよく分かんなかったじゃないか。『トミー』は最初からああいう少年の物語だって知らされてたけど、『四重人格』はなんかモッズの物語らしいぐらいでさ。で、『さらば青春の光』を観て、ようやく分かったわけだよ。そうか、ピート・タウンゼントの考えるモッズって、やっぱりこういうものだったのかってさ。

渋谷――単なる一時の流行じゃなくって、ずっとイギリスにある若者の物語だよな。

松村――俺は『アメリカン・グラフィティ』の甘ったれたアメリカのガキが大っ嫌いで、やっぱりイギリスのモッズは違うなって思ったな。

渋谷――そういえば、お前、ロジャー・ダルトリーにインタヴューしたとき、サイン頼んだっていうじゃないか。小川が笑ってたぞ。

松村――ふざけんなよ。ブログに載せますからって、小川はケータイで写真撮ってたぞ。

渋谷――お前、五十七にもなって、サイン頼んでるんじゃないよ。

松村——いやあ、レイ・デイヴィス以来だったな、サイン貰ったの。だけど、いい人だったぞ、ロジャー・ダルトリー。『四重人格』と『ライヴ・アット・リーズ』と俺の好きなCD二枚持ってって、どっちか好きなほうにって言ったら、両方にしてくれたんだ。字の最後のところが飛び上がっていて、ちょうどヘンなものがついていて、「これ、マイク」って言ってたな。

渋谷——じゃあ、俺、もう時間ないから、ここらへんで。

松村——待てよ、まだ三位までじゃないか。十位まであるんだぞ。

渋谷——それは、またこういうふうに忙しいときにやろう。忘れるなよ、残り。

松村——……。■

新大統領はスプリングスティーンとディランがお好き

渋谷――コンニチハ、バラク・オバマです。ブルース・スプリングスティーンになれなかったので大統領になりました。イエス・ウィー・キャン。

松村――何だそれ。そんなこと、オバマが言ってたのか？

渋谷――言ったんだよ。スプリングスティーンは一貫してオバマを応援していたじゃないか。その応援コンサートの楽屋でスプリングスティーンのかみさんに言ったみたい。

松村――スプリングスティーンに限らず、オバマを

応援したミュージシャン多かったよな。

渋谷――就任式前にやったフリー・コンサートも凄かったよな。スプリングスティーンは無論のこと、U2、ビヨンセ、スティーヴィー・ワンダー、シェリル・クロウ、ウィル・アイ・アム、アッシャー、何だかグラミーみたいだったぜ。でも、何でU2なんだ。

松村――確かに、U2はアメリカ大統領選の投票権はないよな。

渋谷――それって、ニカラグアの大統領就任式でコブクロが歌っているみたいなもんじゃないか?

松村――よく分かんない譬えだけど、何でU2なんだ、って思った人間は多いだろうな。

渋谷――スプリングスティーンは〝ヴォート・フォー・チェンジ〟という運動をやっていて、それは前の大統領選のときもやってたんだよ。

松村――そうらしいな。

渋谷――そのときはケリーが負けて、ブッシュが再選されてしまったんだけどな。でもR.E.M.とかジャクソン・ブラウンとかパール・ジャムとか、そのときから一貫してそのヴォート・フォー・チェンジに協力していたミュージシャンは多いわけ。

松村――でも、歌ったのはU2だったと。

渋谷――そうそう。投票権のないU2だったわけよ。

松村――そんなこと、いろんな事情があるんだからしょうがないだろう。

渋谷――まあな、別に音楽イヴェントじゃなくて、政治的なショーなんだから政治的な戦略が優先されるのは当然なんだけどね。

松村――マドンナが出て歌っても、結構厳しいもんがあるぜ。

渋谷――確かに。でもカニエもジェイ・Zも積極的に応援してたけど、やっぱりスティーヴィー・ワンダーとビヨンセなんだな、と思ってさ。

松村――ビヨンセはジェイ・Zのカミさんだからいいんじゃないか。

CamScannerでスキャン

渋谷――そういう問題じゃないだろう。
松村――でも、あのシチュエーションで、ファックを連発する歌を歌われても困るだろうし、ミュージシャンもいきなり芸風を変えても、自分の得にならないから、あれはあれで正しいありかただと思うぜ。
渋谷――言われてみればそうだな。お前、急にヒップホップ理解者になったな。
松村――なるか、そんなもんに。お前の発想が単純過ぎるんだよ。
渋谷――まあジェイ・Zも一月十九日にワシントンでライヴやったらしいし。
松村――その辺クールだな、お前の発想よりよっぽど大人だろう。
渋谷――そうだけど、だからU2ってもんでもないだろう。しかも二曲も自分達のオリジナル歌ってるし。ほとんどが伝説的な名曲のカヴァーやっていて、スプリングスティーンだって一曲は自分の歌だけど、もう一曲はピート・シーガーと〝我が祖国〟だぜ。
松村――マーティン・ルーサー・キングについての歌だからじゃないのか、U2の場合。
渋谷――まあ、そうなんだけどな。
松村――でも凄くよくできたショーだったよな、あの就任記念コンサート。
渋谷――オリンピックの演出もやった奴がプロデューサーだったみたいだよ。アーティストの転換なんか、アカデミーやグラミーよりもスムーズで、最後にビヨンセが出てきて〝アメリカ・ザ・ビューティフル〟を歌って、ステージに出演者が全員出てくるところなんか、見事過ぎて引いたな。
松村――何で引くんだよ。
渋谷――うちのカウントダウンに出た泉谷しげるがステージで言った名言で「感動はするんじゃなくて、強制するもんだ」というのがあるんだよ。
松村――泉谷が言いそうだな。
渋谷――それを思い出したんだよ。
松村――だってイヴェントの性格そのものがそうじ

ゃないか。何か、お前の場合、普通のコンサートとかフェスみたいなもんを期待していないか。あれは、政府が主催した無料の大統領就任記念コンサートなんだぜ。

渋谷——そう、お前の言ってることが正しいんだけど、何かロックを期待しちゃったんだよな。

松村——それ、間違ってるから。

渋谷——でも、オバマといえば大胸筋だよな。

松村——何だ大胸筋って。

渋谷——胸の筋肉だよ。

松村——そんなことは知ってるけど、何でオバマが大胸筋なんだよ。

渋谷——知らないのかよ。オバマの大胸筋は凄いんだよ。休暇中にパパラッチに水着姿を撮られたんだけど、メチャメチャいい身体をしていて、特に大胸筋が発達しているわけ。現役の政治家では、世界一の大胸筋だと思う。プーチンに勝つ奴は出てこないかと思っていたけど、あれは、プーチン以上だね。これからの政治家は大胸筋の勝負になりそうだから、麻生も小沢も駄目だ、次の首相は大仁田厚だ。でも、相当体なまってそうだから、もう一度トレーニングさせよう。

松村——いいよトレーニングさせなくて。だいたい大仁田は政治家引退してるし。お前、本当に『SIGHT』の編集長なのかよ。

渋谷——任せとけ、日本一の総合雑誌『SIGHT』の編集長は俺だ。次の号ではオバマの特集もやるぞ。

松村——まさか大胸筋の特集じゃないだろうな。

渋谷——オバマはロックで勝ったのか、という特集だぞ、読め。

松村——読むよ、それで今回はその話になったんだ。分かりやすい奴だな。

渋谷——今のメディア社会にあって、政治もひとつのショービジネスになってきているよな。というか、政治の中にあるショービジネス的な要素をコントロールできないと、戦略的に負けてしまうと思う。そ

CamScannerでスキャン

れはいい悪いではなくて、現実としてそうだと思う。

松村――ああいう就任コンサートを観ていると、確かにそう思うよな。

渋谷――オバマというロック・スターかハリウッド・スターみたいな大統領の出現は、それを象徴しているよ。まあ、ケネディにしろ、アメリカの大統領は一貫してそうなんだけどな。

松村――日本はどうなんだ。その視点から見ると、かなりヤバイよな。

渋谷――麻生と小沢だと、大胸筋以外も負けてるところ多過ぎだな。

松村――というか、どこか勝っているところとかあるのか。下手するとオバマのほうが漢字読めたりして。

渋谷――……。**S**

グラミー勝者ロバート・プラントに告ぐ

渋谷――コンニチハ、ロバート・プラントです。グラミー五部門受賞したので、もうツェッペリンは一生やりません。

松村――絶対にそのネタだと思ってたんだよな。

渋谷――そんな嫌そうな顔をしなくてもいいだろう。

松村――読者にも絶対に読まれていると思うな。

渋谷――いいじゃないか、渋松なんてそういうお約束のネタでどれだけ大きく展開できるかが勝負だろう。

松村――一回も大きく展開したことなんてないじゃないか。小さく始めて、もっと小さく終わっているだろう。

渋谷――今回は違うぞ。終わったときにその大き

CamScannerでスキャン

さに驚くな。

松村——どうでもいいけど、なんでロバート・プラントが五部門も受賞したんだよ。

渋谷——それをこれから、さすが日本一の音楽評論家渋谷陽一という感じで分析してやるから楽しみにしていなさい。

松村——誰もお前を日本一だなんて思っていないけど、じゃあ分析してみろよ。

渋谷——まず俺はなんでU2がオープニングにいきなり出てくるんだと言いたいね。なんでもU2じゃないか。世界が注目するイヴェントを観ると、必ずU2が出てきてボノがもっともらしいコメントをするのは、もういいよ。

松村——別にもっともらしいコメントなんかしてないだろう。

渋谷——してなくても、しているような感じがするだろう。

松村——それはお前が勝手に思っているだけじゃないか。

渋谷——投票権もないのにアメリカ大統領選のイヴェントに出るわ、ノミネートもされていないのにグラミーのオープニングに出るわ、一体どうなってんだよ。

松村——知らないよ。いいじゃないか。盛りあがるんだから。

渋谷——それに聴いたかU2の新曲。

松村——聴いてないよ。

渋谷——びっくりするくらいいいんだよ。明らかに新しいステージにあがったね。もの凄く若々しいグルーヴで驚いたな。どうなっているんだよ。

松村——知らないよ。お前は文句を言いたいのか誉めたいのか、どっちなんだよ。

渋谷——文句を言いながら誉めたいんだよ。

松村——ややこしいからどっちかにしろよ。

CamScannerでスキャン

渋谷――嫌だ、そこは譲れない一線だな。

松村――どういう一線なんだよ。

渋谷――でもグラミーって、改めて観て思ったけどカントリー&ウエスタンの比重がもの凄く高いよな。賞の数もあるし、実際にパフォーマンスするアーティストもカントリーが多いし。グラミーを観てると、ヒップホップよりカントリーの方が今のアメリカの主要な音楽ジャンルのような気がしてくるよな。

松村――実際、市場も凄く大きいんだろう?

渋谷――まあそうだけど、さすがにヒップホップよりでかいということはないんじゃないか。一時期、賞の方向性もそうしたカントリー偏重な感じになって、グラミーそのものが陳腐化する危険があったよな。今はいいバランスに戻しているけど。俺も少し前までは、そういうグラミーの保守性が嫌で、売れたもん勝ちのアメリカン・ミュージック・アウォードの方が健全だと思ったりしたけど、やっぱりグラミーの一種の音楽互助会的なものは必要なんだと、今回のセレモニーを観ながら感じたね。

松村――確かに互助会的だよな。

渋谷――ポップ・ミュージック全体の産業的な活性化が大きな目的なんだよ。カントリーもジャズもロックもヒップホップも、それぞれにかかわるミュージシャンやスタッフが居るわけで、そうした全体が盛りあがるのが大切なわけ。MTVアウォードにしろ何にしろ、メディアや外部が主催する賞は、賞そのものが盛りあがればいいんだけど、グラミーは音楽産業のインサイダー、当事者がやってるから目的が違うんだよ。

松村――カントリーに比重をかけるのも、ちゃんと必然があるわけだ。

渋谷――そうそう、それにやたら功労賞的なもの

が多くて、キャリアの長いミュージシャンに対するリスペクトがメッセージとして強く出ているよな。あれもそうなんだよな。

松村――今更、お前に説明されなくてもグラミーというのはもともとそういうもんだろうという気がするんだけど。

渋谷――うるさい。ここから大きく展開するんだよ。

松村――そうしてくれよ。それでロバート・プラントはどうなったんだよ。

渋谷――それだよ。つまり、そういうグラミーのコンセプトにあのプロジェクトはぴったりなわけよ。ブルーグラスのヒロイン、アリソン・クラウスと伝説のロック・ヴォーカリスト、ロバート・プラントのデュエットは、まさにザ・グラミーなプロジェクトなんだよ。しかもプロデューサーがベテランのT・ボーン・バネットで、絵に描いたような音楽産業のあるべき姿なわけ。

松村――なるほど。

渋谷――グラミーの審査員にとって、これほどオイシイ対象はないだろう。それで俺達はツェッペリンを一生観ることができなくなってしまったわけよ。

松村――あのユニットでパフォーマンスもやってたよな。

渋谷――そんなことより、早くツェッペリンをやれ。

松村――お前、あのユニット嫌いなんだ。

渋谷――それが、もの凄くよかったんだよ。その演奏の後に登場したグリーン・デイが「あんな名演奏の後だと、スピーチしにくい」と言ってたけど、あれ本音だと思う。ちょっと聴くと、一種レイドバックしたバック・トゥ・ルーツなスタイルに聴こえるけど、実は徹底してモダンで緊張感のある

音楽なんだよ。

松村——感動してんのか、文句があるのかどっちなんだよ。

渋谷——文句言いながら感動してんだよ。でも、あれは驚いた。やっぱりロバート・プラントはツェッペリンなんだよ。

松村——……。

渋谷——なんで黙るんだよ。

松村——言ってる意味が分かんないし、突っ込む気力もないから黙ったんだよ。今、アリソン・クラウスとのユニットの話してるのに、なんでツェッペリンなんだよ。

渋谷——つまり、あれはツェッペリンなんだよ。

松村——……。

渋谷——頼む、なんであれがツェッペリンなんだよ、って突っ込んでくれ。そうすると話が大きく展開するから。

松村——もの凄く嫌な予感がするんだけど。

渋谷——そんなことないから、頼むよ。

松村——なんであれがツェッペリンなんだよ。

渋谷——T・ボーン・バーネットがジミー・ペイジだからだよ。

松村——言わなきゃよかった。

渋谷——だから、ツェッペリンがジミー・ペイジのサウンド・デザインの上でロバート・プラントが踊っているプロジェクトだとするなら、このアリソン・クラウスのプロジェクトはT・ボーン・バーネットのサウンド・デザインの上でロバート・プラントが踊っているプロジェクトなんだよ。構造は全く同じなんだよ。そこに気付かずロバート・プラントは浮かれているけど、そのうちアリソン・クラウスと一緒にしか語られないから、俺はこのプロジェクトはもうやらない、とか言い出すね。

松村——本当かよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——だから、ロバート・プラントはそういう宿命を負ったミュージシャンなんだよ。ジミー・ペイジやT・ボーン・バーネットのようなミュージシャンがいないと輝かないの。あいつはそれを分かってないからツェッペリンは嫌だとか言ってるけど、同じだということに気付いて早くツェッペリンやれ。どうだ大きく展開しただろう。

松村——何だか、大きいんだか小さいんだかよく分かんないけど、結局、今回もツェッペリンなんだ。

小川——社長、大変です。

渋谷——なんだよ。

小川——ブリット・アウォードもオープニング・アクトはU2です。

渋谷・松村——……。 **S**

ロック・オヤジ同窓会の最高峰、渋松対談のお時間です

渋谷——コンニチハ、エリック・クラプトンとジェフ・ベックです。日本のロック・オヤジのおかげで、僕達の老後は安心です。

松村——いきなり二人かよ。

渋谷——盛りあがってたな、ジョイント・コンサート。お前も行ってたんだろう。

松村——オヤジばっかりだったな。お前のブログの写真、何だか黒くて怖かったぞ。

渋谷——客席を写したら黒と灰色ばっかりで凄い光景だったぜ。

松村——でも、客は嬉しそうだったな。

渋谷——隣のオヤジの加齢臭が凄くて、どうしようかと思ったぜ。

松村——お互い様だろう。

CamScannerでスキャン

渋谷――そうなんだけど、それにしてもキツイ加齢臭で、そいつがやたら盛りあがって興奮するもんだから、どんどん新陳代謝が活発になって発汗していくんだよ。

松村――お前も対抗して発汗すればいいじゃないか。

渋谷――そんな事したら混ざって最悪だろう。

松村――加齢臭には加齢臭で対抗するんだよ。若い奴は耐えるしかないけど、俺達オヤジには同じ武器があるじゃないか。

渋谷――加齢臭って武器なのかよ。

松村――あそこにはオヤジしかいないんだからいいんだよ。

渋谷――いや、よくないよ。オヤジでも他人の加齢臭は嫌なわけで、若い奴が嫌がるのは当然だよな。〝コカイン〟の時、「コカイン」って叫びながら腕を振り回された時は、席を移動しようかと思ったよ。

松村――ちゃんと自分の加齢臭もチェックした方がいいぞ。

渋谷――本当に、その時は真剣にそう思ったね。

松村――でも、本当に日本のロック・オヤジはクラプトンとジェフ・ベックが好きだよな。

渋谷――あれは何なんだろうな。ただ、これは世界的な傾向でもあるんだよ。七〇年代のロック黄金期を体験した世代はそこから抜けられないみたいだな。現役のロック・ファンからは卒業しても同窓会があると必ず集まるわけよ。あの全世界的なツェッペリン再結成騒ぎを見るとそう思うぜ。

松村――クラプトンとベックのライヴは同窓会なんだ。

渋谷――そうそう、だってどっちも新譜らしい新譜なんか出してないじゃないか。クラスのマドンナが二人集まるぞ、といってオヤジ達が集結したわけよ。しかも、まだ独身でキレイらしいって噂もあるし。

松村――何か、凄く切ない気分になるからその喩えやめないか。

渋谷――そうか、分かりやすいだろう。

CamScannerでスキャン

松村——分かりやす過ぎて悲しくなるよ。

渋谷——でも、前にもこの話したけど、ロックにとって七〇年代が余りにも豊か過ぎたんでそこを体験した世代って、何かその体験が自分の存在証明みたいになっているよな。

松村——ここに来て、またその傾向が強くなってないか。

渋谷——いくつか理由があると思うんだ。まずその世代のミュージシャンが同窓会である事を割り切った、というのが大きいよ。

松村——どういう意味で、割り切ったんだ。

渋谷——みんなライヴでベスト・ヒットを演るようになったんだよ。つまり、余計な現役感を主張しなくなったんだな。前にフーの『アメイジング・ジャーニー』で、ピート・タウンゼントが言っていたのを渋松でも話したけど、昔はヒット曲を演るのに抵抗があったのに、今はむしろヒット曲を演れる事に感謝しているというわけよ。凄く健全だと思うぜ。

松村——ストーンズなんか、かなり前からそのスタンスだったよな。

渋谷——だから逆にバリバリの現役感があるライヴを演れるんだよ。

松村——クラプトンのセットリストも凄かったな。

渋谷——〝レイラ〟に〝テル・ザ・トゥルース〟に〝アイ・ショット・ザ・シェリフ〟に〝ワンダフル・トゥナイト〟に〝コカイン〟に〝クロスロード〟だもんな。そりゃや、隣のオヤジの新陳代謝も活発化するよ。

松村——ジェフ・ベックも同じ感じだったしな。

渋谷——前だったら、それこそクラプトンにしろベックにしろ、新曲に自分のアイデンティティーを主張したかっただろうけど、もうそんな時期は過ぎたんだよ。そうでなければジョイント・ライヴみたいな企画にも乗らなかっただろうし。同窓会のマドンナが、割り切って昔のセーラー服で来る感じだよな。

松村——それ絶対に違うぜ。だいたいそんなもん怖くて見たくないし。

渋谷——そうか、怖くてバカ受けすると思うけどな。
松村——受け方が違うだろう。怖がらせてどうするんだよ。
渋谷——それと、やはりそのクラスのミュージシャンの音は時代を超えた普遍性を持っているという事だと思う。
松村——確かに懐メロな感じはなかったな。
渋谷——懐メロじゃ、あんなに人は集まらないんだろうな。あの会場にいる事に、どっか後ろ向きな感じがあると、やっぱり駄目なんだよ。
松村——昔のアイドルの懐メロ・ライヴになったら、そこにいる事が恥ずかしいし、開き直りな気分が必要になるな。
渋谷——ストーンズやフーなんかが究極だけど、全く古くならないわけじゃないか、音楽そのものが。だから、七〇年代のロック全てが今の時代に有効というわけじゃないんだよ。一番分かりやすいのがツエッペリンだな。
松村——絶対にその話になると思ったんだよ。お前、ここ最近の渋松を読み返した方がいいと思うぜ。お前の話は必ずツェッペリンな展開になるんだよ。一種の病気だぜ。だいたいジミー・ペイジにインタヴューしても渋松になっちゃうし。
渋谷——しょうがないだろう、全てのロックはツェッペリンにつながっていくわけだから。
松村——つながっていかないよ。一切つながっていないから放っておいてくれよ。
渋谷——そういう言い方はないだろう。だからツェッペリン再結成が現役時代以上に話題になったのは、ツェッペリンの本当の全体像は七〇年代の現役時代には誰も見えていなかったわけよ、俺以外は。それが二十一世紀になって誰にでも見えるようになって大騒ぎになったわけだよ。俺は現役時代、ツェッペリンをヘヴィメタという奴はブタだ!という名文を書いて、そのロック・リテラシーの見事さを証明したけど、馬鹿な奴はディープ・パープルと並べて二

大ヘヴィメタ・バンドみたいな事を普通に言ってたわけじゃないか。今や誰もツェッペリンとパープルを並列するような奴はいなくなったけど。

松村――その話、もう百回くらい聞いたんで帰っていいか。

渋谷――つまり七〇年代の優れたロックは全く古くならないどころか、むしろ新しさが再発見されて、新しい世代のファンも集めてしまうわけだよ。

松村――若い奴がやたら七〇年代の音に詳しくて驚くよな。

渋谷――時々、物凄く歪んだ知識でウンザリする事があるけどな。ジミヘンは本当は手が四本あるとか。

松村――……。

渋谷――嘘だよ。本当はジミー・ペイジは日本人だとか、言う奴はいるけどな。

松村――それ、お前だろうが。 **S**

たまには担当編集者らしいこともしようと思います

渋谷——コンニチハ、アル・クーパーです。今回は新作を持ってのツアーだったんで、バンドも僕もいい調子でした。渋谷陽一さんに気に入ってもらって良かったです。

松村——前回、お前ボロクソに言ってなかったか?

渋谷——だってボロクソの演奏で、俺なんか泣きそうだったぜ。

松村——お前が泣く事ないだろう。

渋谷——泣くよ。お前だってジム・モリソンがボロクソだったら泣くだろう。

松村——まあな。でもジム・モリソンの場合はボロクソが芸風だから。

渋谷——確かに。でも前回は本当に厳しいライヴだったんだよ。何か悲しくなっちゃってさ。インタヴューで「もう僕のキャリアは終わったんだから」とかも言われていたんで、いろんな事が頭に浮かんで楽しめなかったな。声も出てなかったし。

松村——インタヴュー中に寝たのに、そんな深刻な話したんだ。

渋谷——最初のインタヴューの時な。二回目はやたら盛りあがって向こうがなかなか終わりたがらないくらいだったんだぞ。

松村——お前って、自分の好きなアーティストだと、何か変なインタヴューにならないか? ジミー・ペイジは怒らせるし、アル・クーパーは寝かしつけちゃうし。

渋谷——何だよ、寝かしつけちゃうって。別に俺はアル・クーパーに布団かけて、子守唄を歌ってやったわけじゃないよ。アル・クーパーは病気で、しかも俺のインタヴュー前に強い睡眠効果のある薬を飲んだんで、そんな事になったんだよ。

松村——まあ、どうでもいいけど、とにかく今回はいいライヴだったんだ。

渋谷——どうでも良くないけど、ライヴは凄かったよ。ブルース・プロジェクトの曲もやったし。

松村——前もやったじゃないか。

渋谷——お前、そういう事は憶えているよな。まあ、そうだけど、新作から旧作までいろいろやってくれて最高だったよ。そして、この人の音楽スタイルは全くブレていないのが分かって、ファンでいて良かったと思ったよ。

松村——でも日本にお前みたいなファンがそれなりに居るというのは、アル・クーパーにとっては幸運だったよな。

渋谷——そうかもな。今回も凄いファンのライヴ・ハウスのオーナーが呼んだらしいから日本のファンは大切だと思うぜ。

松村——そうやって年をとったファンが、ベテラン・ミュージシャンのタニマチになって面倒みるっていうのはありだな。

渋谷——キング・クリムゾンなんか、完全に日本のプログレ・オヤジがタニマチだと思うぜ。

松村——今回は、アル・クーパーが渋松のテーマなのか？

渋谷——そうじゃなくて、何か小川がネタを考えてくると言ってたな。

小川——コンニチワ、ロッキング・オンのマツケン小川智宏です。

渋谷——お前、そのネタを新年会でやってスベったじゃないか。

小川——似過ぎていて、シャレにならなかったんですかね？

松村——何でこいつと松平健が似てるんだ？　全然似てねえじゃないか。

渋谷——そのマツケンじゃないんだよ。話がヤヤコシクなるから黙っててくれよ。

松村——何だよ、感じ悪いな。

渋谷——とにかく、今回はコイツがネタを持ってくる事になっているんだよ。

CamScannerでスキャン

小川——任せて下さい。凄いの持ってきました。マイケル・ジャクソンの私物がオークションにかけられます。何か差し押さえられた私物を現金化して借金の返済にあてろってことらしいですよ。

松村——……。

渋谷——それでどうやって渋松やるんだよ。

小川——えっ、盛りあがるじゃないですか。〝ビリー・ジーン〟のヴィデオでしていた、あのクリスタルの手袋が百三十万くらいになるらしいですよ。そこでお二人のオークションの思い出とか語っていただければ、凄く面白い渋松になりますよ。

松村——俺達にオークションの思い出なんかないんだよ。

小川——ネヴァーランドの門も二百万ぐらいになるらしいですよ。でも、あんなデカイ門を買ってどうするんでしょうね。

渋谷——知らねえよ。そんなネタじゃなくてもっとましなのはないのかよ。

小川——そうですか、面白いと思うんだけどな。それじゃ、とっておきのを出しましょう。ペット・ショップ・ボーイズが動物愛護協会からグループ名を変えろと言われたというのはどうですか。

渋谷——……。

小川——動物愛護協会は、〝グループ名はレスキュー・シェルター・ボーイへ変えてくれ〟って頼んだらしいですよ。そうすれば、バンドのファンがペット・ショップでペットを買わず、シェルターにいる見捨てられた動物達を飼うようになるというのが彼らの主張らしいです。

松村——……。

小川——お二人の動物愛護協会時代の思い出を語っていただいて、ぐっと盛りあげていただければと思うんですけど。

松村——こいつ俺達の事を馬鹿にしてないか。

渋谷——小川、もうひとつだけ待ってやる。次にまともなものを出さないとクビにするぞ。

小川――BBCが過去七十五年間で最もラジオでオンエアされた曲のトップ十を発表したんですよ。その一位が、何とプロコル・ハルムの〝青い影〟なんです。

渋谷・松村――へえーっ。

小川――面白いでしょう。

渋谷――面白い。

小川――ちなみに原題は〝A Whiter Shade Of Pale〟っていうんですけどね。意外に原題は知られていないですよね。知ってました？

渋谷――うるさい、もういいからお前はどっか行け。

松村――あれ、日本で異常に人気がある曲だと思ってたけど、イギリスでも凄いな。

渋谷――一位は凄いよな。二位は〝ボヘミアン・ラプソディ〟らしいぜ。

松村――何か嗜好性が似てないか。

渋谷――似てる似てる。でも、俺達世代にとって〝青い影〟は〝ボヘミアン・ラプソディ〟並みのポピュラリティーがあるけど、今の若い世代は知らないだろうな。七〇年代、どんな有線でも三十分に一回は流れてたよな。

松村――三十分に一回は流れてないけど、音楽ファン以外の人でもたいてい知っていたよな。

渋谷――いつぐらいから流れなくなったんだろう。そういうの研究してみると面白そうだな。〝青い影〟はいつから流れなくなったのか、というタイトルの新書が出たら売れそうじゃないか。

松村――絶対に売れないと思うけど、イギリスでは流れ続けているって事だよな。

渋谷――そうだな。でも面白いよ。音楽評論家的に言うと、プロコル・ハルムはその後どんどんスタイルを変えて〝青い影〟はむしろバンドのキャラ的には異色の曲になってしまったんだよ。でも曲がデカ過ぎるから、いくらバンドのスタイルが変わっても、その曲のイメージから逃げられないんだな。新しいスタイルのプロコル・ハルムが来日した時も、客のほとんどは〝青い影〟を待っているんだよ。その辺は

CamScannerでスキャン

バンドも分かっていて〝青い影〟をしっかり演奏するんだけど、何か切なかったな。
松村——大きなヒット曲を持っているバンドの宿命だけど、この場合はそれが極端だよな。
渋谷——でも、この統計は面白いな。日本でもやってみると意外な結果が出たりしてな。
小川——あっ、今新しいネタが入りました。
渋谷——もういいよ、終わったから。
小川——いや、今度のも凄いです。マイケル・ジャクソンのオークションが中止になりました。マイケル・ジャクソンのプロダクションがオークション中止を求めて起こしていた訴訟が、結局和解という形で終結したらしいです。『ロッキング・オン』で門でも買ったら話題になったのに残念ですよね。
松村——それじゃ帰るからな。来月までにこいつクビにしておけよな。**S**

一九六九年、渋松十八歳の日々

渋谷——コンニチハ、佐藤宏です。高校時代の渋谷はロックばっかり聴いていて、授業をよくサボってました。

松村——誰だよ。その佐藤宏って。

渋谷——バスケ部のサトチンだよ。あいつもレギュラーになれないのに練習は真面目にやってたな。

松村——何だサトチンって。

渋谷——アダ名だよ。

松村——分かってるよ。だから何でそのサトチンが出てくるんだよ。

松村——何だお前、まだクビになってなかったのか。

小川——はい、おかげさまで。その、ちょっとお聞きしたいのですが、そのロック喫茶というのは、戦後の映画なんかに出て来る、歌声喫茶の変型みたいなものなんですか？

松村——だから、早くクビにしろって言っただろう。

小川——違うんですか？

渋谷——当たり前だろう。ロック喫茶というのは、巨大なオーディオ・システムを持った喫茶店で、大音量でロックを流してるんだよ。

小川——クラブみたいなもんですね。踊ったりするんだ。

渋谷——踊らないよ。皆椅子に坐って、うつむいてロック聴いてんだよ。

小川——……。

渋谷——ピンク・フロイドの『原子心母』でどうやって踊るんだよ。

小川——確かに。

松村——山崎が働いていたローリング・ストーンとかまだあるんじゃないのか。

渋谷——あれは一度潰れて、復興運動があって復活したんだよ。

松村——何だ復興運動って？

渋谷——まさに復興運動だよ。ローリング・ストーンみたいな文化財に等しいロック喫茶を失うのは文化的喪失だって事で、有志がカンパして復活したんだよ。

小川——いや、行くところがなくなったロック親父が金を出しあって、行き場所を作ったらしいですよ。

渋谷——お前、山崎に殺されるぞ。

小川——山崎さんが、そう言ってました。

渋谷——……。

小川——でも、今はロック喫茶じゃなくてロック・クラブというか、ロック居酒屋というか、そんな感じですよね。

渋谷——ロック酒場だよな。やっぱりロック喫茶は、

CamScannerでスキャン

松村――やっぱりフラッシュバックあるじゃないか。

渋谷――お前、人の事言えるか。時効だからいいのかもしれないけど、いろいろバラすぞ。

松村――シンナーはやってないから。

渋谷――シンナーは合法なんだよ。

松村――シンナーの場合は合法違法というレベルの問題じゃないだろう。

渋谷――確かに。でも、この『ロッキング・オン』は、そのシンナーやってるフーテンの溜り場だったロック喫茶の常連を集めて作った同人誌だったんだからな。

松村――お前は、常連じゃなくて従業員だろう。

渋谷――まあな。前にも言ったけど、凄くギャラが良かったんだよ。いい時代だったよな。

松村――いい時代って、今はもっともらっているからいいじゃないか。

渋谷――それがそうでもないんだよ。ラジオのギャラって安くてさ。確かに時給計算すれば高いけど、当時は七時間でも八時間でもレコード流してDJしてたから、日給計算すると今より高いくらいなんだな。

松村――いいかげんなDJをダラダラやってたよな。

渋谷――そうそう。お気楽な仕事だったよ。今、考えてみると、俺の生涯で一番ストレスがなくて金になった仕事かもしれない。そうだロック喫茶をやろう。あの時代に戻るんだ。

松村――戻るんだって。ロック喫茶を経営するのかよ。それともDJをやるのかよ。

渋谷――DJをやろうにもロック喫茶そのものがないから、まずは経営だな。そして、その店に雇ってもらって、高いギャラももらうんだよ。

松村――それ払ってるのもお前じゃないかよ。

渋谷――何かワクワクして来たな。

松村――して来ねえよ。

小川――あの、お話の途中なんですが。

CamScannerでスキャン

松村――何だお前、まだクビになってなかったのか。

小川――はい、おかげさまで。その、ちょっとお聞きしたいのですが、そのロック喫茶というのは、戦後の映画なんかに出て来る、歌声喫茶の変型みたいなものなんですか？

松村――だから、早くクビにしろって言っただろう。

小川――違うんですか？

渋谷――当たり前だろう。ロック喫茶というのは、巨大なオーディオ・システムを持った喫茶店で、大音量でロックを流してるんだよ。

小川――クラブみたいなもんですね。踊ったりするんだ。

渋谷――踊らないよ。皆椅子に坐って、うつむいてロック聴いてんだよ。

小川――……。

渋谷――ピンク・フロイドの『原子心母』でどうやって踊るんだよ。

小川――確かに。

松村――山崎が働いていたローリング・ストーンとかまだあるんじゃないのか。

渋谷――あれは一度潰れて、復興運動があって復活したんだよ。

松村――何だ復興運動って？

渋谷――まさに復興運動だよ。ローリング・ストーンみたいな文化財に等しいロック喫茶を失うのは文化的喪失だって事で、有志がカンパして復活したんだよ。

小川――いや、行くところがなくなったロック親父が金を出しあって、行き場所を作ったらしいですよ。

渋谷――お前、山崎に殺されるぞ。

小川――山崎さんが、そう言ってました。

渋谷――……。

小川――でも、今はロック喫茶じゃなくてロック・クラブというか、ロック居酒屋というか、そんな感じですよね。

渋谷――ロック酒場だよな。やっぱりロック喫茶は、

コーヒー一杯で四時間も五時間も坐り続けなくちゃな。

松村――考えてみると、謎の空間だったよな。

渋谷――お前らは知らないけど、『ロッキング・オン』を生んだ伝説のロック喫茶、ソウル・イートは夜中が凄かったんだよ。二時、三時になると常連のフーテンと従業員しか居ないから、やりたい放題になって。それこそラリラリのハレハレのヘロヘロ状態になるんだ。

松村――どういう状態だよ。

渋谷――だからラリラリのハレハレのヘロヘロだよ。いい時代だったな。やっぱりロック喫茶復興だな。

小川――会社、潰れませんか？

松村――潰れると思う。S

注：一九七二年開店、一時閉店を経て現在も営業中。

偉大なるロックの幻想、ウッドストック

渋谷——コンニチハ、ジミヘンです。できればウッドストックは客がもっといる時に演りたかったたな。

松村——ジミヘンが自分でジミヘンとか言うか。

渋谷——渋松にそういう正確さを求めるなよ。もっとロックでいこうぜ。

松村——どこがロックなんだよ。今月はウッドストックなのか？　先月号で特集したばかりじゃないか。

渋谷——そうだけど、未公開の映像も入ったDVDが出るんだよ。

松村——お前、ウッドストックのこと嫌いじゃなかったのか？

渋谷——ウッドストック幻想は当時徹底的に批判

CamScannerでスキャン

したな。そんなこと言うのは俺ぐらいだったけどな。

松村――だったら観るな。

渋谷――何でだよ。

松村――男なら、批判したものは観るな。

渋谷――俺が批判したのはウッドストックのアーティストの演奏がウッドストック幻想で、別にウッドストックのアーティストの演奏が駄目だと言ってるわけじゃないんだから、別にＤＶＤを観たっていいだろう。

松村――男らしくないぞ。観るな。どうしてそれくらい我慢できないんだ。大人なんだから我慢くらいできるだろう。

渋谷――何、わけの分かんないこと言ってるんだよ。でも、今になってこんな蔵出し映像が出てくるっていうのも複雑な気分だな。当時はジャニスとかデッドとか観たかったから、何でシャ・ナ・ナなんだよ、とか思ってたよな。

松村――でも、何でも観れたら嬉しかったという感じでもあったぜ。

渋谷――確かに。スライとかぶっ飛んだよな。

松村――映画会社が日本でヒットすると勝手に思い込んで、凄い宣伝を展開して、公開館数も多かったけど、全然人が入んなかったよな。

渋谷――試写会をやり過ぎて観たい奴は全部試写で観てしまったという説もあったな。

松村――冷静に考えれば当たるわけないよな。

渋谷――もともと洋楽ファンなんて、あの時代はたいしていないんだから、演奏場面しかないドキュメンタリーに人が来ないのは当たり前だよな。

松村――そうそう、俺の友達なんか映画館に客が自分一人しかいないんで、スライの時に思い切り「ハイヤー」って叫べたって喜んでいたぞ。

渋谷――何か怖いな、その光景。

松村――確かに。でもロックだよな。

CamScannerでスキャン

んだよ。
渋谷――お前のロックって、どういうイメージな
んだ？
松村――それで、今回のＤＶＤは昔のとどう違う
ことで、公開時には収録されていなかったジャニ
渋谷――今回のはディレクターズ・カットという
スとかジェファーソンとかの演奏場面が収録され
ているんだ。それに未収録映像を集めた特別ＤＶ
Ｄも付いてんだよ。そこにはデッドとかＣＣＲと
かマウンテンとかポール・バターフィールドとか、
誰もが観たいアーティストの演奏が収められてい
るわけよ。あっ、ジョニー・ウィンターもいるぞ。
松村――デッドとＣＣＲはともかく、それが誰も
が観たいメンツなのか？
渋谷――俺は観たいぞ、どれもライナーか記事を
書いたことのあるアーティストばかりだぞ。
松村――あの当時は確かに皆人気あったけど、今
はどうなんだろうな。
渋谷――まあ、ジョニー・ウィンターとか言って
も、今のロック・ファンはそれ誰？って感じだろ
うな。でも、今観直してみると、当時は普通に観
てたことが、逆に面白かったりするな。
松村――どういうところだよ。
渋谷――まず、ヴィジョンがないんだよ。
松村――確かに。
渋谷――だから、ほとんどの人はアーティストの
姿なんか見えないんだよ。
松村――四十二万人だからな。
渋谷――そうそう、だって四万人、五万人のフェ
スでもヴィジョンがないと、ステージから少し距
離があると見えないぜ。それが四十二万人になる
とヴィジョンがないと、どうしようもないよな。
松村――当時は、そういうものと思っていたんだ
ろうな。

CamScannerでスキャン

渋谷――音が聴こえているだけで満足してたんだと思う。照明も必要最低限の感じで、夜の映像なんかやたら暗いんだよ。

松村――ステージもひとつだしな。

渋谷――そうなんだよな。だから客が移動しないですっとひとつのステージ観てるんだよ。でも前に押し寄せるわけでもなく、平和に後ろの方で観てて、いい雰囲気なんだ。いろんな意味でのどかな時代だったよな。

松村――お前、説明してるんじゃないのかよ。

渋谷――まあな。それを話すと長いけどな。このディレクターズ・カット版でも、いわばウッドストック幻想に対するシニカルな観点が加えられていると思う。

松村――でも、この後にリメイクされて増えてきたんじゃないか。

渋谷――かなり後だろうけど、ある意味、象徴的なのは、少し前にウッドストック三十周年記念ということで、また同じプロデューサーがウッドストックをやって、やはりボロボロの運営で、客が車に火を点けて騒ぎになったじゃないか。

松村――あったな、そんなこと。

渋谷――一九六九年なら許されたことも、今では許されないんだよ。プロデューサー自身があのウッドストックで起きたことが何であったか分かってないんじゃないのかな。

松村――じゃあ、あれは何だったんだ。

渋谷――ロックは凄い、でも凄いことを引き受けるのは大変ということだよ。

松村――分かったような分からないような話だな。

渋谷――簡単だよ。ロックは四十二万人もの人間を集めてしまうくらい、一九六九年には力を持ってしまったんだよ。それは凄いことなわけじゃないか。あの映画の感動的なのは、当事者達がその

自分達の凄さに驚いて高揚しているところだよな。

松村――誰もあんな事態を予想してなかったからな。

渋谷――でも四十二万人も人が集まれば、食事や排泄、医療、ありとあらゆる問題が生じて大変なわけだよ。それをオーガナイズしていくのはもの凄い大人としてのエネルギーと知恵が必要とされるわけじゃないか。マリファナ吸ってジミヘン聴いてたら全てが解決されるなら楽だけど。

松村――いいなそれ。

渋谷――いいなそれ、じゃないだろう。

松村――お前だって一九六九年にはそんなもんだっただろう。お前はマリファナじゃなくてシンナーかも知れないけど。先月の渋松でも自分の歳、一年勘違いしていたくらいだからな。俺も後から気付いたんだけど。

渋谷――だからシンナーじゃないと言っているだろう。

松村――ウッドストックにシンナーは似合わないよな。

渋谷――ウルサイ。でも今回のDVDで一番衝撃的だったのは特典映像だな。

松村――未公開映像が他にもあるのか？

渋谷――違うんだよ。あのフェスが行われた跡地に野外コンサート会場と、ミュージアムが立っていて、何だかテーマ・パーク化してるわけ。その宣伝映像が入っているんだよ。

松村――それのどこが衝撃的なんだ？

渋谷――何か、全てが間抜けな感じなわけ。ミュージアムなんか、よく観光地にあるガラス美術館とか、こけし工芸館みたいな乗りなんだよ。それをヴァーノン・リードがナビゲートするんだぜ。凄く違和感あったな。

松村――誰だよ、そのヴァーノン・リードって？

CamScannerでスキャン

渋谷――リヴィング・カラーのギタリストだよ。リヴィング・カラーって何だ、とか言うなよ。

松村――リヴィング・カラーって何だよ。

渋谷――……。そういう八〇年代に盛り上がった黒人のロック・バンドがいるんだよ。およそそんなもんのナビゲートをするキャラじゃないんだけど。だから変な感じなんだよ。

松村――でもやってるんだろう。

渋谷――そういうことだよな。つまりそれが四十年後のリアルってことなのかも知れないよ。

松村――そいつ、出てたの？

渋谷――当時十歳ぐらいだから、出てるわけねえよ。

松村――なのに、なんでやってるの？

渋谷――知るか、そんなこと。 **S**

僕達が解散して再結成しても、ドーム は埋まりそうにありません

渋谷――コンニチハ、ポール・サイモンです。日本での僕達のグループ名がサイモンとガーファンクルだと知って、とても嬉しかったです。

松村――何だそれ、意味が分かんないだろう。

渋谷――凄いだろう、それは。だってサイモンとガーファンクルだぜ。普通、グループ名はそのまんまなのに日本語に訳されているんだぜ。

松村――別にアンドがとになっただけじゃないかよ。

渋谷――そこが大きいんだよ。普通ないぜ。

松村――別にアンドは普通にとになるだろう。

渋谷――ならないよ。ベルとセバスチャンとか変だろう。

松村――それ極端だろう。

渋谷――クールとギャングとか。

松村――……。

渋谷――アース・ウィンドとファイアーとか。

松村――……。

渋谷――YとTとか。

松村――分かったよ。

渋谷――チャゲと飛鳥とか。

松村――それ、日本のグループじゃないかよ。

渋谷――ブレッドとバターとか。

松村――しつこいよ。

渋谷――だからサイモンとガーファンクルは凄いんだよ。内山田洋とクール・ファイブかサイモンとガーファンクルだぜ。とでつながるグループ名といえばろう。

松村――でもソニーとシェールとかいるぜ。

渋谷――……。

松村——ジャンとディーンも微妙だけど、いちおうとで表記することも多いよな。

渋谷——チクショー、敏いとうとハッピー&ブルーなんか、ともアンドも両方入っているぞ。

松村——だから何なんだよ。お前は何が言いたいんだよ。

渋谷——サイモンとガーファンクルが偉いということだよ。それだけ日本で定着しているグループなんだよ。

松村——確かに教科書に出てくる洋楽アーティストといえばビートルズとサイモンとガーファンクルだよな。

渋谷——〝明日に架ける橋〟なんか、〝蛍の光〟なみの認知度だよな。

松村——〝明日に架ける橋〟はやったのか。

渋谷——当然だろう。本編ラストで思い切り盛り上がったぞ。アート・ガーファンクルの声は少し出てなかったけど。

松村——本編ラストなんだ。

渋谷——とにかく聴きたい曲は全部聴かせます、という実に正しいセットリストで、ヒット曲は全部やったな。でも、最近一九六九年のライヴ・アルバムが発売されたんだけど、そのセットリストとかなり近いんだよ。その時点で〝スカボロー・フェア〟も〝ミセス・ロビンソン〟も〝ボクサー〟も〝明日に架ける橋〟も〝サウンド・オブ・サイレンス〟も〝アイ・アム・ア・ロック〟も〝旧友〟も、全部あるんだよな。しかも今回のライヴで、その曲全部やったし。

松村——まあ代表的なヒット曲だからな。

渋谷——四十年前に、その代表的なヒット曲のほとんどが作られてしまっている、っていうのが切ないよな。

松村——でもあるんだからいいだろう、しかもこんなにたくさん。

渋谷——確かに、それは言える。でも、武道館でサイモンとガーファンクルを観ているって、何か不思

CamScannerでスキャン

議だったな。
松村――どうしてだよ。
渋谷――だってなかなか再結成しなくて、奇跡的にやったセントラル・パークでのフリー・コンサートには五十万人くらい集まったんじゃないか。だから、サイモンとガーファンクル観るためにはニューヨークとか行って、四十万人と一緒じゃないと観れないというイメージがあるんだよ。
松村――何かツェッペリンの再結成みたいだよな。
渋谷――そうそう。だから再結成ツェッペリンを武道館で観ている気分だったんだよ。
松村――今は普通にツアーをしてるよな。
渋谷――だから時間って大きいよな。三十年、四十年という時間が心を溶かすんだよ。今、いろんな再結成バンドが動いてるけど、時間が解決したことが多いと思うぜ。俺達だって、こうやって普通に話せるようになるのに三十年かかったわけだし。渋松再結成するのにはやっぱりそれだけの時間が必要だったよな。
松村――どこがだよ。もう四十年近く毎月こうして対談やってるじゃないか。やりたくてやってるかは別問題だけど。
渋谷――だろう。いろいろあるわけよ。
松村――だから、何がいろいろなんだよ。
渋谷――よく分かんないけど、いろいろだよ。
松村――分かんないなら、何もないんだよ。
渋谷――解散しないと再結成できないからつらいよな。
松村――別につらくないだろう。
渋谷――だってサイモンとガーファンクルも再結成だから、何かドラマチックで盛り上がってるんだぜ。四十年前と同じセットリストでも。
松村――全部同じじゃないだろう。
渋谷――まあな。アート・ガーファンクルはちょっと声が出てなかったけどな。
松村――お前、凄くよかったって言ってたじゃない

か。

渋谷——そうだけど、やっぱりそこは再結成というドラマがあったというのは大きい要素だぜ。あのまま四十年間活動していたら、東京ドーム二回を、この二十一世紀の東京で満員にできたかは微妙だと思うな。

松村——お客さんは、やっぱり四十年前から聴き続けているようなオジサン、オバサンなのか？

渋谷——ほとんどがそうだな。だから本人達も一種のコスプレなんだよ。

松村——何だよコスプレって。

渋谷——アート・ガーファンクルのジーンズに白シャツ、ネクタイっていうのは、まさに六〇年代サイモンとガーファンクルのファッション的記号じゃないか。そこをちゃんと再現していて、セットリストを含めて自分達が何を求められているか、凄くよく分かっているよな。カメラも後ろにあったし。

松村——何だ、カメラが後ろって？

渋谷——ヴィジョンに映す映像を撮るカメラが二人の後姿を撮れる場所に置いてあるんだよ。あまりないカメラ・アングルじゃないか。

松村——まあな、普通前だよな。

渋谷——でもサイモンとガーファンクルの場合は後姿がポイントなんだよ。ライヴ写真のイメージで、スポット・ライトを浴びている二人の後姿って、ファンにとっては刷り込まれた構図なんだな。

松村——本当かよ。

渋谷——本当だよ。だから、ヴィジョンに二人の後姿が映ると、何か六〇年代に戻った気分になって、若返った感じがするんだな。あんなにヴィジョンにアーティストの後姿が映るライヴは観たことがないぜ。

松村——何で後姿で若返るのかよく分かんないけど、ドーム二回と武道館というのは凄いよな。

渋谷——一番凄いのは、確かに過去のヒット・ソングだから懐メロ的な側面はあるんだけど、曲のクオリティーが異常に高いから全く古くないんだよ。

CamScannerでスキャン

松村――ビートルズが懐メロにならないみたいなもんだよな。

渋谷――そうそう。だからライヴ観ても後ろ向きな気分にならないんだよ。あの普遍性は凄い。

松村――そうじゃなければこんなに盛り上がんないよな。

渋谷――ツェッペリンの再結成があれだけ盛り上がったのも、二十一世紀という神の視点がツェッペリンの偉大さを改めて発見させたからだと思うな。

松村――そのバンドは四十年くらいすると再結成されるのか。ひとつも時間がしこりを溶かしている様子がないけど。

渋谷――いや、いつか溶かすね。あと五年くらいで再結成するな。日本でのグループ名は変わるけど。

松村――何になるんだよ。

渋谷――レッドとツェッペリン。S

苗場は今年も雨だった

松村——お前、ケータイ、ソフトバンクに変えたんだって？

渋谷——変えてないけど、なんでだよ？

松村——スマップのTVCMで、グランド・ファンク・レイルロードの〝ロコモーション〟が流れてるじゃないか。あのCM見て涙ぐんでるって、『噂の真相』に載ってたぞ。

渋谷——とっくにないよ、『噂の真相』なんて。

松村——今でこそレッド・ツェッペリンな顔してるけど、本当はグランド・ファンクな奴じゃないか、お前は。

渋谷——どういう奴なんだよ、グランド・ファンクな奴って。ジェームス・ブラウンかよ。

松村——白状しろよ。インサイド・ルッキング・アウトなハートブレイカーだったじゃないか。

渋谷——お前は形容詞の使い方を勉強し直したほうがいいぞ。

松村——で、結局ロコモーションなアメリカン・バンドになったわけだよな。

渋谷——それはヤホーで調べたのかよ。

松村——本当は、ジミー・ペイジよりマーク・ファーナーのほうがギター上手いって思ってんだろ。上半身裸で歩きまわりたいんだろ。

渋谷——なかやまきんに君か、俺は。

松村——そうか、やることもないのに留学するのか。

渋谷——うるさいよ。今日はフジ・ロックの話じゃないのかよ。

松村——そう、そう。今年は、着いたらもう雨だっ

CamScannerでスキャン

たもんな。
渋谷——二日目は大丈夫だったけど、三日目も午後から雨だったな。
松村——三日目は、あれは頭脳警察のせいだよ。演奏前にバックステージでパンタさんが「なんか、俺達がステージ出たら、雨ふってきそうな空だな」って言うから、「演奏終わるまではなんとかしてくださいよ」って言ったら、本当に終わったら大雨になっちゃった。
渋谷——清純派アイドルと覚せい剤ぐらい、関係ないじゃないか。
松村——どういう意味だよ。
渋谷——いや、特に意味はない。俺もパンタに会ったぞ。
松村——ああ、先週会ったら、渋谷にも会ったたって言ってた。俺と渋谷は三日間一度も会わなかったたって言ったら、渋谷もそう言ってたって。
渋谷——会いたくもないけどな。
松村——つまりさ、雨がふるとみんなフードかぶるから、顔が分かんなくなっちゃうんだよな。だから、雨が多いと、知り合いに会わなくなる。
渋谷——いや、実際、同年代の知り合いは少なくなってるよ、フジ・ロックでは。十年前は歩いてると十分おきぐらいに会ってたのに、本当に少なくなったもんな。
松村——まあ、四十代後半ならともかく、五十代後半になると、あの雨はツラいよ。長靴はくだけでも歩きにくいのに、下はぬかるみだから余計な力が入っちゃう。東京に帰って来てからも、三日は足が痛かったな。
渋谷——やっぱり、老いは足から来るっていうからな。頭はハゲだし、大変だな、お前は。
松村——うるさいよ。だけど、初日って寒かっただろ。だから、長袖でジーパンの上からレイン・ウェア着たら、歩いてると汗かくんだよ。で、ステージ観るために止まると、それが冷えて寒くなるんだよ。

CamScannerでスキャン

本当にガタガタ震えてきて、どうしようかと思ったぜ。

渋谷——長袖とジーパンを脱げばいいってことに、気がつかないんだもんな。

松村——で、座ってたら、徹夜で来てるからウトウトしちゃってな。

渋谷——起きろ、死ぬぞ！　フジ・ロックで遭難するんじゃないよ。

松村——本当にこれはマズいって思って、ホテルに向かっても、身体がダルくて、なかなか前に進まない。

渋谷——グリーン・ステージで行き倒れになったら、新聞のネタにされて、日高が怒るぞ。あのバカつまんねえことしやがってって。

松村——倒れても怒られるのか、俺は。だから、ホテルで風呂入って横になってたんだ。

渋谷——で、夜になってから、会場に戻ったのか。

松村——バカ言うなよ。あの日はもっと雨がひどくなって、橋は通れなくなるしボードウォークは壊れたっていうじゃないか。本当に、遭難しちゃうじゃないか。

渋谷——俺はオアシスまで観たぞ。

松村——年齢を考えろよ、年齢を。二十代や三十代じゃないんだぞ。

渋谷——部屋で休んでたって言うけど、同室の高見に訊いたら「松村さんはずっとビール飲んでました」って言ってたぞ。

松村——ホテルの部屋なんて、風呂入っちゃったらビール飲むしかないだろ。

渋谷——ツマミのカンヅメもいくつもあったし、焼酎も置いてあったって言ってたぞ。

松村——それは災害で閉じ込められたときのことを考えてのことじゃないか。

渋谷——酒じゃなくて、食料を持って来いよ。だいたい、ホテルで閉じ込められたって、いくらでも食うもんはあるわ。

CamScannerでスキャン

松村——だけど、二日目は晴れたから、お昼過ぎのイーダ・マリアから観たぞ。

渋谷——へえー、興味あるのか？

松村——いや、朝、出演スケジュール見てたら、高見と兵庫と柴で「これはイダ・マリアだろうか、イーダ・マリアだろうか、アイーダ・マリアだろうか」って言ってるんだよ。だから、俺は「井田マリアかも知れないし、飯田マリアかも知れないし、合田マリアかも知れないし」って言ったんだよ。

渋谷——頭悪い子達か、お前らは。

松村——で、これは究明しなきゃいけないって思って、行ったんだよ。

渋谷——で、なんて名前だったんだよ。

松村——自己紹介しなかったから分かんなかったけど、外人だったから井田でも飯田でも合田でもないんじゃないか。

渋谷——そのためだけに、四十五分のステージ観た奴は、お前だけだと断言してやる。

松村——二日目も昼過ぎのスティーヴ・ナイーヴから観たぞ。

渋谷——スティーヴ・ナイーヴには、どんな謎があったんだよ？

松村——いや、スティーヴには謎はないよ。昔、知り合いの女性シンガーがレコーディングして、バックに彼が入ってたんだよ。

渋谷——だから、どうしたんだよ。

松村——で、俺は曲を書いたんだよ。だから、スタジオでいっしょに仕事をしたんで。

渋谷——へえー、なんていうレコードだよ。

松村——あれは、結局、発表されなかった。

渋谷——頭悪い作曲家か、お前は。

松村——そういえば、三日目のオレンジ・コートは凄かったな。頭脳警察、ソウル・フラワー・ユニオン、渋さ知らズオーケストラだったからな。

渋谷——普通の奴は、パティ・スミス、ポール・ウエラー、オアシスって言うけどな。

松村――で、ソウル・フラワーと渋さ知らズの間に、アヴァロンでメシ食ってビール飲んでたら、知らない人がやって来て、ビール一杯くれたぞ。

渋谷――これで分かっただろ、他人はお前のことをどう見てるのか。

松村――そういえば、昔、小樽を歩いていて、やっぱりビール一本貰ったことがあったな。

渋谷――悲しいな、アル中のホームレスって。

松村――ホームレスがフジ・ロックに来るかよ。ビートルズの質問されたから、俺だって分かってたんだよ。

渋谷――いや、アル中のビートルズ・ファンだと思われたんだよ。

松村――……。M

注：元『BUZZ』編集部。

ちなみに、『ロッキング・オン・ブックス』も好評発売中です

渋谷——コンニチハ、ポール・マッカートニーです。ビートルズには〝レット・イット・ビー〟と〝ヘイ・ジュード〟以外にもいい曲がたくさんあるので聴いてね。

松村——凄いな、ビートルズ騒ぎ。

渋谷——お前とか、俺とか一生がビートルズに支配されていると、逆に何でここまで盛りあがるんだろうという気がするよな。

松村——全世界的な騒ぎだよな。

渋谷——そうそう。当然本国イギリスではとんでもないことになっているらしいよ。だから全世界的にビートルズ・ネタが流れているんだけど、どこの国でもやっているのが楽曲の人気投票なわけよ。

松村——やっているな。

渋谷——日本でもやっていて、一位が〝レット・イット・ビー〟、二位が〝イン・マイ・ライフ〟、三位が〝ヘイ・ジュード〟なんだよ。

松村——思い切り想定内だな。二位の〝イン・マイ・ライフ〟はよく分かんないけど。

渋谷——そうそう、日本人は〝レット・イット・ビー〟と〝ヘイ・ジュード〟が異様に好きだよな。

松村——イギリスはどうなんだ。

渋谷——児島さんのブログに書いてあったけど、イギリスで売れたシングルのベスト・スリーは一位が〝シー・ラヴズ・ユー〟、二位が〝抱きしめたい〟、三位が〝キャント・バイ・ミー・ラヴ〟で、〝ヘイ・ジュード〟は六位、〝レット・イット・ビー〟はトップ・テンに入っていなかったな。

松村——まあシングルの売り上げと、今の人気投票では意味が違うけど、本当に日本ではバラード、しかも〝レット・イット・ビー〟と〝ヘイ・ジュード〟人気が高いな。

渋谷——前にNHKのFMでビートルズ十二時間特集をやって、そのDJを俺がやったんだよ。

松村——何か、俺も呼ばれた気がする。

渋谷——そこでも電話リクエストやったんだけど、とにかく〝レット・イット・ビー〟ばっかり来るんだよ。

松村——そうだろうな。

渋谷——さすがに自分の番組で〝レット・イット・ビー〟一位はないだろうと思って、リスナーに向けて「他にもいい曲はありますよ」という日本で最も高名な音楽評論家として心あるメッセージを出したわけ、番組で。

松村——それ、単なる投票誘導じゃないかよ。

渋谷——そうしたら、俺がそういうことを言えば言うほど〝レット・イット・ビー〟のリクエストが増えるんだよ。

松村——お前、嫌われてるんじゃないかよ。

渋谷——頭に来て、最後まで訴え続けたんだけど結局〝レット・イット・ビー〟が凄い数のリクエス

トを集めて一位になったな。
松村――それって〝レット・イット・ビー〟人気と、お前の不人気の相乗効果だな。きっと日本で〝レット・イット・ビー〟の人気が高いのは、お前が〝レット・イット・ビー〟を好きじゃないと言ってることも原因のひとつだぜ。
渋谷――そんなわけないだろう。
松村――いや、分かんないよ。今度、売れて欲しい曲とかあったら、試しにけなしてみろよ。売れるぜ。
渋谷――俺はどういう人間なんだよ。
松村――そういえば日本人ミュージシャンにインタヴューで「渋谷さんに誉められた作品は売れないんで、誉めないで下さい」ってよく言われてないか。
渋谷――確かに、それってよく言われる。
松村――お前、自分が世間からどう見られているか一度冷静に見つめ直したほうがいいぜ。
渋谷――天才は理解されないんだな。
松村――それ違うよ、というか、その発想が嫌われる原因だと思うぜ。
渋谷――天才は孤独なんだ。
松村――勝手に言ってろ。
渋谷――リマスターが発売されたとき、いろいろテレビで報道してたけど、レコード屋に並んでいたのはオヤジばっかりだったな。
松村――それはビートルズ世代がオヤジなんだから当然だろう。
渋谷――いや、そうじゃなくて何でオバサンは買わないんだ。現役時代は女のファンのほうが圧倒的に多かったじゃないか。
松村――確かに。当時は世界最大のアイドル・グループだったんだからな。
渋谷――だってリンゴ・スターが一番人気あった

んだぜ。そんなバンドだったんだから。

松村――そんなバンドって、どういうバンドなんだよ。

渋谷――つまりアイドル・バンドってことだよ。日本公演も女のミーハー客で溢れてたじゃないか。あいつらはどこに行ったんだよ。

松村――そろそろ孫とかも生まれる歳になって年金の心配とかしながら、家にいるんじゃないのか。

渋谷――そういう話じゃなくて、何でリマスターに興味を示すのはオヤジばかりなんだって話だよ。

松村――再結成ライヴとかあると女のファンは来るんじゃないか。

渋谷――そうかもな。

松村――だって、お前もリマスターにあまり興味ないんだろう?

渋谷――そうなんだよ、どうしてだろう?

松村――知らないよ、音楽評論家なんだから自分で分析しろよ。

渋谷――分析すると、いろいろヤバイことを言い出しそうで怖いんだけど。

松村――大丈夫、お前は嫌われる天才だから心配するな。

渋谷――何だよ嫌われる天才って。

松村――何にしろ天才ってことだよ、気にするな。

渋谷――凄く馬鹿にされている感じで腹が立つんだけど。

松村――だから何でリマスターに興味がないんだよ。

渋谷――あまり本質的なことじゃない気がするんだよ。特に『サージェント・ペパー』以前の作品に関しては、むしろ作品の本質に逆行している気さえするんだ。極端な譬えを出すなら、過去のモノクロ映画の傑作をカラーにしたような気がするんだ。『サージェント・ペパー』以降はカラー作品な

んで、その解像度をあげていくことはいいのかも知れないけど。

松村——初期のものは低い解像度でいいんだ、お前の場合は。

渋谷——というか『サージェント・ペパー』以前のものは、あの音はひとつの作品というか表現だと思うんだよ。それはジョージ・マーティンの表現ということでもあるんだろうけど。

松村——ラジオで聴かれることを大前提にしたわけだからな、あの当時は。

渋谷——そうそう。何か初期のリマスターされた音を聴くと、自分のビートルズじゃないような気がしてくるんだ。俺のビートルズを返せ。

松村——それは単に、お前がオッサンだからじゃないか。

渋谷——お前に言われたくないよ。だからオバサン達がリマスターに走らない気持ちが少し分かるな。

松村——お前はオッサンじゃなくてオバサンなんだ。

渋谷——よく分からないけど、そうかも知れない。

松村——何か顔もオバサンみたいになってきたよな。

渋谷——なってねえよ。でもビートルズって凄いコンテンツだな、どんな新しい作品より商品価値が高いわけだからな。四十年前のものが、あえて言うならたかがリマスターされただけでこれだけ盛りあがるんだから、何か異常だよ。

松村——しかも現役時代から世界最高の人気と評価を得ていたわけだしな。

渋谷——面白いのは、メンバー自身においてもビートルズって、どこか人ごとなんだよな。

松村——そうか?

渋谷——だって、あのポールでさえインタヴュア

ーに「君、知ってた？　僕もビートルズだったんだよ」とか言ってるじゃないか。

松村――それは一種のジョークというかインタヴューアーへの皮肉だろう。

渋谷――まあ、そうなんだけど。半分は本音だと思うな。今回のリマスターに関してもメンバー自身の動きは見えてこなかったし。自分自身でありながら他人ごとって感じがバンドの面白さだよな。

そういえば『ロッキング・オン』の五百号も、何か自分が創刊した本という感じがなかったな。ポールもそんな気持ちなんじゃないか。孤独な天才として共感するな。

松村――全然、違うと思う。

注1　児島由紀子。ロンドン在住のコレポン。

CamScannerでスキャン

重量一・七キロのツェッペリン本は、五十肩にはつらいです

渋谷——コンニチハ、ピーター・グラントです。腹は出ているけど別に妊娠しているわけではありません。

松村——誰だよピーター・グラントって。

渋谷——ツェッペリンの伝説のマネージャーだよ。知らないのかよ。

松村——ああ、あのデブのオッサンか。でも、普通知らないだろう。

渋谷——知ってるよ。お前、ビートルズのファンがブライアン・エプスタインを知らなかったら怒るだろう。

松村——別に怒らないけど、ブライアン・エプスタインはあまりに有名だろう。

渋谷——何言ってんだ、ソフトバンク刊、定価三八〇〇円（税別）『ホール・ロッタ・レッド・ツェッペリン』に「ピーター・グラント——五人目のツェッペリン」っていう項があるくらいだぜ。

松村——何だ、その電話帳みたいな本。

渋谷——だからソフトバンク刊、定価三八〇〇円（税別）『ホール・ロッタ・レッド・ツェッペリン』だよ。全国の書店で絶賛発売中だぜ。

松村——厚過ぎないか、判型もデカイし。

渋谷——バンドのスケール感を出そうとしているんだろうな。

松村——逆に安っぽくないか？

渋谷——少しそれはあるかな。

CamScannerでスキャン

松村――何だよ、お前もそう思ってるんじゃないか
よ。
渋谷――でも松村のバンド本って、こういう感じだよな。日本の音楽事情に合わないからやめてほしいよ。
松村――それ、面白いのか。
渋谷――いろいろなツェッペリン本からのピックアップが多いけど、ツェッペリン・ファンなら知っておくべき史実や音楽的解釈が網羅されているな。俺はたいてい知ってるけど。
松村――お前みたいな奴はどうでもいいけどな。
渋谷――ツアー・マネージャーのリチャード・コールが『ステアウェイ・トゥ・ヘヴン／レッド・ツェッペリン・アンセンサード』という本を書いてるんだけど、そこで初回のツアーの話がいろいろ書いてあるんだ。それがこの本でも紹介されているんだ。
松村――そうなんだよ。
渋谷――鮪の話だな。
松村――何だ鮪の話って。
渋谷――ジョン・ボーナムの誕生日に、アメリカのプロモーターが酒と生きた鮪をプレゼントしたんだ。
松村――酒は分かるけど、鮪はどうすんだよ。
渋谷――風呂に入れるんだよ。
松村――……。
渋谷――ツアー・マネージャーがグルーピーを調達して、風呂にグルーピーと鮪を入れて盛りあがったんだ。
松村――何か似た話がなかったか。サメじゃなかったか。
渋谷――よく知っているな。当然、その話も紹介されているんだけど、それはフランク・ザッパ&ザ・マザーズが「マッド・シャーク」という曲にしてるくらい有名だよな。諸説あって、キンメダイ説と死んだサメ説と、鮪説があるんだな。
松村――また鮪かよ。
渋谷――何にしろ、それを入れようとしていたらし

いんだ。

松村——ロバート・プラントとかやりそうだな。

渋谷——いや、そういうことはジミー・ペイジが好きだったらしいな。

松村——……。

渋谷——ロバート・プラントがステージのメンバー紹介のとき「無類の女好き、リード・ギター、ジミー・ペイジ」って言ったという貴重な情報も掲載されているぞ。

松村——どこが貴重なんだよ。

渋谷——バンドの本質を知る上で貴重だろう。日本についてもチケットとかポスターとか掲載されているぞ。でも、俺はこの本に掲載されていない貴重な情報を知っているぜ。

松村——日本の蛸は元気だったとかいう話じゃないだろうな。

渋谷——よく分かったな。

松村——そういう展開じゃないか。

渋谷——いや、ロバート・プラントがソープ・ランド、当時はトルコ風呂っていっていたけど、それにはまって、待合室でニコニコしながら待っている写真が雑誌に載ったんだよ。

松村——どういうバンドなんだよ。

渋谷——そういうバンドだよ。

松村——もっとまともな情報は掲載されてないのかよ。

渋谷——当然、ちゃんとした情報ばっかりだよ。ピーター・グラントの話もあるぞ。

松村——何か嫌な予感がするな。蛸は出てこないだろうな。

渋谷——出てこないから安心しろ。とにかくやり手で乱暴なマネージャーだったんだ。グランド・ファンクが前座に出たとき、やたら盛りあがって大変な騒ぎになったんだ。ピーター・グラントは頭にきて、演奏をやめさせようとしたんだけど、やめなかったんでPAの電源を切ってしまったんだ。

CamScannerでスキャン

松村——ムチャクチャやってんな。
渋谷——ブートレッグを敵視していて、ロンドンのレコード店に盗みに入ってブートレッグを全部叩き割ったんだ。
松村——犯罪じゃないか。
渋谷——そうなんだよ。一九七七年のオークランドでスタッフともめたときは暴力沙汰になって逮捕されちゃったんだ。
松村——ひどいな。
渋谷——でもジョン・ボーナムも戦いに参加して一緒に逮捕されたんだぜ。
松村——どういうバンドなんだよ。
渋谷——そういうバンドだよ。
松村——もっと創作に関する話はないのかよ。
渋谷——そういう話がほとんどだけど。
松村——だったら、そういう話を紹介しろよ。
渋谷——いや、貴重な情報を教えたくてさ。
松村——お前の貴重の基準は間違ってるよ。
渋谷——じゃあエディ・クレイマーの話だ。
松村——誰だよ。
渋谷——伝説のエンジニアだよ。こいつとジミー・ペイジでいわゆるツェッペリン・サウンドは作られたんだよ。
松村——オッ、何かまともそうな展開だな。
渋谷——だろう。セカンド・アルバムは、まあこれも有名な話だけど、いろいろなスタジオを使って、ツアーしながら録音されたんだよ。
松村——らしいな。
渋谷——だから音源がいろいろあって、ひとつのスタジオで曲のワン・セクションだけ録るなんてこともあったらしいんだ。それでいろいろなセッションを継ぎ合わせて、あのアルバムは作られているわけよ。
松村——なるほど。
渋谷——だから〝モビー・ディック〟なんかその継ぎ目が、よく聴くとはっきり分かるんだよ。凄いだろ

う。

松村――それがツェッペリン・サウンドの秘密かよ、単なる乱暴な編集じゃないか。

渋谷――エディ・クレイマーの腕だな。

松村――継ぎ目が分かるんだろう？

渋谷――そうそう、ツェッペリンは凄いよな。

松村――もういい、俺は自分で読む、重そうだけど。

渋谷――そうか、じゃあ対談は終わりということで、すし屋にでも行くか。

松村――絶対にそのオチだと思ったんだよな。

渋谷――キンメダイでも蛸でもいいぞ。でもサメは嫌だな。 **S**

注：このツアマネの本はバンド・サイドからは嘘っぱちと言われ、世間的にはトンデモ本とされているものです。

CamScannerでスキャン

ジョンジーさん、このたびは本当にお手数おかけしました

渋谷――コンニチハ、テリー・リードです。本当にツェッペリンに誘われた時に入っていれば良かった。俺なら再結成ツアーはことわらないな。

松村――またツェッペリンかよ、もう飽きたよ。

渋谷――何言ってんだ、今回は新ネタがあるんだよ。しかも凄い新ネタだぜ。

松村――ジョン・ポール・ジョーンズのインタヴューだろう。

渋谷――何だ知っているんだ。

松村――小川に言われたんだよ。どうせ渋谷はジョン・ポール・ジョーンズの自慢話をするに決まっているんだから覚悟していたほうがいいですよ、って。

渋谷――あのバカ、クビだ。

松村――ジミー・ペイジにインタヴューしたばかりなんだから、今更ジョン・ポール・ジョーンズにインタヴューして興奮することもないだろう。

渋谷――インタヴューしたばかりって、二年前じゃないか。

松村――だってジミー・ペイジ・インタヴューなんか、それこそ十年に一回できればいいというもんだろう。

渋谷――まあそうだけど、ある意味ジミー・ペイジより話を聞きたかったんだよ。もし一時間以上のインタヴューができるならアメリカでも、イギリスでも行こうと思ってたくらいなんだから。

松村――ああいう顔が好みなんだ。

渋谷――何でだよ。ジョン・ポール・ジョーンズの顔なんかどうでもいいよ。

松村――そういう言い方はジョン・ポール・ジョーンズに失礼だろう。別に悪い顔だとは思わないな。

渋谷――お前、真面目に話そうという気がないだろう。

松村——だって、お前のツェッペリン話につき合っていると、本当に疲れるんだよ。

渋谷——お前は疲れても読者は楽しんでいるからいいんだよ。

松村——まあ、そうなんだろうな。でも何でそんなにジョン・ポール・ジョーンズ・インタヴューに執着してたんだ。

渋谷——それはジミー・ペイジもロバート・プラントも肝心なところを語らないからだよ。

松村——何だよ、その肝心なところって。

渋谷——ロバート・プラントはツェッペリンの中で、それほど重要な役割を担っていなかったのでは、という話だよ。

松村——お前、その話に異常に執着してないか。逆に不気味なんだけど。

渋谷——どうしてだよ。ツェッペリン再結成ツアーが行われないのも結局そこじゃないかよ。だから凄く重要なんだよ。

松村——再結成がなかった恨みは相当根深いな。

渋谷——俺は親たからいいの。全世界十億人のツェッペリン・ファンの恨みを背負って言ってるんだ。

松村——別に、お前に背負って欲しいと思ってないし、だいたい十億人もいないだろう。

渋谷——何言ってんだ、再結成の情報サイトには全世界から四十億アクセスあったんだぞ。

松村——分かった、分かった、だからツェッペリン話は嫌なんだよ。でも、ロバート・プラント自身がそんな話なんかしたくないというのは分かるけど、何でジミー・ペイジはそこについて話さないんだ？

渋谷——ロバート・プラントに遠慮しているみたいだな。ペイジ・プラントみたいなプロジェクトもあったし、これから二人でやる仕事もあるだろうから、あえて言わないんじゃないかな。

松村——それはあるかもな、昔からジミー・ペイジは計算高いという噂があったし。

渋谷——その点、ジョン・ポール・ジョーンズは二

ユートラルだし、人もよさそうだし、いろいろ喋ってくれそうな気がするじゃないか。

松村――確かに。

渋谷――それにジミー・ペイジって、細かいことをよく憶えていないんだよ。後期のツェッペリンについて訊いても、ウスボンヤリした答えしか返ってこないんだな。極端に昔の話だと憶えているんだけどな。

松村――年寄りにありがちなパターンだよな。

渋谷――そうそう、その点ジョン・ポール・ジョーンズはしっかりしてそうじゃないか。

松村――ジミー・ペイジやロバート・プラントよりは大丈夫そうだよな。

渋谷――だから、凄く期待したわけだよ。

松村――それでどうだったんだ。

渋谷――憶えてないって。

松村――……。

渋谷――だって『聖なる館』について訊いたら、憶えてないって言うんだぜ。

松村――何を憶えてないんだよ。

渋谷――そのアルバムをだよ。

松村――そんなわけはないだろう。

渋谷――そんなわけがあるから恐ろしいんだよ。だって逆に質問されたんだぜ。

松村――何を？

渋谷――『聖なる館』って、どんな曲が入っていたんだっけ、って訊かれたんだよ。

松村――大丈夫か、ジョン・ポール・ジョーンズ？

渋谷――大丈夫なわけないだろう。いくら昔のことでもそれはないと思う。

松村――それじゃ、インタヴューは失敗だったんだ。

渋谷――そんなことなくてうまくいったんだけど、『聖なる館』にはどんな曲が入っていたっけ、は衝撃だったな。

松村――でも、そのインタヴューはツェッペリンについて話をしてくれって申し込んだものなのか？

よくOKが出たな。

渋谷――そんなわけないだろう。今度、デイヴ・グロールと新しいバンドを組んだんで、それについての取材だったんだ。

松村――どれくらいのインタヴューだったんだ？

渋谷――四十五分だよ。

松村――そのうちツェッペリンについてはどれくらい話したんだ？

渋谷――三十五分。

松村――……。

渋谷――だから、いろいろ話が聞けて画期的な内容になったぞ。

松村――よくジョン・ポール・ジョーンズが怒らなかったな。

渋谷――当然、事前にそういうものだという根回しは、レコード会社の人がいろいろやってくれたんだよ。大変だったみたいだぜ。

松村――そりゃそうだろう。

渋谷――かなり説得に時間かけたみたいだよ。

松村――お前の執念の為に周りは迷惑しているんだよ。通訳は誰がやったんだ。

渋谷――高見がやったんだけど、大変だったみたい。ジョン・ポール・ジョーンズに、君もよく頑張ったね、って言われたらしいぜ。良かったよな、ほめられて。

松村――それほめているんじゃないから。同情されてんだよ。こんな質問ばかりやらされてかわいそうだな、って思われたんだよ。高見も大変だったけど、やっぱり一番大変だったのはジョン・ポール・ジョーンズだったよな。

渋谷――何言ってんだ、ロック史的な謎がこれによって明らかになったんだから、凄く貴重なインタヴューだったんだよ。でも残念だったな、まだいろいろ訊きたいことがあったんだけどな。

小川――社長は、まだ他に質問を二十個以上用意していたんですよ。そんな数は無理だと言っているの

に、どんどん質問作るんですよ。ロバート・プラントはどこで休んでたとか、レコーディングとかリハとかでロバート・プラントが居なかったのはどこかとか、詞を書いていない曲はどれだとか。

松村――お前、ロバート・プラントに何か個人的な恨みとかあるのか？

渋谷――よし、次はゼム・クルックド・ヴァルチャーズの来日の時に残りを訊こう。とりあえずジョン・ポール・ジョーンズは、記憶力はイマイチだけど凄くいい人だというのは分かったから、別の作戦を考えよう。

松村――もうお前のインタヴューは絶対に受けないと思うな。

小川――僕もそう思います。

渋谷――クビにするぞ、お前は。**S**

松村——お前、CD、どれぐらい持ってる?

渋谷——分かんない。

松村——だいたいでいいからさ。

渋谷——数えたことないから、分かんない。

松村——そりゃあそうだろうけどさ、おおよそは分かるだろ。

渋谷——しつこいな、分かんないって言ってんだろ。

松村——……。

渋谷——そんな俺の持ってるCDの数を知って、どうしようっていうんだよ。

松村——……。

渋谷——いじけるんじゃないよ、いい歳をして。

松村——……。

渋谷——分かったよ、分かったよ。会社の倉庫に数万枚、家に数千枚ってとこかな。

松村——また、アバウトだな。

渋谷——しょうがないだろ、普通CDの数なんか分かんないだろ。お前は分かってるのかよ。

松村——今回、引っ越しして、だいたい三千枚から四千枚だと思うな。
渋谷——たいした数じゃないじゃないか。
松村——結局、何年かに一度ぐらい、もう無理だってなって、三百枚ぐらいずつ捨てたんだよ。
渋谷——なんで、捨てるんだよ。
松村——だって、置く場所がないだろ。三つあるCD棚からあふれて、部屋のあっちこっちに数百枚の山が出来て、廊下にも並んで、もうどうしようもないじゃん。
渋谷——お前は会社の倉庫はないのか。
松村——ないわ、そんなもん。
渋谷——可哀そうだな。
松村——うるさいよ。それでも片づかないから、このさい千枚捨ててみた。
渋谷——それで、片づいたのか。
松村——まあ、いちおうはな。でも、また増えちゃうんだろうな。また、捨てなきゃなんない。嫌だな。
渋谷——会社の倉庫持ってない奴は、大変だな。
松村——普通持ってないよ、そんなもん。だいたい、普通のオヤジっていうのは、家の中で一部屋しか自由にならないから、適正なCDの数って二千枚ぐらいじゃないかな。これから六十歳になるまでの俺の目標は、CDを二千枚にすることだ。決めたぞ。
渋谷——なんか、情けなくないか。
松村——昔、所有するLPを五百枚と決めてた人がいてな、一枚買ったら一枚処分して、いつも五百枚だったたっていうんだよ。そのときは変な奴って思ってたけど、今考えると正しい奴だったんだな。
渋谷——正しいとは言わないだろ。
松村——で、お前はどういうふうに整理してんの？
渋谷——どういうふうにって、ABC順だろ普通は。
松村——っていうことは、一番最初はABBAなのかよ。
渋谷——分かんないけど、そうなんじゃないの。
松村——四十年もロックの仕事をしてきた人間のC

D棚の最初がABBAで、いいのかよ。
渋谷——いいも悪いもないだろ。だけど、そうなると、次はAC／DCじゃないのか。
松村——AC／DCの前にABBAがいて、いいのかよ。
渋谷——うるさいよ。じゃあ、お前はABC順じゃないのかよ。
松村——もちろん。俺はエラい順じゃ。
渋谷——なんだよ、エラい順って。
松村——まず、ビートルズ。次に、ジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スター。それからビートルズ関係で、ジョージ・マーティン、ヨーコ・オノ、ジュリアン・レノン。バッドフィンガーはいつも迷う。
渋谷——面倒くせえ奴。
松村——レコード棚は三つあって、一番エラいのは四百枚ぐらいしか入らないんだけど、その半分の二百枚はビートルズ関係だな。
渋谷——棚にもエラいエラくないがあるのかよ、面倒くさい奴。
松村——だから、俺はAC／DCの前にABBAを並べたりはしないぞ。一枚目はいつも『プリーズ・プリーズ・ミー』じゃ。引っ越しの翌日、スピーカーから最初に流れたのも"アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア"じゃ。ワン、ツー、スリー、フォー！
渋谷——やめろ、もう。だけど、片づけられないんなら、千枚といわず、二千枚でも三千枚でも捨てちゃえばいいじゃないか。必要なら、CD屋に行けば買えるじゃないか。そこが、分かんない。
松村——あのな、CDだって廃盤になるんだぞ。紙ジャケなんか、みんな限定だぞ。
渋谷——そりゃあ、そうだけど。
松村——だけど、紙ジャケって困るよな。そのバンドはワン・セットあるのに、またワン・セットだもんな。はじめは薄くていいと思ってたけど、結局ツ

ー・セット分の場所取るんだよな。ちょっと、悩んじゃうよな。

渋谷――悩むな、そんなことで。

松村――たぶん、ジョン・レノンって、四セットあると思うんだ。最初のやつ、再発のやつ、リミックスリマスター、紙ジャケ。困るよな。まさか、ジョンを捨てるわけにもいかないし。

渋谷――そりゃあ、ワン・セットありゃあいいだろ。

松村――それに、CDシングルなんて、発売一か月ぐらいでなくなっちゃうんだぞ。最近、日本では外国のバンドのCDシングルなんて作らないから。出そうだって思ったら、外資系のCD屋回らないとな。タワーとかHMVとか。

渋谷――いい歳して、まだCD屋回ってんのかよ。

松村――何言ってるんだよ、いっぱいいるわオヤジが。さっきタワーですれちがったオヤジが、HMVでも目をギラギラさせてるぞ。

渋谷――CD屋はロック・オヤジの集会場か。

松村――俺はポールのCDシングル三十枚ぐらい持ってると思うんだけど、これから集めるのはまず無理だろうな。日本で買えなかったのを、パリで買ったこともあったからな。ジョンの別れた奥さんのシンシアが〝悲しき天使〟歌ってるCDもあるぞ。こんなのも、一度手放したら、二度と手に入らないだろう。ジョンが〝ヤー・ブルース〟歌ってる、ローリング・ストーンズの『ロックンロール・サーカス』なんかも、もうないんじゃないかな。そんなもん、捨てられないだろ。

渋谷――そういうのを捨てろって、言ってるわけじゃないだろ。いつでも買えるものを捨てろって、言ってるんだよ。

松村――レッド・ツェッペリンとかか。

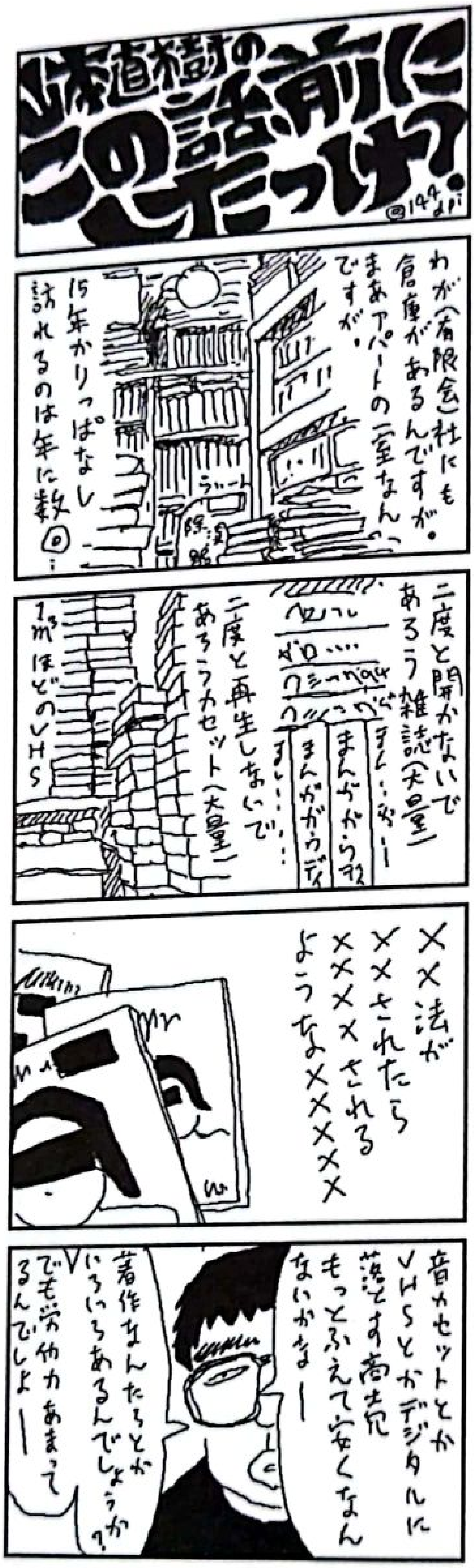
渋谷――捨てるな、ツェッペリンを。だけど、そういう貴重盤限定盤っていったって、しょっちゅう聴くわけじゃないだろ。

松村――そりゃあ、そうだよ。シンシアのCDなん

CamScannerでスキャン

か、一回聴いたらもう二度と聴かないよ。
渋谷――じゃあ、いらないじゃないか。
松村――何言ってんだよ。ジョンの最初の奥さんだぞ。
渋谷――結局、そういうことで捨てられないわけか。
松村――ポールのCDシングルだって、二〜三回しか聴いてないよ。だけど、並べて眺めてニヤニヤするんだよ。

渋谷――気持ち悪いな。
松村――ロック・ファンなんて、みんな気持ち悪いわ。
渋谷――いちおう訊くけど、お前の棚ではツェッペリンはどこにあるんだ?
松村――マウンテンなんかといっしょに、奥にあるんじゃない。
渋谷――死ね、お前は! **M**



CamScannerでスキャン

渋谷陽一、海外誌の年間ベスト・アルバムに物申す！

渋谷――コンニチハ、ヤン・ウェナーです。アニマル・コレクティヴ選んでいればいいってもんじゃないだろう。

松村――なんでヤン・ウェナーなんだよ。

渋谷――『ローリング・ストーン』の社長なら、きっとアニマル・コレクティヴをそんなに好きじゃないと思うんだ。

松村――よくわかんないけど、どういうことだよ。

渋谷――いや、一月になっていろんな海外メディアの二〇〇九年のベスト・アルバムが発表されたんだけど、どれを見てもアニマル・コレクティヴばっかりで、それってどうなんだよと思ってさ。

松村――お前はいいと思わないのかよ。

渋谷――いや、いいと思うよ。でも松村も言っているように、アニマル・コレクティヴは時代性を反映して、音楽的な質も高いけど、ロックやポップ・ミュージックの全体性を担う存在かといえば、そうじゃないと俺も思うな。

松村――言ってねえよ、そんなこと。

渋谷――だから松村も言っているように、みんなが

一位に選んでトップになったというよりも、みんなが三位とか四位に選んだんで、結果として一位になってしまったという感じだと、俺も思うんだよ。

松村――だから、言っていないんだよ、そんなこと。

渋谷――だって『MOJO』と『UNCUT』というイギリスのどちらかといえば懐古的なロック雑誌のトップ・テンでも、アメリカの若いロック・オタクで盛りあがっているウェブ・サイトのピッチフォークのトップ・テンでも、両方ともに一位なんだぜ。

松村――お前はトップ・テンに選ばないのかよ。

渋谷――選ぶと思うけど一位にはしない。

松村――結局、選ぶんじゃないかよ。

渋谷――いや、選ぶんだけど、一位はないだろうって話だよ。

松村――選んでないならともかく、選ぶんだったら文句言っても説得力ないだろう。

渋谷――確かに。でも海外メディアのトップ・テンをざっと見ると、アニマル・コレクティヴが入っていないのは、『ローリング・ストーン』と『ケラング』だけだな。

松村――『ケラング』はメタル雑誌だから当然だろうけど『ローリング・ストーン』は入れそうな感じだけどな。

渋谷――そうだよな。まあ十四位には入っているんだけどな。

松村――『ローリング・ストーン』の一位は何なんだ。

渋谷――これがいきなりのU2『ノー・ライン・オン・ザ・ホライゾン』なんだけど、これもどうなんだよ。

松村――お前の場合、何でも文句があるんじゃないかよ。

渋谷――しかしU2は凄くないか。他にU2入れているメディアないぞ。

松村――『ロッキング・オン』は四位だぞ。

渋谷――『ロッキング・オン』もアントニー・アンド・ザ・ジョンソンズを選んでないっていうのはどうな

CamScannerでスキャン

んだ。

松村——お前が社長の会社で出してる雑誌だろう。

渋谷——それだけ編集部は自由にやっているんだよ。小沢一郎も俺を見習うべきだよな。

松村——見習わなくていいけど、それならお前は何なら納得するんだよ。

渋谷——まあ何でもいいんだけど、『ローリング・ストーン』とか『ロッキング・オン』とかのはまだ健全だと思うわけ。グリーン・デイとかエミネムとか普通に入っているし、まだシーンの全体像を反映しているよ。

松村——他は違うんだ。

渋谷——違うだろう。十年後、二十年後、二〇〇九年を語るとき、アニマル・コレクティヴのアルバムがこの年を象徴していたとはならないと思うぜ。まあ、もともとベスト・テンとかアルバムの星付けとか大嫌いで、そういうことは今でも俺個人はやっていないんだけど、凄く違和感があるな。

松村——ベスト選んだって言ってたじゃないか。

渋谷——あれはアホな大貫と伊藤をゲストに招いて二〇〇九年を振り返る特番をやったらあまりにもアホなチョイスをあいつらがしてきたんで、しょうがなく選んだんだよ。伊藤なんか毎年、ドリーム・シアターがベストなんだぜ。あいつにとってロックは毎年ドリーム・シアターが象徴してるんだから。

松村——お前は何を選んだんだ。

渋谷——グリーン・デイとかエミネム、ガールズやアントニー・アンド・ザ・ジョンソンズなんかだな。

松村——それって、お前の言う全体性を象徴してるわけかよ。

渋谷——そう突っ込まれると難しいけど、少なくともグリーン・デイとかエミネムのアルバムが、他のメディアがお約束のように選んでいる作品と比較して、重要度が低いとは思えないよな。

松村——じゃあ、『ローリング・ストーン』や『ロッキング・オン』以外ではなぜ無視されているんだ？

渋谷——選んでもカッコよくないからだよ。お約束のように入っているアニマル・コレクティヴ、ダーティー・プロジェクターズ、グリズリー・ベア、ヤー・ヤー・ヤーズ、何でもいいけど、とりあえず選んでカッコ悪くないものに票が集中して、結果二〇〇九年の全体性が見えないトップ・テンになってしまうわけ。何かすべてが業界人みたいなチョイスで不気味だよな。

松村——確かにビートルズってそうだったよな。

渋谷——そうそう、ビートルズとか手塚治虫とかそうなんだよ。

松村——手塚治虫は知らないけど、ビートルズってそうだったよな。今でこそ神様だけど、現役時代はすべてのアルバムがそれこそ年間ベスト・ワンに選ばれて、これから百年間語り続けられるだろう、なんて感じじゃなかったよな。

渋谷——グリーン・デイ、エミネム、パール・ジャム、ジェイ・Zといった二〇〇九年に力の入った作品を出したアーティストは本当にムカついていると思うぜ、こういうトップ・テン見て。手塚治虫だって、決して評価に恵まれた作家ではなかったからな。

松村——亡くなる前なんか、ほぼ現役感がなくなってたよな。

渋谷——そうそう、連載漫画も雑誌の後ろの方に掲載されていて、俺なんかファンだったんでムカついていた記憶があるな。作品としてちゃんとしていたのに。

松村——確かにお前は順位とか点数を異常に嫌っていたよな。

渋谷——ああいうことをやる奴って、そういうことにトラウマがないんだよ。評論家とか勉強だけはできそうじゃないか。

松村——お前だって評論家だろう。

渋谷——まあ、そうだけど、俺なんか勉強できなかったから点数とか順位付けられると異常にムカつくんだよな。中卒のお前よりはいいかも知れないけど。

松村――だから、百回言ってるけど夜間高校卒なの。

渋谷――ちゃんとした作品やアーティストがこうした形での評価だと、不当に低く扱われる危険があるよな。ロック評論家としての俺みたいなもんだな。

松村――絶対にその話になると思ったんだよな。もう帰るぞ俺は。

渋谷――松村が言うように、ロック評論家としての渋谷陽一はあまりにオンリー・ワンな実力と実績を残しているために、逆に正当に評価されないという実に不幸な存在だと、俺も思うよ。お前が言うように、渋谷陽一の本当の偉大さや業績は、それこそ死んでから何年か経って分かるものだと、俺もそう思うよ。

松村――俺は死んでも、そんなアホなことは言わない。**S**

還暦目前、人生の晩秋、いま思う「吾が人生」……

渋谷――コンニチハ、ピート・ベストです。今の俺を幸せじゃないと、誰にも言わせないぜ。

松村――何で今更ピート・ベストなんだよ。

渋谷――最近、ピート・ベストの出てる映画を観たんだよ。

松村――そんな映画あったか？　だいたい役者なんかできないだろう。

渋谷――いや、芝居はしなくていいんだ。

松村――セリフないんだ？

渋谷――セリフはあるけど芝居はしなくていいんだよ。

松村――意味が分かんないんだけど。

渋谷――いや、その映画での役はピート・ベストの役だから、まんまでいいんだ。まあいわゆるカメオ出演だな。

松村――でもカメオ出演って、基本的に有名人だから成立するんで、ピート・ベストがピート・ベストのまま出演できる映画なんてあるのかよ。

渋谷――それがあるんだよ。

松村――どんな映画なんんだ。

渋谷――所属していたバンドが、メジャー・デビューする前にクビになったドラマーの話だよ。

松村――まんまじゃないか。

渋谷――そしてそのバンドはどんどん人気が出て世界的なビッグ・バンドになるんだけれど、クビになった主人公はずっと地味な人生を送るんだ。

松村――全く洒落になってないと思うけど。ピート・ベストの人生そのまんまだろう。

渋谷――早い話がピート・ベストをモデルにした映画なんだよ。ひょっとすると知らない読者もいるかも知れないので言っておくと、ピート・ベストはビートルズのオリジナル・メンバーで、デビュー前バンドをクビになりその後釜として加入したのがリンゴ・スターです。

松村――よく出たな、そんな映画。

渋谷――まあ短いシーンに登場するだけなんだけどな。主人公が自分がいたバンドの巨大な看板の前で、何故か通りすがりのピート・ベストに、このバンドは昔自分が所属したバンドなんだという話をするんだ。するとピート・ベストが自分もちょっと有名なバンドにいたことがあるんだ、って答えるシーンだけなんだ。

松村――確かに演技はいらないかもな。でもその映画面白いのかよ。

渋谷――つまらない。B級というよりC級のコメディーだった。結局、その主人公が甥っ子の高校

生とバンドを組んで、自分を追い出したバンドを見返すってストーリーなんだけど、あまり笑えなかった。

松村——凄いストーリーだな。

渋谷——いくら馬鹿なコメディーっていってもストーリーに無理があり過ぎた。追い出したバンドがボン・ジョヴィみたいなキャラで、それもあまりにも類型化されていてアホらしかったな。でも一番面白かったのは特典映像で、それが主人公をやった役者がインタヴュアーのピート・ベスト・インタヴューなんだよ。

松村——そんなもんまで出てるんだ。

渋谷——そうなんだよ。それもかなり長いインタヴューで、それなりに面白いんだ。

松村——どんなことを喋ってんだ。

渋谷——まあ、いろんなことを喋ってるんだけど、一番印象的だったのは、いろいろあって自分の人生には複雑な思いがあるけど、今になってみれば、これはこれで幸せだなと思うという発言だったな。こうなってみると誰が勝ったのか分からないから、みたいなことを言っていて、本当にそうだと思ったよ。良かったな松村。

松村——何で俺が良かったんだよ。

渋谷——いや、『ロッキング・オン』のピート・ベストとしては感慨深いんじゃないかな、と思ってさ。

松村——どこがピート・ベストなんだよ。でも本音かも知れないよな。俺がピート・ベストかどうかは知らないけど、お前見てると何だか悲惨だもんな。編集部の奴に聞くと、いつも会社にいるし、全く休んでないんだろう。

渋谷——十年間、風邪で休んだことも一日もないぞ。

松村——それ自慢じゃないぜ。カゼくらいひけよ。

何かウチの社長はとりつかれたみたいにジムに通っているんですけど大丈夫でしょうかって、小川が言ってたぞ。

渋谷——大きなお世話だ。健康に気を使っているんだよ。いいことじゃないか。

松村——ジムから帰って来るとグッタリ疲れていて十歳くらい老け込んでいるんで死ぬんじゃないかと心配だって、小川が言っていたぞ。

渋谷——俺はジムで何をしてるんだよ。殺す小川。

松村——社員に心配かけるなよ。ジムやめたら？

渋谷——やめるか、アホらしい。

松村——毎日、仕出しの弁当食べているんだって？

渋谷——そうだよ。忙しいから外に食べに行けないんだよ。

松村——しかも弁当食べながら会議とか打ち合せしてるんだろう？

渋谷——時間ないから合理的にやっているんだよ。いいアイディアだろう？

松村——小川の顔見ながらメシ食べてうまいか？

渋谷——マズイ。

松村——メシくらいちゃんと食べろよ。しかも必ず納豆と豆腐を一緒に食べているんだって？

渋谷——栄養のバランスを考えているんだよ。

松村——小川が、社長はあんなに豆ばっか食べていて大丈夫でしょうか、って心配していたぞ。

渋谷——大きなお世話だ。俺が豆食べようが草食べようがいいじゃないか。放っておいてくれ。

松村——草食べてるとは言ってないけど、行動が変にエキセントリックになっていると思うな。とりつかれたようにジム行って、毎日納豆と豆腐食べていて、大丈夫か？

渋谷——何か言われているうちに不安になってきた。

松村——仕事をやらなくちゃ、そのためには健康

でなくちゃならないという思い込みにとりつかれているんだよ。そんな人生楽しいか？

渋谷――楽しくない。そうなんだよ、ピート・ベストは本当に幸せそうだったんだよ。その誰が勝ったか分からないという言葉も、全然負け惜しみな感じじゃなかったんだよ。今でもバンド活動してツアー回っているらしいんだけど、楽しそうだったな。

松村――そうだろう。だからお前も人生考えた方がいいぞ。

渋谷――でも、お前はピート・ベストなのに全然幸せそうでも楽しそうでもないぞ。

松村――それこそ大きなお世話だ。俺は幸せだし、毎日楽しいよ。少なくともお前みたいな食事もまっとうにできない、何だか強迫観念にとりつかれた人生よりはましだよ。

渋谷――何だか、だんだんそんな気がしてきた。

松村――お前、去年花見とかしたか？

渋谷――ほとんどしてない。

松村――俺は何回も桜見ながら酒飲んだぞ。

渋谷――駅から会社までの道が花見道路になっていて、桜の季節は歩きにくいんで早く散らないかと思ったりしてるぞ。俺はヤバイぞ。

松村――やっと気付いたか。

渋谷――リンゴの新作に〝ジ・アザー・サイド・オブ・リヴァプール〟って曲があるじゃないか。

松村――若い頃のことを歌ったやつだよな。

渋谷――そうそう。あれって二〇〇八年にリンゴが軽く冗談で言った、リヴァプールに対する距離感のある発言から起きたバッシングがきっかけでできた気がするんだ。

松村――結構な騒ぎになって、植木でできたリンゴの人形の首が切られたりしてたよな。

渋谷――リンゴにはショックだったと思うんだ。

この歌は今はリヴァプールでくすぶっているけど、いつか成功してこの街を出て行くんだって歌じゃないか。
松村——ロックの定番のテーマだよな。
渋谷——それを七十過ぎたビートルズの元メンバーが歌っているっていうのは、本当にロックって青春の歌だなっていう気がするし、リンゴの故郷に対する複雑な思いを感じるな。ビートルズだったから人形も作られたし、ビートルズだからその首を切られたわけじゃないか。
松村——お前も人生考えて、今年は一緒に花見しよう。お前は酒飲まないから、納豆と豆腐のうまいの用意してやるよ。
渋谷——何か嬉しくない……。**S**

注：『ROCKER 40歳のロック☆デビュー』のこと。

アンガス・ヤング五十四歳、今日もズボンを下ろします

渋谷――コンニチハ、アンガス・ヤングです。九年前はさいたまスーパーアリーナはなかったぜ。

松村――AC／DC、九年前は横浜アリーナだったよな。

渋谷――今回はスーパーアリーナ二デイズで、しかもソールドアウトだぜ。まあ、二日目はソールドアウトではなかったけど。

松村――でも二日間は凄いよな。

渋谷――凄い。この勢いは全世界的なもので日本はどちらかと言えば世界の勢いと比較すれば地味な方だよ。

松村――どうしてそんなに盛り上がっているん

だ？

渋谷――変わらないからだろう。

松村――それかよ。

渋谷――だってまったく変わらないいんだぜ。アンコールで大砲出て来たし。九年前の横アリも大砲だったぜ。

松村――AC／DCの大砲はキッスの口から火を噴く演出と一緒で、お約束だろう。

渋谷――というか全てがお約束なんだよ。冷静に考えたらアンガス・ヤングの半ズボンも無理矢理だよな。

松村――いくつだっけ？

渋谷――五十四歳だよ。

松村――無理矢理だな。

渋谷――でも、誰もそれを問題にしないし、問題にする方が問題だという認識が出来上がっているところが凄い。もともとあの半ズボンは一種のワルガキ・イメージのコスプレだったわけよ。

松村――そうだよな。

渋谷――大人でもないし、若者でもなく、子供なんだという設定というかメッセージが面白かったわけじゃないか。それをほぼジイサンに近くなってもやっているというのが無理を超えてシュールだよ。

松村――オバサンになった森高が〝私がオバさんになっても〟を歌うみたいなもんだよな。

渋谷――それ全然違うんじゃないか。

松村――そうかな。

渋谷――だいたいアンガス・ヤングすっかりハゲちゃったしな。いよいよ半ズボンとの組み合わせはシュールだよ。

松村――でも半ズボンじゃないアンガス・ヤングはないだろう。キッスがメイクしないで出て来るみたいなもんだろう。

渋谷——確かに。それでやっぱり上半身裸になったし。

松村——それもお約束だよな。

渋谷——半ズボン、上半身裸でギターを弾くというのはアンガス・ヤングの記号性で不二家のペコちゃんが舌を出しているのと同じだと思うわけよ。

松村——ペコちゃんかよ。

渋谷——そうそう。でもペコちゃんは人形だからいいけど、アンガス・ヤングは人間だから問題だよな。

松村——言ってる意味が分からないんだけど。

渋谷——だからペコちゃんは人形だから記号性がキープできるけど、アンガス・ヤングは人間だから老化していくわけじゃないか。

松村——当然そうだよな。

渋谷——そうなると、半ズボンも上半身裸もなかなか厳しいわけよ。

松村——でも成立しているんだろう。

渋谷——そうなんだよ。そこが凄い。キッスはメイクしてるから老化しても分かんないけどアンガス・ヤングはメイクしてないからな。

松村——ハゲてきたしな。でもどうやってキープしているんだよ。

渋谷——音楽の普遍性と肉体性によってだよ。とにかく動くんだよ。例のチャック・ベリー・スタイルでひたすら動いているんだ。あり得ない運動量だと思う。途中で死ぬんじゃないかと心配になるくらい動くんだよ。本編ラストはほとんどアンガス・ヤングのギター・ソロ・ショーだったな。ギター・ソロを弾きながらステージ中を走り回って、最後には倒れて終わるんだよ。

松村——凄いな。

渋谷——つまり、その肉体性によって半ズボンも上半身裸も、全てがリアルになるわけよ。あれが

CamScannerでスキャン

動かないアンガス・ヤングだったら駄目だったと思う。当然、裸になる以上太っていては話にならないし、そうした意味でも、自分の記号性キープに命を懸けているね。

松村――六十近くになって良くそんなに動けるよな。

渋谷――別に音楽的には走り回る必要はないわけよ。

松村――まあな。

渋谷――だからたいていのバンドは加齢と共に動かなくなっていくじゃないか。それを非難する奴もいないし。でもAC/DCは違うんだよ。ブライアン・ジョンソンなんか空を飛んだぜ。

松村――そんなわけないだろう。

渋谷――本当に飛んだんだよ。巨大なベルが降りて来て、それに飛び付いてぶら下がりながらベルを鳴らすという演出があるんだよ。五メートルは飛んだな。一瞬CGかと思ったぜ。

松村――五メートルも飛んだら鳥だろう。

渋谷――いや、それがAC/DCなんだよ。まあ五メートルはないにしても六十歳を超えたジイサンの動きじゃなかったよ。とにかく必要以上に肉体を酷使して、それに耐えてみせるところからロックのリアルを生んでいくんだよ。

松村――それってロックのリアルなのか?

渋谷――ロックのリアルだろう。

松村――何かサーカスみたいだな。

渋谷――そうそう、サーカスなんだよAC/DCのロックは。というか、当たり前なんだけどまず音楽が凄いわけ。あのロックの正義とはこれだという感じのギター・リフを主体にしたシンプルだけど誰も真似できないAC/DC・スタイルの強力なパワーが持つ普遍性が一番偉大なんだよ。ただ、それをライヴにおいて実演するのには強い肉

体性が必要なわけ。ただギター弾いて歌えばいいというもんじゃないわけよ。まさにサーカスになってないとAC/DCのグルーヴは生まれないんだよ。AC/DCもどこかで分かれ道があったと思うんだ。いわゆる年相応なスタイルで収束していくことも可能だったと思うんだ。あんなに動くステージではなく、もっと普通にやる方向もあったし、ひょっとするとやったこともあるかも知れない。でもAC/DCのロックにならなかったんだと思うんだ。

松村――分かんないぜ、やってみないと。

渋谷――そうかも知れないけど、俺は駄目だと思う。つまりAC/DCのロックは肉体性が失われた時にAC/DCのロックではなくなってしまうんだよ。

松村――ツェッペリンの時もそんなことを言ってなかったか、お前。

渋谷――言っていた。ジミー・ペイジとロバート・プラントとジョン・ポール・ジョーンズが集まってツェッペリンの曲をやればツェッペリンが降りて来るかといえば降りて来なかったわけよ。それに気付いた時、初めてツェッペリンはツェッペリンになれたんだよ。

松村――この前の再結成の時だよな。

渋谷――そうだよ。AC/DCはそのメカニズムに気付いていて、あんなに頑張っているわけよ。一時、セールスが落ちた時があったじゃないかAC/DCも。

松村――そうなのか？　いつも売れている印象があるけどな。

渋谷――少し前、それこそサーカスから降りそうになった時期があって、その時は少しセールスが落ちたんだ。でもサーカスとしてのAC/DCに戻ったら爆発的に売れ出したんだ。それこそスト

CamScannerでスキャン

ーンズでさえツアーには人は来るけどアルバムはそこそこしか売れない状況で、今のAC／DCのレコード・セールスは凄いよ。ほとんどの国で最新アルバムは一位になったからな。今、思ったけどやっぱり動くことは音楽的にも重要なんだよ。あの肉体性が音楽的なリアルとアクチュアリティーを支えているんだよ。

松村――でも、そのサーカスみたいなパフォーマンスをいつまで続けられるんだ？

渋谷――問題はそこだよな。次の来日が九年後だとすると、ブライアン・ジョンソンは七十二歳だから、ちょっと飛べないかもな五メートルは。

小川――社長、さいたまスーパーアリーナは九年前に、もうあったんですけど。

渋谷――……。

松村――俺は帰るからな。**S**

CamScannerでスキャン

先月は都合により休載してすみませんでした

渋谷——コンニチハ、チャーリー・セクストンです。ギター・アイドルの僕がディランのギタリストになるなんて、誰も想像しなかったと思うぜ。

松村——ネタ古くないか。それにチャーリー・セクストンがギター・アイドルだったことを憶えている奴なんているのか？

渋谷——俺は憶えているぞ。六本木のＷＡＶＥでディスプレイされていたことも憶えているぞ。

松村——六本木のＷＡＶＥなんか、もう店そのものがないじゃないか。

CamScannerでスキャン

渋谷――懐かしいな。空いてていい店だったのに。

松村――空いていたからつぶれたんだろう。

渋谷――確かに。まあ、今はどこの輸入レコード屋も空いているけどな。

松村――ディラン・ネタで話をするなら先月号のタイミングだったんじゃないか。

渋谷――まあそうなんだけど、あまりに忙しくて先月は休んでしまったからしょうがないだろう。人気連載だから休みたくなかったんだけどな。

松村――小川が、休んでも読者からの反応はほとんどなかったと言っていたぞ。

渋谷――俺達の読者はおとなしいから、一回ぐらい休んでも反応しないんだよ。

松村――何を根拠におとなしいと言っているんだか分からないけど、人気ないんじゃないのか、マジな話。

小川――アンケートでの人気は凄く高いけど、なかったらないで気にしないのかも知れないですね、読者は。二人とも年寄りなんで死んだんじゃないかと心配するのかと思ったけど、そうでもないですね。

松村――お前、いつまでコイツを渋松の担当にしておくんだよ。

渋谷――小川以外、誰も担当したがらないんでしょうがないんだよ。

小川――最後まで看取るので任せて下さい。

渋谷――ウルサイ。向こう行ってろ。でもディラン凄かったな。

松村――全公演のチケットを買ったらしいな。

渋谷――東京の全公演のを買ったけど、行けたのは三回だけだった。まあ、三回観ることができたから幸せだったけどな。

松村――しかし何でライヴ・ハウスなんだ。

渋谷――それはライヴを観ると分かったと思うけ

ど演奏スタイルがその規模を想定したものなんだよ。というか、ライヴ・ハウスじゃないと駄目なんだよ、こういうライヴは。

松村――言ってることがよく分かんないぞ。

渋谷――いや、ディランのライヴを観た後にあまりにも感動して原稿書こうと思ったんだ。

松村――書けよ。

渋谷――そうなんだけど、時間がなくて書けなくて、ちょっといいか今回は俺が喋って。

松村――いいけど、お前はいつも喋っているぞ、この渋松では。

渋谷――このライヴはネヴァーエンディング・ツアーというタイトルで延々続いているもんなんだよ。

松村――そうらしいな。

渋谷――今回、このライヴを観て、このスタイルは究極のものだというのが分かったな。ロックのライヴの究極のスタイルなんだよ。

松村――どの辺がなんだよ。

渋谷――だって、まずディランなんてライヴやる必要ないわけよ、いわゆる外因的には。今更ライヴやったからって評価が変わるようなポジションにいるわけでもないし、無論経済的にどうしてもやらなくてはならないわけでもないし、死ぬまで何もやらなくても伝説の人として何百年も語り継がれていくだろうし、豊かな暮しもできるわけじゃないか。

松村――確かに。

渋谷――にもかかわらず、日本みたいな極東の島国にやって来て、ライヴ・ハウスで毎日のように演奏して、まるで新人バンドみたいに、十二公演もやるんだぜ。

松村――新人バンドは、十二公演もやれないけどな、客が来ないから。

CamScannerでスキャン

渋谷——確かに。でもやるわけよ。そこに全ての本質があると思うんだ。

松村——演歌歌手みたいだよな。

渋谷——そうなんだよ、さすが松村。まさにそういうことなんだと思う。

松村——本当かよ。

渋谷——だって、いつもステッチの入った衣装着てたぜ。

松村——それが演歌なんだ。

渋谷——そうだよ。何か闘牛士みたいだったぜ。帽子かぶってたし。

松村——帽子はいつもかぶってるじゃないか。

渋谷——まあ、そうだけど。バンドもちゃんと統一した衣装着ていて、スーツもテカテカして演歌っぽかったぜ。俺なんか、観る前は凄くアートなものを勝手に想像していたわけよ。ライヴ・ハウスだし、地味でヘヴィーなものになるんだろうな、とか思ってたら、いきなりキャバレーの箱バンみたいなバックに演歌歌手みたいなディランで、かなりインパクトあったな。

松村——でも、ライヴはアートなもんだったじゃないか。

渋谷——まあな、世界で一番アートなものだったけど、それは結果であってディランはそれを目的にしていないと思う。ディランがやろうとしたのは誠実なエンターテイメントなんだよ。毎日、演歌歌手でもクラブ・シンガーでも、あるいは演芸場の芸人や落語家でもいいけど、仕事でお客さんを楽しませる職業の人間がステージに向かう姿勢、それと同じ姿勢でステージに臨んでいるんだと思う。だからちゃんとピカピカした服を着て、お客さんの前でハレの姿で登場するわけよ。

松村——まさに闘牛士なんだ。

渋谷——そうそう、闘牛士がジーンズだったら牛

は怒るだろう。

松村――闘牛士は牛を怒らせるのが仕事だけどな。

渋谷――……。

松村――続けろよ。

渋谷――ライヴは毎日、ほぼ定刻の七時に始まって本編十四曲、アンコール三曲という形でアンコール曲はいつも同じなんだ。だから終演時間もほぼ同じ。

松村――営業っぽいよな。

渋谷――安定したパフォーマンスをするにはそれがベストなんだと思う。とにかくほぼ毎日演奏するからペースが大切なんだよ。今日の客に対して誠実であると同時に、明日の客に対しても誠実であろうとしているんだよ。夕方になると衣装に着替えてステージに立ち、しっかりとパフォーマンスをして、それを何日かやって、次の街に向かう、それを延々続けているわけだよ。何十年もアーティスト活動を続けていくうちに見つけ出した、自分が表現者として健全にいられる最良の生き方がそれだったんだと思う。凄いことだと思うな。

松村――この形で全世界を回っているんだろう。

渋谷――日本の次は韓国だったらしいな。

松村――アンコールは同じでも本編は毎日違っていたしな。

渋谷――そうなんだよ。結構、昔の代表曲をしっかり演奏してくれるし、最新アルバムからほとんどやらなかったのも凄かったな。そして言い古されたことだけど、どんな古いスタンダード・ナンバー化した曲も、まるで初めて歌われる新曲みたいに聴こえるのが凄い。毎日曲が違っても、マニアックなナンバーとポピュラーなナンバーのバランスはしっかり守られているし、全てがちゃんとエンターテイメントしているんだよ。

松村――アンコール曲が変わらないのも何か本編

がそれだけ毎日変わっているのを考えると凄いよな。

渋谷――まさにそれがディランなりのエンターテイナーとしての素晴しさだと思う。アンコール1曲目は必ず〝ライク・ア・ローリング・ストーン〟で、ライヴのラストは〝見張塔からずっと〟という決まり手をどこまで誠実にやり抜くか、ということに賭けているんだと思う。そこでディランが目指しているのは、過去最高の〝ライク・ア・ローリング・ストーン〟を歌うことなんだよ。

松村――俺は一回しか観てないけど、お前は三回、そのアンコールを観たわけだよな。どうなんだよ。

渋谷――分かっていても〝ライク・ア・ローリング・ストーン〟のイントロが鳴ると鳥肌が立つし、〝見張塔からずっと〟は毎回違っていてスリリングだし、まあとにかくあり得ないレベルのライヴだったよ。

松村――それがロックの究極のライヴなんだ。

渋谷――質もともかくだけど、在り方として理想的だと思ったんだ。言ったように、外部的な要因としてディランがライヴを続けて行くものはほとんどないわけだよ。まして毎日のようにライヴ・ハウス・ツアーを全世界でやり続けるなんて過酷なことをする必要はまったくないんだよ。

松村――じゃあ、何故それを続けているんだよ。

渋谷――それがロックだからだよ。夕方になるとピカピカした衣装に着替えてステージに立ち、二時間のショーをやってお客を楽しませる、それを街から街を移動しながら続けていく、それがロック・ミュージシャンという職業の一番健全な在り方だからだよ。それにディランは気付いたんだと思う。そこを失なってしまうとロック・ミュージシャンとしてのリアルを失なってしまうことに気付いたんだと思う。あまりにも正しくてあまりに

CamScannerでスキャン

も立派で何も言えなくなるけど、凄いよな。
松村——最新作は全米チャートの一位なんだって?
渋谷——あり得ないよな。でも、こうしたライヴ活動をしているからああいう作品を作ることも可能になったんだと思うな。レコーディングの為に何年もスタジオにこもるとか、作品作りの為にライヴ活動をしないとか、そういうことじゃないんだよ。常に客の前に立ち、エンターテイナーとして誠実に日常を過し、その中で生まれた歌を作品化していく、そのサイクルの中に自分の職業的な本質を見い出したんだよ。偉大なブルースマンがあなたにとってブルースとは何ですかと訊かれて「イッツ・マイ・ビジネス」と答えていたけど、ディランにあなたにとって音楽とは何ですかと訊いたら「仕事」と答える気がする。**S**

ロック漫談のワールドカップ、終わりなき延長戦に突入中

渋谷——こないだ、共通の知人が亡くなって、御通夜でお前と会ったけど、なんで翌日の御葬式には来なかったんだよ。お前も来るもんだと思ってたのに。

松村——あの日、お前に「俺、おかしく見えないか？」って訊いたの、憶えてるか？

渋谷——おう、「別におかしくないよ、どうしたんだよ？」って言ったら、「後で話すよ」って言って、そのままだよな。なんだったんだよ？

松村——あの日、今晩が御通夜だって聞いて、あわてて冠婚葬祭の服や靴を探し出したんだよ。

渋谷——そんなもの、箪笥や靴棚の中にあるだろ。それとも、お前ん家じゃ冷蔵庫の奥にでも入れてるのかよ。

松村——入れてないわ。だけど、冷蔵庫の奥って、

たまにチェックすると半年前の糸コンニャクとか出てくるよな。

渋谷――どうでもいいわ、そんなこと。

松村――つまりさ、この頃は冠婚葬祭なんて二〜三年に一回ぐらいしかないから、押し入れの奥に突っ込んであるんだよ。

渋谷――そうだよな、冠婚葬祭の席にお前に来られても困るしな。

松村――誰が困るんだよ。で、久しぶりにそういう服装をして外に出たら、なんか違和感があるんだよ。

渋谷――分かった。上着の胸のポケットから、糸コンニャクが出てたんだろ。

松村――出てるか、そんなもの。で、お寺の最寄りの駅から歩き出したら、なんと左足の靴の底がパカーンって取れちゃったんだよ。

渋谷――チャップリンの映画だって、そんなシーンはないわ。

松村――考えてみたら、この靴ってまだ十回ぐらいしか履いてなくてピカピカなんだけど、買ってからもう十年ぐらい経ってたんだよ。しょうがないから、右足は普通で左足は底のない靴を履いてたんだよ、あのとき。

渋谷――人の御通夜ぐらい、ちゃんとしようっていう気にならないのかよ、お前は。

松村――しょうがないだろ、そんなこと言ったって。まあ、普通は人は靴の底まで見ないだろうから分かんないだろうとは思ったけど、底は二〜三センチでも高さがあるから、下駄と草履で歩いてるみたいにヒョコタンヒョコタンってなっちゃうんだよ。

渋谷――ヒョコタンヒョコタンって糸コンニャクの祟りか。

松村――だから、おかしくないかって訊いたんだよ。

渋谷――それと御葬式に来なかったのと、どういう関係があるんだよ?

松村――だから、冠婚葬祭の黒い革靴なんて一足しか持ってないんだよ。

渋谷――御葬式に来る前に、買ってくればいいだろ。

松村――俺の足は二十八センチの4Eなの。普通の靴屋じゃ、売ってないの、あれも、注文して、一週間ぐらい経ってから来たの。無理だろ。

渋谷――じゃあ、ヒョコタンヒョコタンで来いよ。

松村――あのなあ、底のない靴って、薄い皮一枚だけなの。石を踏むと、痛いんだぞ。お寺の砂利道歩いてて、泣きたくなったわ。分かるだろ。

渋谷――御葬式なんだから、いくら泣いたっていいんだよ。どうして、そういうことが分かんないかな、お前は。

松村――もう、メチャクチャ言うなよな。

渋谷――しかし、二十八センチの4Eなんて、しょうがない足だな。

松村――昔からよく言われたよ。「馬鹿の大足。間抜けの小足、中途半端のろくでなし」って。お前なんかろくでなしだろ。

渋谷――ああ、もう分かんない。なんか、もっとまともなことはしてないのかよ。

松村――あの数日後に、仲井戸麗市のライヴに行ったぞ。

渋谷――あれ、今やってるツアーって、東京は十月の最終日じゃなかったっけ？

松村――そうだけど、六月にも東京があったんだよ。

渋谷――六十歳の誕生日に向けて、六十回のライヴをやるっていうツアーな。「GO！60」っていうタイトルだったよな、たしか。

松村――そうそう。で、俺は六月十九日に行ったんだよ。

渋谷――待てよ、六月十九日っていったら、ワールドカップの日本対オランダ戦のあった日じゃないか。

松村――そうなんだよ。六時開演で、二曲終わったところでチャボさんもそのことに触れて、「キック・オフは八時半だから、それまでには終わる」って言ってたんだけど、実際に終わったのは九時四十五分だった。

CamScannerでスキャン

渋谷——チャボのライヴは長いからな。でも、あの長さがいいんだよ。

松村——で、家に帰ったら、日本は負けてた。やっぱり、俺が見てないと、そういうことになるんだよな。

渋谷——そんなわけ、あるか。

松村——本当だよ。相撲だって、しばらく国技館に行ってなかったら、野球賭博始めちゃうしさ。

渋谷——そういえばチャボ、また、俺の悪口、言ってくれてたか？

松村——おう、「『THE 仲井戸麗市BOOK』を出したとき、暗黒のようなレコードだって言われた。渋谷陽一のバカヤロー」だってさ。

渋谷——よく憶えているな。でも、俺なんかをネタにしてくれるのはチャボくらいで、ありがたいと思うよ。

松村——だから、もうそろそろ悪口のネタに困ってるだろうから、今度教えてあげに行こうかと思ってる。

渋谷——教えるな、そんなもの。

松村——カール・パーマーは空手をやってるけど弱いって書いたら、本人がそれを読んで、今度日本に行ったら俺と闘えって言ってきたとかさ。

渋谷——お前も古いこと覚えてるよな。『THE 仲井戸麗市BOOK』よりも前の話じゃないか。

松村——それで呪いをかけたら、カール・パーマー死んじゃった。

渋谷——死んでないよ。

松村——そういえば、あの頃夜になると、お前ワラ人形と五寸釘持って、どこか行ってたよな。

渋谷——するかそんなこと。

松村——トカゲの干したのとかニワトリの生き血とかも持ってたし、ニンニクを怖がってたよな。

渋谷——呪うにしても、方針をはっきりさせてくれよな。

松村——だけど、チャボさん、後から「今度『MY

R&R 仲井戸麗市全詞集』って言う本が出るんだけど、渋谷が作ってくれました。ありがとう」って言ってたぞ。

渋谷――そうなんだよ。すごくいい出来だぞ。力入れて作ったぞ。

小川――おはようございます。ずいぶんお早いですね。

渋谷――なんだよ、お前いたのかよ。

小川――もしかしてデンマーク戦見てたんですか？すごかったですね、本田と遠藤のフリーキック。

松村――黙れよ、いつ対談やってるか分かっちゃうだろ。

小川――社長の言うとおり、ワラ人形とトカゲの干したのでデンマークを呪った甲斐がありました。

渋谷・松村――……。 M

還暦手前の僕達ですが、ロマンを追い求めてもいいですか

渋谷——コンニチハ、アニタ・パレンバーグです。すっかり梅干でごめんなさい。

松村——特典映像を観たんだ、お前も。

渋谷——アレ、ショックだよな。一瞬、我が目を疑ったよな。

松村——読者は何の話だか分からないと思うので、ちゃんと説明しろよ。

渋谷——キースのアニタが、四十年経ったら梅干

CamScannerでスキャン

になってたんだよ。

松村――だから分かんないって言ってるだろう。アニタ・パレンバーグというのはキースの昔の恋人で『メイン・ストリートのならず者』は南仏のキースとアニタが住んでいた別荘でレコーディングがされた作品なわけ。今回映画として公開された、そのレコーディングのドキュメンタリー『ストーンズ・イン・エグザイル～「メイン・ストリートのならず者」の真実』がＤＶＤになって、その特典映像に現在のアニタ・パレンバーグが登場していて、それを観たお前はショックを受けたということなんだよな。

渋谷――そうそう、お前もやればできるじゃないか。

松村――お前ができないだけだろう。

渋谷――だって、あのアニタ・パレンバーグだぜ。まあ、ドキュメンタリー映像を観れば彼女がどれだけキレイで魅力的であったかは十分に今の人達にも伝わるけど、それがあんな梅干に。同一人物とは思えないよな。

松村――梅干梅干と言うな。

渋谷――ロック・スターの恋人やカミさんが女優やモデルで、美人なのには誰も驚かないけど、その中でもアニタは別格だったじゃないか。

松村――確かに。キレイなだけじゃなくてキースと双子みたいなオーラを出していたよな。

渋谷――そうそう、それが梅干だぜ。

松村――でもキースも激しく梅干化していないか。

渋谷――言える。梅干カップルなんだ。その辺も双子みたいだよな。

松村――梅干カップルって、今はもう他人なんだからカップルはないだろう。

渋谷――でも老化というか梅干化もそっくりだな。キースもあのドキュメンタリーで観るとメチャメ

チャ二枚目だもんな。

松村——もともと美少年というか美青年というか、それこそキースなんか若い頃の写真と現在では同一人物とは思えないよな。

渋谷——映画本編では現在のアニタは声だけしか出てこないじゃないか。

松村——何人かはそういう扱いだよな。

渋谷——監督も怖くて出せなかったんだと思うんだよ。現在のアニタが出てきてたら、あの映画はぜんぜん違うものになったぜ。

松村——別に怖くて出せなかったわけじゃないだろうけど、あの映画のロマンチックなムードはなくなるだろうな。

渋谷——そうそう、あの映画はロマンチックなんだよ。その中心にキースとアニタというカップルがいて、その美しさがあの映画のファンタジーを支えているわけで、現在のアニタはファンタジーを破壊するぜ。

松村——でも、あのドキュメンタリーはストーンズがこうあって欲しいというファンの幻想をそのまま表現しているよな。

渋谷——あの『メイン・ストリートのならず者』というアルバムも、こういうドキュメンタリーにぴったりだったよな。

松村——税金問題でイギリス国内にとどまることができなくなったストーンズが、移住先に選んだのがフランス。そこでアルバムを作ることになるんだけど、適当なレコーディング場所が見つからず、結局南仏にあるキースの別荘の地下でレコーディングすることになるという設定が、まず映画的だよな。

渋谷——海辺に建つ巨大な別荘で、信じられないぐらいの環境だよな。

松村——別荘というより巨大リゾート・ホテルっ

て感じゃないか？
渋谷——日本の場合、リゾート・ホテルでもあの環境と豪華さを持つところはないと思う。
松村——そこにメンバーが集まってレコーディングするんだけど、パーティーやってんだかレコーディングしているんだか分かんない感じなのが凄い。
渋谷——酒はもちろんのこと、ドラッグも山程あって、みんな決めながらやってるし。専属のコックがいて食事もいつも用意されているし、よく分かんないキレイなネエちゃんもフラフラしてるし。あれは一体何なんだろう。
松村——まさにストーンズ幻想そのまんまだよな。
渋谷——レコーディングも延々セッションをやってるみたいで、その中のひらめきが曲になっていく感じだし。ロックの神が降りてくるのを待っているという神話がそのまま現実に展開されている感じが怖い。この映画を頭の悪い若いロック・ミュージシャンが観ると酒飲んでドラッグ決めて女とセックスしてれば凄い作品ができるような妄想にとりつかれるよな。
松村——実際、そうやって『メイン・ストリートのならず者』というロック史に残る傑作はできあがったわけだからな。
小川——スイマセン。渋松担当の若き敏腕編集者小川です。一応妄想にとりつかれている若いロック・ミュージシャンではなく、妄想にとりつかれている長老お二人にお伝えしておきますが、この時のレコーディングについてミック・ジャガーは本誌八月号のインタヴューで、インタヴュアーの自由で気ままな雰囲気のレコーディングですね、という質問に対し「そういう印象を与えられたのは嬉しいけれど、本当のことを言うとそんなに流暢な雰囲気でもなかったんだ(笑)。一応締め切り

はあったし、その後のツアーに出ることも決まってた。どんなクリエイティヴなプロセスにも言えることは、プロセスそれ自体に恋することはできないということ」と答えています。「プロセスそれ自体に恋することはできない」、けだし名言ですな。

渋谷——ウルサイ、そんなことは分かってるんだよ。でもこの映画は、まさにそのプロセスに恋する幻想を売りにしてるんだから、そこを話さないとしょうがないだろう。向こう行けアホ。

小川——分かっているなら結構です。行きます。

松村——あいつが出てくるたびに思うんだけど、お前のこの会社での立場って大丈夫なのか？

渋谷——知らないよ。お前が社員に訊いてみればいいじゃないか。

松村——訊いてはいけない話が出てきそうで怖くて聞けない。

渋谷——今更、怖いもんなんかないけどな。そんなことよりストーンズだよ。確かにミック・ジャガーの言うとおり、酒飲んでドラッグやってたんじゃ曲なんかできないわけじゃないか。このレコーディングも、結局は普通に大変で、普通に真面目にやってたんだと思うわけ。でもストーンズ幻想を拡大するようなロマンチックなストーリーを生み出すスキ間もあったんだよ。そこをこの映画はとてもうまく作ってるよな。

松村——ナレーションで、延々何時間と続いたセッションが、ある時一瞬でマジなものに変わる。キースがチャーリーに目配せすると本気を出す合図だ、なんてもっともらしいエピソードが語られるけど、嘘とは言わないけど、そんなでき過ぎた話はないだろう、って感じだよな。

渋谷——そうそう、実際はそんなロマンチックなもんじゃなくて、もっと現実的なもんだったたんだと思うぜ。ただ『メイン・ストリートのならず者』

のルーズでファンキーなムードは、あのレコーディング環境が生んだものではあると思う。

松村——実際はレコーディングしにくそうだよな。

渋谷——絶対にしにくかったと思う。

松村——アニタがインタヴューで、警察に踏み込まれてもいいように逃走経路を考えていたと言ってたじゃないか。

渋谷——あれ凄いよな。ほとんどボニーとクライドだよな。

松村——だからやれるうちにやれることをやっておくってのは、まさに確信犯の発言だと思ったな。

渋谷——やっぱりキースとアニタは究極のロック・ロマンなんだよ。

松村——でも現実は梅干なんだろう。

渋谷——現実も梅干も辛いよな。S

CamScannerでスキャン

ブログにメシばかりアップするので、心配になりました

松村——お前、ブログにもそれしか書いてなかったじゃないか。

渋谷——当然だろう、一番重要なことなんだから。これはブログにも書いたんだけど、とりあえずデイヴ・グロールはドラムを思いっ切り叩きたくてあのバンドをやったんだと思うんだ。

小川——コンニチハ、敏腕若手編集者小川です。

渋谷——コンニチハ、ジョン・ポール・ジョーンズです。デイヴ・グロールのドラムの音がデカイので、耳栓が必要です。

松村——そういえばフジで観たんだよな。どうだったんだよ。

渋谷——だから、デイヴ・グロールのドラムの音がデカかったんだよ。

いうまでもなくデイヴ・グロールはニルヴァーナのドラマーであり、そして今はフー・ファイターズでギターとヴォーカルを担当する大人気アーティストです。このゼム・クルックド・ヴァルチャーズは彼がオーガナイザーと思われるプロジェクトで、基本的にドラムに専念しています。社長としては、その辺のことが言いたいのだと思います。松村さんにご参考のためにお伝えします。

松村――ウルサイ。そんなことは知ってる、向こう行け。

小川――よかった、安心しました。それでは敏腕若手編集者小川、向こうに行きます。

渋谷――だから、デイヴ・グロールはドラムが叩きたかったんだよ。そして、叩く以上はツェッペリンをやりたかったんだな。

松村――そういえば、再結成ツェッペリンのドラムをデイヴ・グロールがやるって話もあったよな。

渋谷――そうそう。本人もやる気マンマンだったと思うけど、まあ結局息子のジェイソンがやることになって。それはそれでよかったんだろうけど、デイヴ・グロールの思いは続いていたんだと思うんだよな。だからその思いが爆発したのが、ゼム・クルックド・ヴァルチャーズなんだよ。ジョン・ポール・ジョーンズとリズム隊を組むなんて、まさに彼にとっての夢だったわけだよな。

松村――いい話じゃないか。

渋谷――確かに、本人たちにとってはいい話なんだけどさ。でも最終的に気持ちがいいのは、聴く側より演奏する側って感じのバンドなんだよ。ライヴ観ながらずっと、ドラムの音デケエなあ、みんなバンド気持ちよさそうだなあ、そんなことばかり考えていたよ。

松村――でも、みんな凄かったたって言ってたぞ。

渋谷――確かに凄いんだよ。今時あんなに太くて

CamScannerでスキャン

重いグルーヴを持ったバンドなんかそうあるもんじゃないからな。ただ、それが楽しいかっていうとなかなか難しい問題で、正直感心して驚いているうちに終わってしまった感じなんだよ。

松村――お前、今年のフジの一番の楽しみだったんじゃないのかよ。

渋谷――いや、今年のフジは凄く楽しみなバンドがいっぱいあって、凄く充実してたんだ。そういえばなんでお前来なかったんだよ。

松村――電車乗り間違えて、降りたら秋田だったんだよ。

渋谷――どう乗り間違えたら秋田に行けるんだよ、バカ。

松村――寸前まで行くつもりだったんだけど、腰痛がひどくなってやめたんだ。

渋谷――お前が来ないから、ジョン・フォガティもロキシー・ミュージックも人がいなかったんだぞ。

松村――それは俺がいるとかいないとかの問題じゃないだろう。でもジョン・フォガティ観たかったな。

渋谷――声がデカかったぞ。

松村――お前は小学生か。大きいとか小さいとかそういう感想しかないのかよ。

渋谷――でもＰＡが変わったのかと思うくらい声がデカくて、凄かった。一説によると歳をとって余計に声が出るんで、キーを上げたという話もあるぞ。

松村――怪物だな。

渋谷――セットリストも最高、バンドも最高で楽しかったぞ。

松村――ロキシー・ミュージックはどうだったんだ?

渋谷――背がデカかった。

松村——……。

渋谷——ブライアン・フェリーがデカいのは知ってたけど、他のメンバーもでかいんだよ。ゲストに布袋が出てフィル・マンザネラの横で弾いていたけど、そんなに身長差がなかったぜ。あれは凄い。

松村——そこかよ、感心のポイントは。

渋谷——でもジョン・フォガティにしろロキシーにしろ、しっかりと代表的なヒット曲を演奏して偉いよな。自分たちが何を求められているか分っているよ。

松村——今年のフジはそういうフェスだったんだ。

渋谷——そういう日は一日だけで、他はミューズとマッシヴ・アタックがトリだった。ロキシーの日もMGMTやワン・デイ・アズ・ア・ライオンが出たし、今年は凄く見応えのあるメンツだったな。

松村——でも、お前のブログ読むと、汁なし担々麺食ったとか、昔から俺は携帯椅子を持ってて偉いとか、くだらないことばっか書いてたじゃないか。

渋谷——よく読んでいるな。あれは、他の社員のブログとかぶらないようにしたんだよ。去年、後でブログ読んだら俺も山崎も宮嵜も兵庫も、みんな同じライヴの感想書いていてアホみたいだったので、ちょっとオリジナル色を出してみたんだ。

松村——それが担々麺かよ。

渋谷——フェスでメシは重要だよ。担々麺はイマイチだったけど、他はおおむね当たりだったな。でも、今年のフジはどのアクトもよくて、楽しかった。

松村——結局、一番よかったのはなんだったんだ。

渋谷——とにかくアトムズ・フォー・ピースのインパクトが強過ぎて、俺に限らず最終日に参加し

ていたみんな、あれが一番なんじゃないかな。人も多かったし。

松村――日曜日、人も一番入ってたらしいな。

渋谷――やっぱりトム・ヨーク人気だと思うぜ。

松村――でもCDも出てないんだろう。

渋谷――まあな。でもトム・ヨークのソロをライヴで演奏するプロジェクトというもんだから、乱暴に言ってしまうとソロ・アルバムが音源という言い方もできるな。

松村――レディオヘッドの曲とかもやったんだろう。

渋谷――海外ではカヴァーとかもやってるんだけど、基本トム・ヨークとナイジェル・ゴドリッチのプロジェクトだと思うな。

松村――何がそんなに凄いんだよ。

渋谷――トム・ヨークがやたら踊るんだよ。

松村――レディオヘッドの時も変なダンスするじゃないか。

渋谷――あれがもっと拡大して激しくなるわけよ。バンドというタガがはずれて、あの狂ったような踊りが本来のトム・ヨークにとってのライヴ・スタイルなんだな。

松村――音が凄いんじゃないのかよ。

渋谷――その凄い音を生み出しているのがあの肉体性なんだというのがリアルに伝わってくるパフォーマンスだった。黒人音楽、白人音楽とか、そういうのじゃなくて青人音楽とか緑人音楽とかいう感じなんだよ。

松村――なんだよ、その青人とか緑人とか。

渋谷――いや、黄色人種のことを黄色人というのかどうか知らないけど、既存の白、黒、黄色という肌の色ではない、もっと違う人種のグルーヴを持っているみたいなんだよトム・ヨークは。

松村――言ってることがよく分かんないけど、青

とか緑とか信号みたいだな。
渋谷――とにかく凄かったんだよ。
松村――お前の説明は、デカイとか凄いとか本当に音楽評論家とは思えない低レヴェルで、よく分かんないので来年は腰痛に気を付けて自分で観るようにするよ。
小川――敏腕若手編集者の小川です。最後に坦々麺を出したお店の名誉のためにお伝えしておきますが、本来坦々麺は汁なしが中国においては基本の形なのです。日本的な中華に馴れた社長の口には合わなかったかもしれませんが、そのお店としてはオリジナルな坦々麺を目指して高い志で作ったものではないでしょうか。ぜひ、来年は僕も食したいと思います。
松村――帰るぞ、俺は。**S**

とっちでもいいんで、終わったあとは挙党態勢でお願いしますね

渋谷――コンニチハ小沢一郎です。男は負けると思っても、闘わなくてはならないときがあるんだ。

松村――お前、ブログで民主党の代表選のことばっかり書いていて、全然音楽のことを書いてなかったな。

渋谷――音楽ネタも書いているけど、あの時期は政治ネタの方が目立ってたな。でも総合誌『SIGHT』の編集長なんで政治ネタは自然な流れなんだよ。

松村――しかも菅勝利とか結果予想までして、外れたら恥かくだろう。

渋谷――よく読んでるな。別に外れても素人なんだから恥かかないし、絶対に外れないと思ってたんだ。

松村――総合誌の編集長なら素人じゃないだろう。

渋谷――確かに。でも当たったんだからいいじゃないか。結構、小沢優勢とかどこのメディアも書いていた時期だから、政治家を含めて外れると忠告されたな。しかも、『SIGHT』の内田樹・高橋源一郎対談では、二人から代表選の結果予想を訊かれて〝菅圧勝〟とか答えたしな。

松村――いいかげんな奴だな。

渋谷――いいかげんじゃないだろう。実際にそうなったし、むしろ一番正確な予想だったわけじゃない

CamScannerでスキャン

か。

松村——たまたまだろう。

渋谷——そうじゃないの。ちゃんと根拠のある予想なんだよ。

松村——どういう根拠だよ。

渋谷——世論があれだけ小沢一郎に対してノーと言ってるんだから、当然そうなるだろうという極めて論理的な根拠だよ。

松村——小学生みたいな理屈だな。

渋谷——そうかも知れないけど、有権者の意志を反映するのが政治なんだから、そこが基本だろう。政治評論家とか新聞とか、菅支持の議員が何人、小沢支持の議員が何人とか細かい分析をしていてアホみたいだよ。そういうことをやるのがプロだと思っているんだろうな。

松村——実際に予想が当たったのはお前の方だしな。

渋谷——そうそう、今の政治は素人の方が正確に読めるんだよ。そこで『ロッキング・オン』も新たな未来に向けて代表選をやろうと思うんだ。

松村——何だ、『ロッキング・オン』の代表選って？

渋谷——代表を選ぶ選挙だよ。社員に社長を選ばせるんだよ。

小川——コンニチハ、若手敏腕編集者の小川です。代表選って何ですか。面白そうですね。

渋谷——何だお前、急に出てきて驚くだろう。

小川——何か長く続いた『ロッキング・オン』の封建政治の時代が終わり、ついに民主主義の時代がやってくる、そんな希望の鐘の音を聞いたような気がしてやってきました。

渋谷——アホか、そんな鐘はお前が生きている間は絶対に鳴らないから向こう行ってろ。

小川——代表選って面白そうじゃないですか。ぜひやりましょう。でも誰と誰が闘うんですか。

渋谷——俺と山崎が闘うんだよ。

小川——僕は絶対に社長支持です。

松村——こいつ調子いい奴だな。でも山崎なんか権

力欲ないから立候補しないんじゃないか。

渋谷――俺もどちらかというと社長の仕事は好きじゃないので、選挙戦はどれだけ不支持を集められるかという闘いになるな。

松村――そんな闘いなら、やんなければいいじゃないか。

渋谷――確かに。でも企業が社長を選挙で決めるようになると面白いだろうな。

小川――『ロッキング・オン』の副編の古川さんは山崎派ですよ。

松村――何だその山崎派って。

小川――松村さんはめったに会社に来ないから知らないでしょうけど、今やウチの会社も社長が絶対的な存在じゃなくなってきているんですよ。まあ、何というか社長の小沢一郎化っていうんですか?

松村――それじゃ、山崎が晋なのか?

小川――そうそう。

渋谷――そうそうじゃねえよ、そんな派閥がウチの会社にあるわけないだろう。

小川――知らないのは社長だけですよ。羽鳥さんは微妙ですね。今なら説得すれば社長派になりますよ。僕が話してみましょうか。僕はどこまでも社長派ですからね。松村さんはどうするんですか?

松村――まあ渋谷は友達だし、心情的には渋谷を支持したいけど、『ロッキング・オン』の編集長は山崎だし、俺の仕事は山崎からもらっているのでビミョーだな。

渋谷――どこがビミョーなんだよ、真面目に答えてんじゃないよ。

松村――代表選やろうって言い出したのはお前だろう。

渋谷――確かに。

小川――やりましょうよ、社内の根回しは僕にやらせてください。圧勝しましょう。

渋谷――お前の話を聞いているとだんだんやる気がなくなってきた。

CamScannerでスキャン

松村――でも面白いかも知れないな。マニフェスト出して、給料二倍にするから俺を支持しろって言ったりするんだ。俺も原稿料を二倍にしてくれるなら渋谷派になるぞ。

渋谷――なってくれなくていいよ。それじゃまさに小沢一郎のバラマキ政策と同じじゃないか。

松村――やっぱりお前は小沢なんだ。

渋谷――だから、そんなことはしないと言っているだろう。

小川――塩澤[注2]はまだ入社して一年なんで、少し脅せば何とかなると思うんですよ。

渋谷――お前は何なんだよ。新入社員を脅して社長になってどうすんだよ。

小川――問題は管理職ですね。そこは社長頑張ってくださいね。『JAPAN』編集部は山崎派が多そうですよ。

松村――サポーター票ってのはあるのか？

渋谷――お前もどうしてそういうややこしいことを言い出すんだよ。

小川――それいいですね。読者の人にも投票してもらうのは面白いかも。まさにサポーター票ですよ。そういうのは若い奴は面倒がってやんないけど、年寄りは参加しますよ。社長の一番の支持層は中年の洋楽ファンだからそのサポーター票は期待できるな。そうなると松村さんの応援も重要だから、しっかり頼みますね。

松村――お前、なかなか戦略家だな。渋谷、こいつを選挙対策本部長にしよう。中年のサポーター票は俺に任せてくれ。

渋谷――お前に何にも任せないいし、こいつも選挙対策本部長なんかにしないよ。

松村――何言ってんだよ、お前が言い出したことなんだから真剣に考えろよ。

小川――そうですよ、社長は甘く考えているけど会社はもう社長の思っているような会社じゃなくなっているんですよ。それを直視するいいチャンスです

よ代表選は。
松村――そうそう。
渋谷――そうそうじゃないよ。
小川――大丈夫、僕に任せていただければ社長の勝利は間違いありません、圧勝ですよ。
渋谷――お前、何でそんなに熱心なの。
小川――社長、勝ったときは、後継者指名よろしくお願いしますね。

渋谷――……。
松村――俺、帰るぞ。
小川――早く羽鳥さんと話さなくちゃ。**S**

注1：羽鳥麻美。ロッキング・オン編集部在籍今年で7年目。
注2：塩澤淳。ロッキング・オン編集部在籍。今年で2年目だが、元静岡ガス勤務の三十路一歩手前。

CamScannerでスキャン

二大「二度と再結成しなさそう」バンド、復活なるか⁉

渋谷――コンニチハ、ニック・メイソンです。ロジャー・ウォーターズもデイヴ・ギルモアもソロで食べてるからいいけど、僕はそうはいかないので早くピンク・フロイドの再結成を実現したいと思います。

松村――絶対にやらないってデイヴ・ギルモアが言ってたんじゃなかったのか。

渋谷――そうなんだよ。二〇〇五年に「ライヴ8」で再結成して、その後で確か再結成したら四百億くらいくれるという資産家が出てきたんだけど、断ったんだよ。

松村――絶対にニック・メイソンはやりたかったよな。

渋谷――確かに。強く否定したのはデイヴ・ギルモアだけだったと思う。ツェッペリンもロバート・プラントがグズグズ言っていて前に進まないしな。

松村――ツェッペリンを一番再結成したいのは絶対にジョン・ポール・ジョーンズだな。

渋谷――そうかも知れないな。でも、ピンク・フロイドもツェッペリンも再結成の可能性が出てきたみたいだぜ。

CamScannerでスキャン

松村——本当かよ。

渋谷——ニック・メイソンがみんなやる気になっているって発言してるんだよ。

松村——それ、ニック・メイソンが仕掛けているんじゃないのか。そう言って他のメンバーを追い込んでいこうと思ってないか。

渋谷——そうでもないみたいだぜ。今、ロジャー・ウォーターズが『ザ・ウォール』ツアーをやっているんだけど、そこにデイヴ・ギルモアがゲストで出るらしいんだよ。

松村——何だその『ザ・ウォール』ツアーって。

渋谷——アルバム『ザ・ウォール』を再現するツアーだよ。

松村——それってアルバムが出たときにやって数回で中止になったんじゃなかったのか。

渋谷——そうそう、よく知ってんな。巨大な壁を作って、それが壊れていくすごいスケールのライヴで、やたら評判がよかったんだけどあまりにも巨大すぎてセットが作れなくなったんだよ。

松村——間抜けな話だよな。

渋谷——まあな。でもやたら評判よくて、ベルリンの壁が壊れたときも、それを記念してやったりしていたぜ。

松村——今度は壁を小さくしてやってるのか？

渋谷——そうじゃなくて、テクノロジーが進化したたんで壊してもすぐに建てられるようになったらしいぜ。

松村——それってどうなんだ？

渋谷——何がだよ。

松村——だって壁ってのは旧い体制とか、旧い思想を象徴したもので、それを壊そうというのが『ザ・ウォール』のメッセージじゃないのか。

渋谷——まあな。

松村——それが、簡単に壁が建てられるようになったからツアーをやるってどうなの？

渋谷——どうなのって、あまり関係ないと思うんだ

けど。

松村——甘いな。そういう技術が進歩したから何でもやるって考えと対抗するのがロックだろう。建築技術が進歩して壁を壊したり建てたりしていては本当のロックは鳴らせないな。

渋谷——……。何か変なんだけど、何が変なのか指摘できないくらいお前の言ってることは変だと思う。

松村——ツェッペリンは再結成しそうなのか?

渋谷——よく分かんないけど、ロバート・プラントの発言が少し軟化してきたみたいだな。前は絶対にやらないって感じだったけど、最近はそれもいいかも、みたいなことを言ってるらしいぜ。グラミーとか獲ったし、新しいソロ・アルバムも売れたんで気分がいいのかもな。

松村——それはおかしい。それはロックじゃないな。

渋谷——またかよ。

松村——ロバート・プラントがグラミー獲ったプロジェクトも、ソロでやってることも全然ツェッペリンと違うじゃないか。

渋谷——まあな。

松村——もうロバート・プラント自身はああいうハード・ロックに興味はないんだよ。なのにまたツェッペリンをやるっていうのはロックとして正しくない。心のないロックをやってどうするんだ。

渋谷——なるほど、今度はすごくよく分かったし、言ってることも正しいな。

松村——だからやめろと言ってやれ。

渋谷——いいんだよ、ロバート・プラントに心がなくても。だいたい現役時代からロバート・プラントはそんなに心が入っていなかったんだから。

松村——お前もそういうことを言ったら駄目だろう。大人になってロックの心を忘れたんじゃないのか。

渋谷——ロックの心は忘れてないけど、ロバート・プラントというのはそういう役割なんだよ。でもサンタナの新譜とか聴くとクリス・コーネルでもいいような気がしてくるけどな。

CamScannerでスキャン

松村――あのアルバムすごい内容だったな。

渋谷――ロック・クラシックのカヴァー・アルバムでタイトルが『ギター・ヘヴン～グレイテスト・ロック・クラシックス～』というのがサンタナらしいよな。あの中にツェッペリンの〝胸いっぱいの愛を〟が入ってたじゃないか。あのヴォーカルが元サウンドガーデンのクリス・コーネルだったじゃないか。あれが結構よかったから、これでツェッペリンを再結成してもいいような気がしてきたな。

松村――でもツェッペリンのギターは、やっぱりジミー・ペイジだろう。サンタナでツェッペリンはないと思うな。お前がそこまでロックの心を失ってしまったとは、ちょっとショックだよ。

渋谷――何でサンタナでツェッペリンを再結成するんだよ。そんなことをしてもしょうがないだろう。

松村――だってお前、今サンタナの〝胸いっぱいの愛を〟がいいって言ったじゃないか。

渋谷――だからいいのはクリス・コーネルのヴォーカルの話だろう。サンタナのギターで〝天国への階段〟やったら、まんま演歌じゃないか。

松村――そうか、お前の狙いは〝天国への階段〟の演歌版なんだ。

渋谷――……。お前、わざと言っているだろう。

松村――そんな怖い顔するなよ。ロックの心はラヴ・アンド・ピースだぜ。

渋谷――ウルサイ、とにかくピンク・フロイドとツェッペリンは再結成の可能性があるんだよ。

松村――確かにクイーンも、ポール・ロジャースのヴォーカルで再結成したんだから、何でもありだよな。

渋谷――そうそう、新譜まで作っちゃったんだから、考えてみたらかなり無理やりな話だよな。

松村――そのポール・ロジャースもバッド・カンパニーで来日するけど、ミック・ラルフスが来ないんで、サイモン・カークとポール・ロジャースだけなんだよな。これって再結成フリーって言い方もでき

CamScannerでスキャン

るよな。

渋谷――確かに。その二人はフリーのメンバーで、そこからバッド・カンパニーになったんだからな。ついでにフリーもやってほしいよな。

松村――何だか再結成ブームって、すごい展開になってるよな。

渋谷――ポール・ロジャースってミスター・再結成って感じだよな。

松村――いっそのこと、俺達も再結成しないか？

渋谷――何だよ再結成って？

松村――オリジナル・メンバーでの『ロッキング・オン』の再結成だよ。また架空インタヴュー[注]とかやろうぜ。

渋谷――絶対にやらない。 **S**

注：創刊当初の名物企画。

登場人物に「LOST」を拝借しました

渋谷――コンニチハ、リヴァース・クオモです。「LOST」の中のキャラで自分はやはりハーリーでしょう。

松村――意味がわかんないんだけど。

渋谷――今度のウィーザーのアルバムが『ハーリー』というタイトルなんだけど、これがテレビ番組『LOST』の登場人物の名前なんだよ。それでジャケットも、その役を演じたホルヘ・ガルシアという役者のアップなんだよ。ほら、これだよ。

松村――デブだな。

渋谷――確かに。この太っているというのが重要な

渋谷陽一、『LOST』全話完走しました

渋谷——コンニチハ、リヴァース・クオモです。『LOST』の本当の主人公はやはりハーリーでしょう。

松村——意味分かんないんだけど。

渋谷——今度のウィーザーのアルバムが『ハーリー』というタイトルなんだけど、これがテレビ番組『LOST』の登場人物の名前なんだよ。それでジャケットも、その役を演じたホルゲ・ガルシアという役者のアップなんだよ。ほら、これだよ。

松村——デブだな。

渋谷——確かに。この太っているというのが重要な

CamScannerでスキャン

キャラ設定なんだけどな。

松村——リヴァースは、こいつが好きなんだ。

渋谷——そうなんだろうな。たまたまホルゲ・ガルシアという役者もウィーザー・ファンで、ライヴに来てメンバーと知り合いになったらしいよ。

松村——ドラマを観ないと『ハーリー』とか言って、デブのアップをジャケットにされてもピンと来ないよな。

渋谷——でもドラマを観ると、これがなかなかいいジャケットなわけよ。

松村——お前、観たのかよ。

渋谷——テレビ・ドラマ・シリーズにはまったのは十年以上前の「ツイン・ピークス」以来じゃないか。

松村——よく時間があったな。DVDで何枚くらいのシリーズなんだ?

渋谷——全部で七十枚か八十枚なんじゃないかな。

松村——寝ないで観たのかよ。

渋谷——俺は映画は倍速で観るから速いんだよ。

松村——何だ倍速って。

渋谷——基本、映画は二倍速で再生して観るんだよ。日本映画の場合はセリフが聞き取りにくくなるけど、洋画の場合は字幕だから丁度いい感じになるんだな。

松村——そんな見方で面白いのかよ。

渋谷——ストーリーがテンポよく進んで楽しいぞ。

松村——それはテンポがいいんじゃなくて、ただ慌しいだけだろう。

渋谷——無論、ちゃんとした映画は普通に観るんだけど、いわゆるハリウッドの娯楽作は倍速くらいがいいんだよ。

松村——何か、お前の人生って落ち着かない感じで嫌だな。

渋谷——あまりにつまらないと三倍速、四倍速にすることもあるぞ。

松村——わけが分からないだろう。

渋谷——予定調和のストーリーの場合はそれで十分だよ。ただときどき、酷い目に遭うことがあって『シ

ックス・センス』は最低だったな。

松村――どうしてだよ。

渋谷――ストーリー展開がかったるいので、後半どんどん三倍速、四倍速にしていったんだよ。そうしたら何だか分からないうちに終わってしまったんだよ。

松村――お前はアホだな。

渋谷――それで焦って後ろから徐々にストーリーを確認したわけ。そうしたら最後がドンデン返しじゃないか。そんな映画を後ろから観直しても面白くも何ともないんだよ。フザケルな、M・ナイト・シャマラン！

松村――お前だろう、フザケルなは。

渋谷――そうかも知れない。よい子はそういう映画の見方をしないように。

松村――『LOST』もそうして倍速で観たのか？

渋谷――最初はそうしたけど、すぐにちゃんと観るようになったな。しっかり映画的なテンションがあるので、その時間の流れに身を任せていても気持ちがいいんだ。

羽鳥――ナイス・トゥ・ミート・ユー、羽鳥です。『LOST』字幕で観ても面白いですか？

渋谷――誰だお前。

小川――編集部の羽鳥じゃないですか。

渋谷――六本木ヒルズに住んで、前職は富士通で、北欧人と結婚して、英語をペラペラ喋る羽鳥か。

小川――メチャクチャ詳しいじゃないですか。社長、羽鳥のこと好きなんでしょう。

渋谷――もっとお前に詳しくなりたいから、今夜、社長室に来るように。

小川――それ、パワハラとセクハラが一緒になってますから、訴えられますよ。

羽鳥――アメリカのテレビ・ドラマは固有名詞とかをネタにしたギャグが多いので字幕じゃその面白さは分からないと思うんですけど、ハウ・ハヴ・ユー・ビーン。

渋谷――……。

松村――頑張れ渋谷。

渋谷――ウルサイ。セリフ聞いてたら倍速で観れないから字幕のほうが便利なんだよ。

小川――それ、負け惜しみだと思うんですけど。

松村――俺もそう思う。

渋谷――ウルサイ。お前は『LOST』観たのかよ。

羽鳥――フー・ケアーズ、羽鳥です。私は『LOST』は観ていませんが、最近はまっているのは『THE EVENT』です。テイク・イット・オア・リーヴ・イット。

渋谷――いちいち英語を喋るな。何なんだよ、その『THE EVENT』って。聞いたことないぞ。

羽鳥――日本ではやっていません。ヨーロッパ仕様の家のPCで観ています。ヘルプ・ユアセルフ。

松村――頑張れ渋谷。

渋谷――だからウルサイって言ってるだろう。何なんだよ、そのヨーロッパ仕様のPCって。

小川――社長、あまり突っ込まないほうがいいと思うんですけど。

羽鳥――定額で観られる映像提供サービスで日本では観ることのできないテレビ番組とか映画とか観れるんです。無論、社長の好きな字幕は付いていませんが、デイ・アフター・トゥモロー。

小川――何か英語もだんだんナメた感じになってきてますよ。

松村――頑張れ渋谷。

渋谷――ウルサイ。それなら別にヨーロッパ仕様じゃなくても普通のPCでもいいじゃないか。

小川――だからやめましょうよ社長、突っ込むのは。

羽鳥――登録しているクレジット・カードがヨーロッパの住所じゃないと、そのサービスは受けられないから、日本のクレジット・カードじゃダメなんですよ、ステアウェイ・トゥ・ヘヴン。

小川――出た、やばい最終兵器出ましたよ、ステアウェイ・トゥ・ヘヴン。

CamScannerでスキャン

渋谷――お前はアホか。いちいち騒ぐな。そのドラマは面白いのかよ。ギリギリ・チョップ。

小川――社長、それ英語じゃないですよ。

松村――頑張れ渋谷。

羽鳥――日本でDVDがリリースされたらぜひ観てください。字幕付きの二倍速でも三倍速でもいいですから。ロング・タイム・ノー・シー。

小川――行っちゃいましたよ羽鳥。

松村――最近の社員はいろんなキャラの奴がいるな。

小川――どうします？『THE EVENT』がいつ日本でDVD化されるか調べますか？

渋谷――そんなもん調べなくていい。 S

注：一応興味のある方のために記しておくと、日本ではスーパー！ドラマTVで放映されることになった。

ボックス・セット、本当に全部聴いていますか？

松村——つかぬことを訊くけどな、お前、ＣＤの整理って、どうやってる？

渋谷——ＣＤの整理は……って、それ、前にも話さなかったたか。

松村——ちょうど、一年になるな。

渋谷——同じ話、するんじゃないよ。

松村——いやな、一年経ったから、またＣＤが増えてるわけで、どうしたらいいのか、もうそろそろ考えなきゃいけないからさ。

渋谷——そんなもん、ひとりで考えろよ。

松村——いや、特に整理に困ってるのがボックス・セットなんだよ。ボックスって、出始めたときは

CamScannerでスキャン

凄い宝物のようだったけど、当たり前になっちゃったら、整理に困るよな。もちろん普通のCDといっしょに並べることもできないし、各々大きさも違うし。

渋谷——確かにボックス・セットって形がいろいろで整理には困るよな。

松村——最近よく出るのが、名盤のデラックス・ヴァージョンな。フーの『ライヴ・アット・リーズ』なんか、CD四枚にレコードのLPとシングルだぞ。

渋谷——ああ、LP一枚だけだったことを思うと、凄いことになってるな。

松村——だいたいCD二枚組で完全版が出てるんだから、もういいじゃないか。

渋谷——それを決めるのは、お前じゃないんだから。コアなファンは、もっともっと欲しがるんだよ。

松村——本篇の二枚はいいよ。だけど、あとの二枚は翌日のハルっていう町でのライヴだぜ。もう、『ライヴ・アット・リーズ』じゃないじゃないか。

渋谷——それでも、欲しがるんだよ。ベースはまったく同じだっていう話だけど。

松村——だいたい、今レコードつけられたって、聴ける奴がどれだけいるんだよ。

渋谷——だから、限定発売なんだよ。フーのマニアにとっては、一種のアーティスト・グッズなんじゃないのか。

松村——そういうものなのか。

渋谷——コンサートに行って、あれもこれもってグッズを買ってたら、そういうことにもなるだろう。

松村——ポール・マッカートニーの『バンド・オン・ザ・ラン』も、CD三枚とDVD一枚のやつがあるんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——お前は欲しいだろ。

松村——いやあ、引いちゃったなあ。俺は通常盤でいいよ。

渋谷——お前はその辺はコレクターじゃないよな。

松村——それから、ブルース・スプリングスティーンの『闇に吠える街』な。

渋谷——ああ、CD三枚にDVD三枚な。

松村——CDが一枚は本篇で二枚がボツにした奴というのは、どうなんだろう。

渋谷——どうなんだろうって言ったって、本人がリリースするんだから、いいんじゃないのか。

松村——いやあ、考えてみたら、おかしいよ。本篇一枚にボーナスで一枚っていうのなら分かるけど、ボツのほうが多いっていうのは変だろ。

渋谷——だけど、曲自体はよく出来ていて、本人も発表するっていうのなら、他人がどうこう言うことじゃないだろう。たとえば、ボブ・ディランの『ザ・ウィットマーク・デモ』だって、正規のレコーディングじゃないけど、良かったじゃないか。

松村——そりゃあ良かったけど、本来は一般のファンに聴かせるものじゃないだろ。裏見せちゃあ、いけないんじゃないか。

渋谷——裏っていうほどのもんじゃないだろ。ショービズのバックステージなんか、大昔から映画もあるし、みんなもう知ってるよ。

松村——そうかなあ。

渋谷——だいたい、ディランのあのCDは、ブートレッグでやたらと出てるから、権利を守るためなんじゃないのか。

松村——まあな、ビートルズの赤盤青盤もブートレッグ対策だったからな。『ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』も、『ウイスキー・フラット』の対策だったな。

渋谷——『ウイスキー・フラット』、懐かしいな。

CamScannerでスキャン

ビートルズのハリウッド・ボウルのライヴで、プートレッグのベストセラーだったよな。

松村――『ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』、なんでCDにしないんだろ。

渋谷――だいたい、ボツにした未発表曲を最初に発表したのは、ビートルズの『アンソロジー』だぞ。

松村――う～ん。

渋谷――レコードっていうもの、それはアナログでもCDでもいいけど、そういうものに対する認識が変わってきているんだよ。昔は音を聴くツールはレコードしかなかったけれども、今はデジタル・メディアが発達していて、ほとんどがiPodやケータイで聴くようになってるじゃないか。CDプレーヤーの需要なんてメチャメチャ下がっているんと思うな。

松村――俺はCDラジカセを買ったぞ。

渋谷――なんだカセットなんて売ってるのかよ。

松村――うん。東芝のやつだ。

渋谷――とっくに終わったブランドじゃないか。お前は二〇一一年の日本に生きていないな。

松村――何、言ってんだ。便利だぞ。あの裏表で一二〇分っていうタイム感がいいんだ。渋谷のロッキング・オンに来るときも、カセット・プレーヤーでビートルズを聴きながら来るんだけど、電車でカセット・テープを取り出したら、車内の空気の流れが変わったな。

渋谷――そんなことやってると、いつか捕まるぞ。

松村――カセット聴くのは犯罪かよ。普通、音楽を愛する心を持っていればカセットだろう。

渋谷――お前、音源をダウンロードしたことなんかないだろう。

松村――俺は前から思っていたんだけど、ああいうことをすると音楽の言霊が抜けてしまうと思うんだ。俺はダウンロードされた音とカセットの音

を、言霊があるかないかで聴き分けることができる。

渋谷――それは、カセットのほうが音質が悪くて、テープ・ノイズが出るからだろう。

松村――いや、俺にはお前には聞こえない、音楽の言霊が聞こえるんだ。

小川――巣鴨あたりじゃ、カセットが主流みたいですよ。

渋谷――なんだそれ。

小川――巣鴨のレコード屋の売れ筋は、演歌とか浪曲とかのカセット・テープらしいです。

松村――一風堂でカセットのバーゲンやってたから、早く買いに行かなくちゃ。売り切れちゃうとマズイよな。

渋谷――小川、松村にｉＰｏｄ買ってやれ。

松村――ｉＰｏｄはカセットも聴けるのか？ M

テイラーの事件では、オバマにもバカ呼ばわりされました

渋谷——コンニチハ、カニエ・ウェストです。テイラー・スウィフトには本当に申し訳ないと思っている。俺はミュージシャンなんで反省は音楽で示すしかないと思って必死でアルバム作ったので聴いてほしいな。

松村——何だそれ。

渋谷——カニエ・ウェストという性格的に問題はあるけど才能のやたらあるヒップホップ・アーティストがいるんだよ。

松村——知っているよ。ジェイ・Zの『ザ・ブループリント』は本当に画期的な作品だと思うよ。

渋谷——……。

松村——何だよ。

渋谷——お前、本当に松村かよ。

松村——MTVのアウォードでテイラー・スウィフトにからんだんだよな。

渋谷——そうそう、知ってるんじゃないか。テイラー・スウィフトがMTVで受賞したとき、「この賞はお前じゃなくて、本来はビヨンセが受け取るべきものだ」と発言して、大ヒンシュクを買ったんだよ。

松村——そんなことを言われてもビヨンセも迷惑だよな。

渋谷——そうそう。だいたい十九才の女の子にそんなことを言ってもしょうがないじゃないか。賞をくれたのは、MTVなわけで、そうならそっちに言えよという話だよな。

松村——頭悪いんじゃないか。

渋谷——というか、そそっかしいんだよ。正義感は強いんだろうけど、短絡的に発想しちゃうんだろうな。こんなに寒いのはお前が悪いって気象庁に殴り込むようなタイプだよな。

松村——どういうタイプだよ。そんな奴いないだろう。

渋谷——でも、そういう発言が強い影響力を持つこともあって、ブッシュがインタヴューで、自分が現役時代に一番ダメージを受けて落ち込んだのはカニエの発言だって言ってたりするんだ。

松村——自分のCDが売れないのはブッシュのせいだとか言ったのか？

渋谷——言うかそんなこと。ハリケーン・カトリーナがアメリカ南部に大きな被害を与えたとき、ブッシュは黒人のことを何も考えていない、と非難したんだよ。それが凄く大きな反響を呼んだんだよ。本当にブッシュはこたえたみたいだな。でもテイラー・スウィフトのときは酔っぱらっていて最低だったみたいだぜ。

松村——反省したんだ。

渋谷——さすがに自分でも最低だと思ったらしくて、しばらく公の場から姿を消したんだよ。

松村——消えて何をしてたんだ？

渋谷——アルバムを作ってたんだよ。とにかく凄いアルバムを作って汚名を返上しなければと思ったんじゃないのか。

松村——プレッシャーだっただろうな。

渋谷——凄いプレッシャーだったと思うぜ。それが去年の年末にリリースされたんだよ。

CamScannerでスキャン

松村——どうだったんだ。
渋谷——もともと才能のある人間がそれだけのプレッシャーを感じながら死にもの狂いで作ったアルバムだから、凄まじいものになったんだよ。やたら気合とアイディアが凝縮されていてアルバム全部聴くとぐったり疲れちゃうんだよ。
松村——どういうアルバムだよ。
渋谷——あまりに凄くて、ピッチフォーク、『ローリング・ストーン』、『スピン』というアメリカの代表的なロック・メディアのベスト・アルバムの一位を全部独占しちゃったんだ。
松村——そんなに凄いのか。
渋谷——まあ、こういうメディアは普通ならロックを選ぶから、ここまでヒップホップが高く評価されるのはかなり異例なことだろうな。まあ『ロッキング・オン』もトゥエンティー・ファースト・センチュリー・スキッツォイド・マガジンと名乗っている以上、それなりに評価すべきなんだろうけど。
松村——そんなの、何十年も前のことじゃないか。
渋谷——俺が編集長だったとき付けてたコピーだ。
松村——思い切りアングラな感じだな。
渋谷——忘れたのかよ、俺たち二人で新宿の路上で『ロッキング・オン』を売っていた時代のことを。
松村——売ってねえよ、路上なんかで。
渋谷——でもロック喫茶でしか売ってなかったぞ創刊号は。
松村——まあな。それはいいけど、どうしたんだよカニエ・ウェストは。
渋谷——そうそう、そのキング・クリムゾンの〝トゥエンティー・ファースト・スキッツォイド・マン〟をサンプリングしてるんだよ。ブラック・サバスの〝アイアン・マン〟もやってるし、ブリティッシュ・ロック・クラシックがやたらフィーチャーされてんだよ。
松村——マンと付く曲が好きなのかね？
渋谷——……。

松村――ロック好きなんだ？

渋谷――カニエの場合は何でもありだな。とにかくありとあらゆるポップ・ミュージックからの引用があって、その知識とアイディアが半端じゃないよ。

松村――でも何でそこまで評価されてんだ？

渋谷――単純にクオリティーが有無を言わさないものになっているからだろうな。歌詞は自分はなんて最低な奴なんだというザンゲネタとエロネタばっかりだけどな。気合が入り過ぎて、自分でアルバムをテーマにしたショート・ムーヴィーまで作ったんだよ。

松村――どんな映画なんだ？

渋谷――宇宙からフェニックスが落ちてきてそれとやっちゃうっていう映画だよ。

松村――意味分かんないけど。

渋谷――かなり自己満足度の高い内容なんで俺もよく分かんなかった。

松村――駄目じゃないか。

渋谷――でも、その映画の一部が〝ランナウェイ〟というシングルのPVになっているんだけど、これがメチャクチャいいんだよ。

松村――映画はわけが分かんないんだろう？

渋谷――そうなんだけど、その部分だけはやたらカッコイイんだよ。とにかくややこしい奴なんで作るものもややこしいわけよ。このヴィデオもいろんなメディアで去年のナンバー・ワンに選ばれていたな。

松村――結局、アルバムもヴィデオも凄くよくてナンバー・ワンという事なわけね。

渋谷――まあな。そういえばカニエはグラミーでも、ずっと暴れていたな。

松村――何で暴れていたんだよ。

渋谷――俺にグラミーをよこせって暴れていたんだよ。

松村――獲ってるじゃないか。

渋谷――獲っているんだけど、それはブラック・ミュージックという枠の中の賞ばっかりで、いわゆる

CamScannerでスキャン

トップの賞である、アルバム・オブ・ザ・イヤーをよこせって暴れてるんだよ。

松村——凄い奴だな。

渋谷——きっとそういう怒りが全てのエネルギーになっているタイプなんだな。怒ってないと燃えないんだよ、きっと怒りがなくなると創作活動ができなくなっちゃうと思う。

松村——疲れないのかね。

渋谷——疲れると思う。でもカニエって疲れないと眠れないタイプだという気がするな。毎日、いろいろなことに怒ってクタクタになって倒れるように寝るんだよ。

松村——本当かよ。

渋谷——まあ想像だから何とも言えないけど、平和な日常だと夜眠れなくなるタイプだという確信があるな。

松村——疲れる人生だな。

渋谷——エネルギーと才能の絶対量が大き過ぎて、普通にしてるとてもてあましちゃうんだよ。常に放電してないと危険なわけよ。

松村——本人も疲れるけど、周りも疲れるよな。

渋谷——そうそう、こういう奴と付き合うと大変なことになっちゃうよな。愛情表現が怒りだから、いつも怒ってないといけないんだな。

松村——どういう愛情なんだよ。

渋谷——カニエにとって世界とつながっている回路が怒りなんだよ。凄くもっともらしいことを言えば、彼にとって世界は常に不安定なものであって、その不安定さにいつも怒っているわけ。そしてその不完全な世界に対抗するのが完全な音楽なわけよ。だから音楽は完全でなければならないし、そこを彼はいつも目指しているわけ。それって凄いエネルギーになるじゃない。

松村——そうなのかね。

渋谷——そうだと思う。才能もあるし、そういう彼の怒りが創作に転換されている構造は聴き手にとっ

てはありがたいことだよな。結果、こんな傑作ができたわけだから。

松村――怒れば怒るほどいい曲ができるんだ。

渋谷――そうだと思う。

松村――じゃあ、プロデューサーはいかにカニエを怒らせるかを考えればいいんだ。

渋谷――うーん、何か違う気がするけど、そういうことかもしれない。

松村――毎日、顔を見るたびに悪口を言うと、すぐにいい曲を書いてくるんだ。

渋谷――……。

松村――悪口もネタが尽きるだろうから、それを考え続けるのも大変だよな。

渋谷――何か、どんどん間違った方向に行ってる気がするけど、どこが間違っているか分からなくなってきたんで帰るわ。**S**

CamScannerでスキャン

ほかのことはともかく、この対談の日程は忘れないようにお願いします

渋谷――コンニチハ、ロン・ウッドです。昔ジミヘンと暮らしていたことをすっかり忘れていました。

松村――ロン・ウッドってジミヘンと暮らしていたんだ。

渋谷――そうらしいぜ。ノッティングヒル・ゲイトのアパートで二週間くらい一緒に住んでいたらしいんだ。

松村――なんで急に思い出したんだ？

渋谷――ジミヘンの曲を自分のラジオ番組でかけて思い出したんだって。

松村――ジミヘンの曲をかけたことなかったのかな。

渋谷――知らないよ。何十年も忘れていたわりに

CamScannerでスキャン

はそのときジミヘンからもらった犬の名前とか種類とか細かいことまで思い出してたぜ。バセット・ハウンドでルーピーっていう犬らしいぜ。

松村――でも、それって昔矢沢永吉と暮らしていたんだけど、すっかり忘れていて思い出したとか、安室奈美恵と同棲していたけどすっかり忘れていて、テレビ観たら思い出したとか、そういうレベルの話だろう。ありえないよ。

渋谷――というか、そういうレベル以上の話だけど、それがロン・ウッドの凄いところなんじゃないか。俺も最近、テレビのリモコンで暖房つけようとして、なかなかつかなくて修理呼ぼうとしたからな。

松村――それは単なるボケで全然違うだろう。だいたいチャンネル付いているリモコンをなんで暖房のリモコンと間違えるんだよ。

渋谷――想像力が豊かなんだな。豆腐にソースかけて、変だなと思いながら二、三口食べたぞ。

松村――それ自慢なのかよ。

渋谷――お前だって忘れることあるだろう。

松村――というかほとんど憶えられないから忘れないな。

渋谷――なんだそれ。

松村――憶えようとするから忘れるんであって、何も憶えなければ何も忘れないんだよ。

渋谷――なんかよく分かんないけど、凄く深いことを言われたような気がするな。

小川――社長、大丈夫ですか。全然深いこと言われてないので気を確かに持ってくださいね。松村さん開き直っているだけですから。

羽鳥――ラヴ・イズ・オーヴァー。インドでは憶えることも忘れることも自然な心の新陳代謝として考えられています。心の自然な動きに逆らってはだめです。

渋谷――誰だ、お前。

小川――だから「ロッキング・オン」編集部の羽鳥ですよ。前にも出てきたじゃないですか。

渋谷――北欧人と結婚した、英語をペラペラ喋る羽鳥だな。

小川――そうですよ。

渋谷――でも、なんかキャラが変わっていないか。

小川――インドに行って、帰国して体調崩して会社休んでたんですけど、出社したらこんなキャラになってたんですよ。

羽鳥――ラヴ・イズ・フォーエヴァー。社長や松村さんも、もっと大きな時間の中で生きる心を持たなくてはだめです。夜の星を見たのはいつですか。

渋谷――ウルサイ。なんで腹を壊したくらいでキャラが変わっちゃったんだよ。

小川――だから腹を壊したのが原因じゃなくて、インドに行っていろいろあったらしいですよ。

渋谷――なんでインドなんかに行ったんだ?

小川――旦那の友達がインド人で、その結婚式があったらしいですよ。

羽鳥――ラヴ・サイケデリコ。ガンジスの流れを見ていると記憶のひとつひとつのあるなしなどさいなことだと分かります。社長も松村さんも一度はインドに行かれたほうがいいですよ。

渋谷――なんか凄くウザいキャラになってんだけど、どうにかしろよ小川。

小川――何を言っても遠くを見る目をして聞かないんですよ。

渋谷――それに英語がなんでJポップになってんだよ。

小川――知らないですよ。それで日本のリアルとつながろうとしてるんじゃないですか。

渋谷――何、ディスク・レヴューで書くようなこ

CamScannerでスキャン

とをお前も言ってんだ。早く社会復帰させろ。

松村——オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ。お前の会社大丈夫か？

渋谷——なんでお前まで英語なんだよ。

松村——いや、合わせたほうがいいかな、と思ってさ。ラヴ・ミー・ドゥ。

渋谷——やめろ、頭が変になる。

小川——でも、年寄って昔のことはよく憶えていて、最近のことは忘れるというじゃないですか。なんで昔のことを忘れたんでしょう？ 社長もロッキング・オン創刊当時のことはやたら憶えているけど、最近は取材の日程とかすぐに忘れちゃいますよね。

渋谷——忘れないよ。昼メシ食べたかどうかはよく忘れるけど。

松村——お前、それヤバいよ。メモとか取ってチェックしたほうがいいぜ。オール・マイ・ラヴィング。

渋谷——冗談に決まっているだろう。なんでメシ食ったのも忘れるんだよ。それに英語をやめろって言っているだろう。

松村——そういえばジミー・ペイジも昔のことをよく憶えていたけど、最近のことになればなるほど記憶が曖昧になってたとか、お前言ってたじゃないか。

渋谷——そうなんだよ。でもジョン・ポール・ジョーンズは何もかも忘れていたけどな。

松村——お前も『ロッキング・オン』創刊当時のことはやたら憶えていて、いろいろ言ったりするけど、憶えているのはそこだけなんじゃないか？

渋谷——そんなことはないと思っていたけど、最近八〇年代に『ロッキング・オン』を熱心に読んでいた人にいろいろ訊かれて、自分が何も憶えていないんで驚いたぜ。

CamScannerでスキャン

松村――八〇年代って、俺たちは二十代後半から三十代前半で、さすがにまだボケてないだろう。

渋谷――どうなんだろう、きっと自分の中で記憶の優先順位があって、いらないと思う記憶は勝手に消去しちゃうんだと思う。そのときに訊かれたのは、あまり好きじゃないアーティストのことで、そのアーティストが表紙になった号の内容だったんだよ。それはきっと憶えていたくなかったんだな。

松村――勝手な奴だな。

渋谷――でも、そんなもんだと思うよ。そういえば、本当に今日昼メシ食べたかどうか不安になってきたな。ホール・ロッタ・ラヴ。

松村――それじゃ俺帰るな。キャント・バイ・ミー・ラヴ。S

アーケイド・ファイアのグラミー受賞は素晴らしい、でもあらゆる賞はすべてクソだ！

渋谷――コンニチハ、アーケイド・ファイアです。僕たちがアーケイド・ファイアです。

松村――何で二回も挨拶するんだよ。

渋谷――アーケイド・ファイアがグラミーで最優秀アルバムを受賞したときに「僕たちがアーケイド・ファイアです」って言ったんで、それを真似したんだよ。

松村――それって普通の挨拶じゃないか。

渋谷――普通じゃないだろう。だってマドンナが受賞したとき「私がマドンナです」とは言わないだろう。

松村――確かに。

渋谷――スティーヴィー・ワンダーが受賞したときに「僕がスティーヴィー・ワンダーです」とは言わないだろう。

松村――分かったよ。

渋谷――ブルース・スプリングスティーンが受賞しても「僕がブルース・スプリングスティーンです」とは言わないぜ。

CamScannerでスキャン

松村——しつこいよ。じゃあ何でアーケイド・ファイアは自己紹介したんだよ。

渋谷——簡単に言ってしまえば無名だからだよ。

松村——アルバムは売れてるんじゃないのかよ。

渋谷——売れているよ。前作の『ネオン・バイブル』が初登場二位、受賞作の『ザ・サバーブス』は一位だからな。

松村——凄いじゃないか。

渋谷——ただ一般的な知名度はそんなに高くないから、グラミーの会場でも意外な受賞に微妙な空気になったらしいんだよ。それでメンバーが、その空気を読んで皆さんは知らないでしょうけど僕たちがアーケイド・ファイアですというニュアンスで自己紹介したんだ。

松村——意外だったんだ。

渋谷——他のノミネートがエミネムとかレディー・ガガだから、それに比較すると地味かもしれないな。でも素晴らしい作品で、二〇一〇年を象徴するアルバムだと思うな。

松村——それならよかったじゃないか。

渋谷——どうなんだよ『英国王のスピーチ』。あれが二〇一〇年を象徴する映画だとお前は思うのかよ。

松村——何だよいきなり。『英国王のスピーチ』って、今年のアカデミー賞かよ。

渋谷——そうだよ。アカデミー賞って、よくこういう選び方をするよな。

松村——グラミーの話じゃなかったのかよ。

渋谷——グラミーのことを考えてたら、急にアカデミー賞のことを思い出したんだ。どうなんだよ『アメリカン・ビューティー』。あれが二〇〇〇年を代表してるか？　誰も憶えていないだろう。『マグノリア』にやれよ。

松村——観てないから知らないよ。

渋谷——アーケイド・ファイアの『ザ・サバーブス』が凄かったのは、時代の全体性を獲得してたからなんだよ。

松村――何だよ、戻ったのかよグラミーに。
渋谷――タイトルが素晴らしすぎるよな。
松村――『郊外』って、そんなに凄いタイトルか。
渋谷――このタイトルがすべてだろう。だって『郊外』だぜ。このアルバムのメッセージは、世界がすべて郊外化するという、そういうことなんだよ。
松村――よく分かんないんだけど。
渋谷――どうなんだ『シカゴ』。『千と千尋』にやれよ。
松村――何だよ、またアカデミー賞かよ。
渋谷――この監督、ボブ・フォッシーを五倍くらいに水で薄めた感じがして嫌なんだよな。
松村――疲れるから、グラミーの話かアカデミーの話かどっちかにしろよ。
小川――社長は『Cut』でアカデミー賞批判の特集をやったんで、言いたくてしょうがないんですよ。でも『英国王のスピーチ』はないですよね。
渋谷――こんなミトコンドリアみたいな奴にもつっ込まれるくらいなんだぜ、今年のアカデミーって。知ってるか、ミトコンドリアは生殖行為じゃなくて細胞分裂で増えていくんだぜ。小川も三日に一回細胞分裂するんだよ。あっという間に増えちゃうんだよ。
松村――小川の細胞分裂なんかどうでもいいけど、賞っていうのはそうやってつっ込まれることによって、逆に権威が上がっていたりするもんだよな。アカデミー賞批判も、逆に言えばアカデミー賞の思うツボみたいなところもあるんじゃないか。
渋谷――お前、鋭いな。それは確かに言える。それで、どうなんだよ『フォレスト・ガンプ』。
松村――お前はどうしてもやりたいわけね。
渋谷――前にも言ったけど、あの映画の善意全体主義的なところが嫌いなんだ。
小川――僕、若い頃のトム・ハンクスに似てるって言われたことがあるんですけど。
渋谷――お前は黙って細胞分裂してろ。
松村――お前、本当にあの映画嫌いだよな。

CamScannerでスキャン

押井――だって、あれこそ恋愛をむいているものじゃナイ
アミニアンだぜ。ロック聞いてシラケテキストしてる
奴なんか敵だった映画だぜ。

松村――そんな映画だった。

今川――違うと思います。

押井――ウルサイ、お前らにはわからないんだ。絶対、クラスにはエリートとゼメキスみたいな、変な暗いオタクがいたんだ。俺がツェッペリンで盛り上がっていると馬鹿にしあがって。だからなパンの中にガエルを入れてやったんだ。

松村――お前は小学生か。

今川――アーサイド・ファイアはどうなったんですか?

押井――だからあのアルバムは世界が滅亡だと言ったところがミテイんだ。

松村――そこからどうも話が進まないじゃないか。

押井――どうなんだよ『ロッキー』。

松村――『ロッキー』ってアカデミー賞取っているんだ。

押井――謎だろう。その年『タクシードライバー』が公開されているんだぜ。ノミネートもされてるし。今、『タクシードライバー』を落として『ロッキー』を入れたってことを、ちゃんと正しいと主張できるアカデミー会員は絶対にいないと思うな。

松村――今『CUT』見たんだけど、『大統領の陰謀』も『ネットワーク』もノミネートされてるのな。何か勢いで選んじゃったんだろうな。

押井――だいたい賞ってそんなもんだよな。後なら考えるとおよそ見当はずれみたいなもんが多いんだよ。

今川――でも社長は何でそんなに賞を目の敵にするんですかね。学歴も目の敵にするし。僕らのような高学歴エリートをみたら敵視するのは自分に学歴がないからですよね。賞もそうなんじゃないですか? ひょっとして社長って賞とかもらったことないでしょう。

渋谷――……。
松村――小川、俺は今のひと言でお前のサラリーマン人生は終わったと思うな。
渋谷――うるさい、俺だって賞ぐらい取ったことあるよ。小学校のとき、作文コンクールで新宿区の優秀賞もらったぞ。中学のときだって、校内の作文コンクールで優勝したぞ。
松村――作文ばっかりじゃないか。
渋谷――幼稚園のとき、ニコニコ歯みがきコンクールでニコニコ賞もらったぞ。
松村――憶えてるなよ、そんな昔のこと。俺は帰るぞ。
小川――社長、アーケイド・ファイアの話はどうなってるんでしょう、松村さん帰っちゃったんですけど。
渋谷――原稿で書く。それでノーベル賞取る。**S**

CamScannerでスキャン

あとがき

まず、最初に、この対談がどういうことで始まったのか、説明しておきます。初期の「ロッキング・オン」は隔月刊であった（一番最初は季刊だった）。二か月に一回の発行だったから、どうしても新しい情報がもれてしまうことになる。つまり、一月に発行される号には一月の情報は載っているのだけど、二月の情報は間に合わない。次は三月に発行される号で、二月の情報はここに後追いのように載ることになる。これをなんとかしようというのが、この対談だったのだ。

締め切りのぎりぎりまで待って、ひとつでもふたつでも二月の情報を載せたいということだ。当然時間の余裕はないので、書くよりも早いから喋ることになる。喋ったものを原稿にするのにも時間がかかるので、喋るように書くことになる。二人で向かい合って座って、渋谷が自分の発言を数行書くと、原稿用紙を寄越し

て、僕が自分の発言を書く。無言でこういうことを繰り返すわけで、時間がなくて喫茶店でやったこともあったから、横で見ていた人はこいつらアブないんじゃないかと思っただろうと、今省みる。それでも、数時間で必要な数頁分の原稿が、ぴったり出来上がる。

そのうちに、もっと早くするために、発言者に関係なく、各々が一枚ずつ書くようにする。つまり、渋谷が僕の発言を書いたり、僕が渋谷の発言を書いたりするようになったのだ。ここらへんで、暗黙のうちに、この対談における二人のキャラクターを決めたのだろうと思う。そうでなければ、出来ない。

こういうふうになるというと、どうしてもエスカレートしてしまう。次は、前半分と後半分で、分けるということになる。もう、向かい合って座って、変な目で見られることもない。片方が書いてファックスで送り、片方も書いて送り返す。で、最後には、一月交代で一篇全部ひとりで書くことになる。ということなのです。

もう情報のもれを補う必要もなくなり、ただただ面白いものを書けばいい。ときには、長く続き過ぎているという意見もあった。

CamScannerでスキャン

古くからの読者は知っているだろうけどれど、実はこの対談はもう何度も終わっているのだ。おそらく、三〜四回は終わっているのではないだろうか。その度に、やめないでくれという読者の要望をいただいて、今日まで来ている。読者の皆さんには、感謝の言葉しかない。ありがとうございます。白髪になるまで続けられたのは、あなた達のおかげです。

この全百一篇の中から自分が書いたものを挙げようと思ったのだけど、はっきりとしないものもある。つまり、キャラクターを設定したために、どちらが書いたのか分からなくなってしまったのだ。とりあえず、二十四篇は僕が書いたものだと思うけれど、渋谷の手が入っている可能性もある。もちろん、その逆もありえる。また、ふたりで書いたとしか思えないものも三篇あった。渋谷の言い回しと僕の言い回しが、複雑に交じっている。「さよなら大類。そして今までありがとう!」は実際に三人で鼎談して、担当者がまとめたものだ。つまり、渋松大鼎談である。

最近は編集部が「今月は渋谷が書きます」とか「今月は松村さんが書いてください」とか言ってくるので、

渋谷が書きたいことがあるんだなと思っていたのだけど、今回読んでみたらレッド・ツェッペリンばかりで、どうしてこんなにロバート・プラントは悪く言われなければならないのかと、可哀そうで涙ぐんでしまった。

最後になってしまいましたけれど、推薦文を書いてくださった桑田佳祐さんありがとうございます。

松村雄策

CamScannerでスキャン

渋松対談　青盤
2011年11月11日　初版発行
著者　渋谷陽一、松村雄策
発行者　渋谷陽一

編集人　山崎洋一郎
編集　羽鳥麻美／古川琢也／塩澤淳
編集協力　庄司佳世／松村耕太朗／石山真由／高宮望
アート・ディレクション&デザイン　春日優子（YKD）
表紙イラスト　泉沢英治
発行所　株式会社ロッキング・オン

〒150-8569　東京都渋谷区桜丘町20-1　渋谷インフォスタワー19階
電話 03(5458)3031
印刷所　凸版印刷株式会社

乱丁・落丁の際はお取り替えいたします。
本書の一部または全部を無断で複写・複製することは、法律で定められた場合を除き、著作権の侵害となります。
©2011 rockin'on Inc. Printed in Japan. ISBN978-4-86052-100-4
ロッキング・オン　ホームページ　http://rock-net.jp/